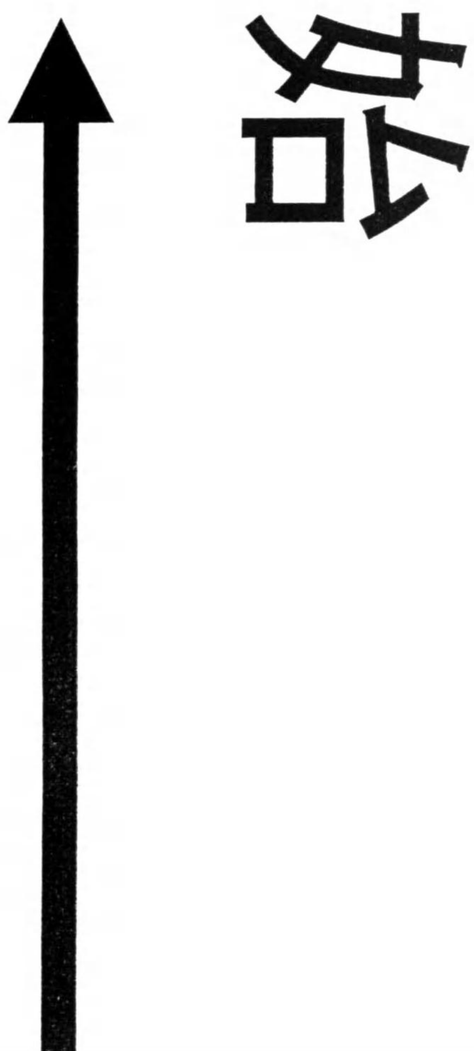
79-238□
1200701720746



自具一隻眼

渡邊國武題

師門
亦自
清閑
國立公文書館

日本之陽明學叙

陽明學は東洋に發達せる一種の哲學なり、其理論は未だ必ずしも深遠なりと云ふを得ざるも、其實行上に關係あるの點は、實に偉大なりとす、是故に世の教育家を以て自ら任ずるもの、一たび陽明學を講究せんか、其大に得る所あるべきは疑を容れざるなり、今德川時代に於ける儒教哲學の分派を算へ來たれば、朱子學派、古學派、陽明學派、折衷學派の四種あり、就中陽明學派は其人甚だ多からずと雖も、皆腐儒の徒にあらず、或は省察に或は事功に鞠躬盡瘁して、我名教を裨補するもの、決して尠少なりとせず、即ち陽明學派は四種の學派中最も實行的のものと謂ふを得べきなり、是れ本と陽明の學說に淵源するが故に、支那にありても陽明學派は朱子學派より一層實行的なり、然れども我邦の陽明學派は支那の陽明學派に比すれば、適に活潑々地の精神に富み、且つ其實際的方面に於て成遂

せる事跡の如きも、支那の陽明學派をして後に瞠若たらしむるに足る、熊澤蕃山の如き、大鹽中齋の如き、維新前後に事功を以て顯はれたる諸名士の如き、皆强大なる意思力を有して、敢爲强行、萬難を排して進むの氣概ありき、彼等の所爲、間、峻厲激越にして法度の外に出づるものありと雖も、未だ遽に陽明學を非議すべからず、若し能く其短處を防遏して、獨り其長處を培養せば、決して今日の教育に寄與する所なしとせざるなり、然れども尙ほ我邦の陽明學派に就きて注意すべきものあり、何ぞや、是れ他なし、陽明學の異端として排斥されたること、是れなり、幕府の教育主義は始めより朱子學にして、殊に寛政年間公然異學を禁じ、朱子學を奉ぜざるものをして盡く屏息せしむ、然れども陽明學は內部より精神を策勵するの學なり、如何んぞ根柢より之れを撲滅するを得ん、竊に之れを講究するものありて緜々として命脈を傳へたり、唯、夫れ權勢の爲めに抑壓せられたるを以て、其傳播すべき進路に於て幾多の障碍に遭遇するを免れざりき、今や自由思想の天地なり、諸學競ひ起り、異說爭ひ生ず、此時に際して豈に獨り陽明學をして鬱屈して伸びざらしむべけんや、頃ろ文學士高瀨武次郎君「日本之陽明學」を著し、來たりて序を余に需む、余披きて之れを見るに、我邦に於ける陽明學を史的に叙述し、各、其學派の人を網羅して、之れが學說を論評し、人をして一讀其梗概を知らしむ、世の教育家之れを以て其品性陶冶の資料とおさば、豈に多少の効なしとせんや、印刷成るに及んで、偶、感ずる所を筆して以て之れが序となす、

明治三十一年十一月十五日

井上哲次郎識

例言

一本書は專ら史的に研究し、序論に於て陽明學全系統の梗概と、彼我王學者の異點とを叙し、本論に於て、我國に於ける陽明學を詳述す。期する所は、王學の鬱屈を解き、青年の心術を涵養するに在り。

一本書中學者の配列は、專ら學統に從ひ、學統明かならざる者、或は自修せる者は、年代に依りて之を其間に列擧せり。

一本書中維新前後の豪傑、及び方今の名士を叙する所精粗一ならず。甚しきは、單に其名を列するに止まる者あり。然れども、此間毫も褒貶に意あるにあらず、唯だ著者の薄識と、材料の欠乏の然らしむる所のみ。此れ著者が最も遺憾と爲す所にして、幸に他日之を整頓するの機あらんことを祈る。但或は材料の富贍なる者ある

も、世人の早とに熟知する事業は、暫らく之を省けり。

一本書著述に際し、子爵渡邊國武先生は本書の爲に卷首に題せられ、文科大學長文學博士井上哲次郎先生は序文及び懇篤なる指導を與へられ、鐵華主人吉本襄君は資料を寄與せらるゝを極めて多かりき。仍て斯に特筆して感謝の意を表すと云爾。

明治三十一年十一月

著者識

日本之陽明學目次

序論

發端　周末の學術　百家競ひ起る　宋明の學術　玄理を探求す……一……二

陸象山　麒麟兒　陸王學の起因　鵝湖の會　豪氣人を壓ふ　朱陸學說の異同　當時學者の通弊　朱陸の末流　隔世の知音……三……六

王陽明　寧馨兒　五溺一歸正　龍場に赴く　廓然大悟　坐禪を非とす　汀漳を平く　心中の賊を破る　宸濠を生擒す　致良知の教を揭く　遺言……七……十一

心即理　陸象山の心即理　王陽明の心即理……十三……十四

知行合一　理想と實現　可知而不可行的　東西知行論の比較　知德因果關係論　立言の旨趣相同からず　二種の論者……十六……十八

致良知　四言教　良知即ち良心　東西洋の良心論者　良心說　普遍的　先天的　道理　良知の最廣性質　天人合一　佛家の說　進化論者の說……十九……二十三

祖述者　黃石齋　劉念臺　清朝と陽明學……二十四

日本之王學者概括　江戸文學　中江藤樹　熊澤蕃山　北島雪山　三宅石庵　鵜學問　三重松庵　王學論談　三輪執齋　川田雄琴　石田、手島、石川諸子　中根東里　王學の鬱屈　鎌田柳泓　梁川星巖　竹村悔齋　大塩中齋　佐藤一齋　吉村秋陽　山田方谷　奥宮慥齋　池田草庵　春日潛庵　伊藤茂右衛門　西郷、大久保、海江田等諸士……二十四……三十二

陽明學の性質　支那王學の弊風　日本王學の美風　我國民の性質　王學の得失　本書の徽志……三十二……三十六

本論

第一　中江藤樹

生長　就學　報恩を期す　藤樹の贈男……三十七……三十八
朱學時期　格法家　風樹の感　孝養の爲に官を去る……三十九
郷先生　了佐を敎ふ　朱學を疑ふ……四十
日本王學の曙光　豁然貫通　拘泥の非を悟る　終焉……四十一……四十二
學說＝世界觀　宇宙の本源　天人合一　東西學說比較……四十二……四十四
天道圖說　天道圖の解　元素　摘要……四十五……四十七
人生觀　天人一貫の說　二氣五行　惡の起源　人道の解……四十八……四十九
修德の工夫　概說　復古を非とす　心法圖　心法解說　摘要　凡心圖　其解說　悟道圖　其解說　貪獸心　貪獸心の解說　評論　天命性道合一圖說　其解說　概評……五十……五十七
格知誠意（致知　格物　意の解　評論……五十八……六十
教育　前後二途に分る　取舍　立志　凝滯なし　藤樹規　善惡の標準　疑問　詩歌若干　末流二分す……六十一……六十六
著作　凡二十六種……六十九
孝養　全孝說　孝及び愛敬　五倫五常　評論　侍養　孝は重く忠は輕し　忠は重く孝は輕し……七十……七十四

德化　實性　門人を戒む　聖人の遺蘊　弔客感歎す　賊を化す　轎夫を化す……七十五……七十八
論贊　傳記時期　頓悟　感化力　德行　敎學主旨　全孝　愛敬　近江聖人　邦人の弊習　進化猶攻璞　敎育家、宗敎家　藤門之士　特創の見　慨悔の君子　杉浦天台道士顧背像……七十八……八十二

第二　熊澤蕃山

蕃山の幼時　外祖に養はる　岡山に仕ふ　克己耐忍　克己の實況　天草の亂　肉跳り血涌く　法を犯して軍籍に入る　時勢を洞觀す……八十三……八十五
苦學時期　兵書を學ぶ　馬丁も猶ほ義を知る　藤樹の德に感ず　就學　歸省　苦學の實況　王學者と爲る……八十六……八十九
經綸　復た岡山に仕ふ　精神は百事の基礎　心法を練ること三年　王學振興す　賢良の士　通信敎授　池田光政藤樹を招く　將軍もか蕃山を召見んとす　全盛　兩雄相評す　國政に參與す　治績　妙へに水理を解す……九十……九十五
老處士　靈宗の忠告　蕃山村に遯世す　京師に歸る　琴書自ら娛む　從遊の士　風流佳人の會　誹謗起る　其の原因　壓制　吉野に赴く　鹿背山の棲居　風して愈々高し　明石に移る　郡山に棲む　著述　古河に移る　封事を上る　裕如晏如たり　公明正大　懷鄉の情　易簀……九十六……百〇四
取舍の見地　師弟相承　彼の精神を取れ　時處位の達士　卓見　評朱王二子　二子の長所　朱子の短所　王子の短所　王學者の神髓　王學者の最好摸範……百〇五……百〇八
著作　凡二十四種……百〇九
論評　追慕者　遺風……百十

略傳　丈夫の節操　善書　奇行　君子の大道　眞價は其書名に掩はる……百十一……百十三

第四　三重松庵

略傳　傳習錄より入る　陽明學名義成る　著書の志望　致良知　良知は普遍的なり　四書五經は吾心の註文也　和行合一　大橋訥庵の知行合一論　垂教を待つ……百十四……百十七

第五　三宅石庵

略傳　地歩　工書　鵜學問……百十八

第六　中根東里

略傳　孝養　禪門を出つ　徠門に入る　修辭の非を悟る　性行　皮履先生　王陽明を尊信す　新瓦を著はす……百二十……百二十二

著作　凡二種……百二十二

教學＝學說　小陽明　根本主義　立證　學則　萬物一體を說く　一體之訓　淵源を示す……百二十三……百二十五

教育　教育主義　復柳圃某書　靜坐と靜立　和歌二首　飼藻　靜立を許す……百二十六……百二十九

第七　三輪執齋

略傳　傳習錄標註成る　告文　緣機熟す　周易進講手記　王文成公の畫像　蛻巖執齋を推す　永言二首　終焉……百三十……百三十四

學說＝心之本體　心と鏡の對比　善惡の辨別　善惡の標準　直覺派の難關　基礎立たず　意之動　萬人同性論　何故に善を好み惡を嫌ふか　理由　良知と良心……百三十五……百四十一

著作　凡十二種……百四十二

第八　川田雄琴

略傳　明倫堂を督す　傳習錄筆記　箕裘を紹く……百四十二

第九　石田梅巖　附手島堵庵、中澤道二

略傳　地歩　著作數種　心學者の傳統……百四十

第十　鎌田柳泓

略傳　朱王一致論者　品評……百四十四

著作　凡十二種……百四十四

心の花實　心的作用を十四に分つ　思の一字を主とす　倫理的心理學　四名公語錄……百四十五

第十一　竹村悔齋

略傳　評論　無知妄行を誡む……百四十六

第十二　大鹽中齋

略傳　悲酸なる境遇　修學　當時の學派　古本大學より入る　仕路　吟味役と爲る　妖教を除く　官紀を振肅す　僧侶の非行を糾す　招隱詩……百四十七……百五十

交遊　近藤守重と交はる　賴山陽と交はる　山陽の詩若干　中齋と山陽の交情　送序　異種の知音……百五十一……百五十七

詣藤樹之墓　所感の詩　湖上の雖　死に瀕す　致良知存誠敬の工夫　晴朗なる湖上の佳景　我を金玉にす　京師を眺む　大に得る所あり……百五十七……百六十

洗心洞劄記成る　四方の名士に寄す　佐藤一齋の書簡　敬服　陽朱陰王　警戒　奬勵……百六十一……百六十三

登富嶽　歸太虛の工夫　和韻數首……百六十四

教學＝教育の主義　教育の主義　王陽明に則る　呂新吾に則る　祭王陽明文　中齋の志望……百六十五……百六十七

學說＝第一綱領＝太虛說

太虛の體　空言なし　心は心藏なり　心の體を說く　心身の關係　理氣の妙用　太虛の非空　聖人の心量……百六十八……百七十三

太虛の用　二種の虛　五常と太虛の用　人と器の差　有形物の虛　博物學の功　人我一貫……百七十四……百七十五

歸太虛の工夫　工夫の狀況　弊を戒む　絕欲と寡欲……百七十六……百七十八

太虛說を評す　少同大異　發途……百七十九……百八十

第二綱領＝致良知　理想的人物　頓悟を談す　痛歎　借念の靈岡……百八十一……百八十三

第三綱領＝變化氣質　消極的方法　客氣の害……百八十四……百八十五

第四綱領＝一死生　古來の死生說　英雄と死生禍福　死生說の由來　殺身成仁……百八十六……百八十八

第五綱領＝去虛僞　私欲を除去す　誠敬を存す……百八十九

五綱領相互の關係　同格若くは主伴　理論と實行　學理の適用……百九十……百九十一

天人合一（唯心論）　自然に則る　迷想　倫理を主眼となす　純乎たる主觀的　力寸太虛を包む　天人合一の觀法……百九十一……百九十六

良心論　東西洋の長所　孟子の良心說　其根源　心の三作用　良心即良知……百九十七……百九十九

性善惡論　善惡皆な天理　良知は普遍的なり　惡の起源　性有三品……二百……二百二

識見　卑名利　心學の弊害　物理的知識　爲學の工夫　豪傑評　大悟徹底　勇猛精進　推論法……二百三……二百七

教育法　洗心洞學名學則并讀書々目　洗心洞入學盟誓……二百八……二百十

著作……二百十一

献身的事業　貪吏富豪の奢侈　元旦詩　檄文　皇室式微　王政復古　舉兵　人相書……二百十二……二百十五

評論　陽明と中齋　伯夷と中齋　特得の見　先驅　重言　空間と時間　陽明學の本領　輕舉誤事　日本哲學史上の位置……二百十六……二百二十

第十三　佐藤一齋

略傳　王學を基礎と爲す　林氏塾長と爲る　王子景仰の狀……二百二十一……二百二十二

學說＝善惡論　同性異質論　善惡の起源……二百二十三…二百二十四
死生觀　易理に通ず　大悟徹底……二百二十四
宿命論　極端なる宿命論　自由意志と宿命論　言志錄　門人……二百二十六
著作　凡八種……二百二十六

第十四　吉村秋陽
略傳　事業　訂交の士　吉村斐山　吉村彰……二百二十七…二百二十八
教學　學問の要　三戒　三工夫　病間の工夫　王文成公傳本序　倫常を說て良知に歸す　道器一なり　陽明子の功　百世殊絕の人物　元旦試筆　摘要……二百二十九……二百三十
著作　凡七種……二百三十

第十五　山田方谷
略傳　十四歲の述懷　修學　格物を主張す　方谷の敎旨　事業　治績　宛然藩山の經綸に似たり　身を以て爭ふ　晚年　閑谷黌　藩山を追慕す　雅懷　門人……二百三十一…二百三十六

第十六　河井繼之助
略傳　遊學　方谷の門に入る　執政に知らる　去就の機　王師にあらず　劇戰　戰歿　性行　事功家　碑銘　至剛決心……二百三十七……二百四十

第十七　金子得所
略傳　幼より非凡　遊學　弊風を矯正す　尊王の志　感化　經綸　藩政大に擧る　非命に斃る　碑銘……二百四十一…二百四十四

第十八　奧宮慥齋
傳　聖學問要　土佐の王學　事業　交遊　門人　存齋及岩治氏　定論　所見濶大　奧宮正治……二百四十五…二百四十六

第十九　尾崎愚明
學歷　性行　王學の要　王陽明の偉業　人生の快事　一誠……二百四十七…二百四十八

第二十　中尾水哉
學歷　古武士の如し　著作　氣品　山崎勇三郎……二百四十八

第二十一　中江兆民
學歷　陽明學の性質　主觀的　青年と陽明學……二百五十

第二十二　川尻寶岑
略傳　心學者の系統　內部文明論　寶岑の氣格……二百五十…二百五十一

第二十三　池田草庵

略傳　訂交の士　朱王二子の功　致良知と王陽明　著作……二百五十二

第二十四　中島操存齋

略傳　奇士　王學を評す　曉得……二百五十三

第二十五　林良齋

學歷　讀藩の王學　無我を以て主眼と爲す　著作　訂交の士……二百五十四

第二十六　東澤瀉

略傳　靈機に觸る　必死組を興す　自審自贊　繼承者　東敬治……二百五十六

著作　凡十一種……二百五十六

第二十七　春日潛庵

略傳　資性　王陽明文錄より入る　久我家の執事　咫尺天顏　知事に任せらる　致仕　南洲翁譜時事　王學者としての潛庵　特得の見　水體即工夫　性善論　遺詔　死生觀　大悟徹底　交遊　寄南洲翁書　繼承者……二百五十七……二百六十一

學歷　曉に王學を喜ふ　資性忠孝　詩數首……二百六十二

第二十八　梁川星巖

學歷　傳習錄に眂す　梁山及松陰　小楠及景岳　幽谷及東湖……二百六十四

第三十　雲井龍雄

學歷　克己勉勵　最も王學に通す……二百六十五

第三十一　鍋島閑叟

學歷　永山二水と俱に王學を喜ふ　學風變ぜんとす　終始渝はらず　修養の功　述懷數首……二百六十六

第三十二　島義勇

略傳　仕途　擧兵　同好の士……二百六十七

第三十三　伊藤茂右衛門

學歷　自修王學者　四郷大久保と友たり　海江田長沼之を師とす　天下の公學　學風　大久保甲東……二百六十八……二百六十九

第三十四　西郷南洲

學歷　涵養の功　愛讀の書　遺訓　潛庵を慕ふ　頭山滿……二百七十

第三十五　海江田信義　十二
學歷　武文館　練心中之武　心身一進流　就學……二百七十一
自跋
索引

日本之陽明學目次終

日本之陽明學　全

大學院學生
文學士　高瀨武次郎著

序論

周宋の學術

渺乎たる西鄒の禹域、今や則ち老いたりと雖も、未だ曾て初めより老いたりしにあらず、嘗て東洋の文明國を以て稱せられ、我邦文化の淵源たりしなり。上下悠々四千歳、學術技藝を以て命ずべきの世、何ぞ限らん。就中其最も旺盛なる者、前きには春秋戰國あり、後には趙宋朱明あり。春秋戰國の世に當り、上下混亂、綱紀廢弛、思想束縛を脱し、言論自由を得しかば、百家相競ふて治國濟民の術を講せり、而して之が端を開きし者、孔老二子を以て其巨擘と爲す。孔子は孝悌忠恕を推演して仁道を天下に行ふ、弟子三千人、身六藝に通ずる者七十餘人。孔子の孫に子思あり、中庸を作りて誠を說く。尋て孟子出ててて、孔子を祖述し、楊墨を排し、仁義を說き、性善說を主張す。孟子に稍々後れて荀子出つ、禮樂を主とし、性惡說を唱へ、非十二子篇を作りて、當時學士の弊風を痛論す。蓋し孟荀は戰國時代儒家の泰斗なり。道家には則ち老子を以て祖となす、老子は孔子に先ちて荆楚に出て、退歩を以て主義とし、自然を尙ひ虛無を唱ふ、蓋し當時の弊習に憤激したる結果なり。書五千言あり、所謂

百家競ひ起る

道德經是れなり。老子の後百年にして列子出づ、列子に尋て莊子起り、共に老子を祖述し、書を著はして孔門の士を歷詆す。關尹子、鶡冠子等、皆な道家の人なり。墨子は兼愛說を唱へ、楊子は自愛說を唱へて、各一家を爲す。孟子の時に當りて、楊墨の道天下に塞がり、孟子の大賢を以てして、猶ほ且つ楊墨を排するを以て、半生の事業となす、其勢力想ふべきなり。法家は管仲李悝を以て始まり、申不害、商鞅、韓非子に至りて成る。鄧析、尹文、惠施、公孫龍の徒、堅白異同の辯を弄して、名家の祖と爲る。兵家は孫吳を以て祖と爲し、縱橫家は蘇張を以て祖となす。所謂九流百家、前後踵を接して起り、各家救時の策を立つ。恰も百花絢爛として、春園に亂發するが如し。

宋明の學術

漢魏六朝は、字義訓詁に汲々として、毫も發達を見す。趙宋朱明に至りて、支那の學術、復た勃然として興る。然れども宋明哲學の勃興は、唐代印度哲學の影響たるを忘るべからず。宋代の學者士人、儒道を講するの餘暇、私かに佛老を窺ふ。佛老の旨趣、深邃高妙、能く儒敎の及ぶ所にあらず、茲に於てか、前後相率ゐて玄理を探究す。有より無に入り、實より虛に轉し、形而下學より形而上學に進み、現實世界より理想世界に、現象より非現象に、初や人倫交際の道より遡りて、終に宇宙本源の攻究に達す。宇宙本源問題より、更に轉して漸く其本に歸る。然る後に理氣の說出て、性命の說起る。所謂道學、或は僞學と稱せられしもの即ち是れなり。漢唐の儒をして之を評せしむれば、或は鶩學問と云ふも、未だ知るべからず。然れども彼の長を取りて、我が短を補ひ、浮屠氏を參酌して、而も其

玄理を探くる

非を擊らし、孔孟を推尊して其版圖を擴充す。之を從來字義訓詁に汲々たりし時代に比すれば、別に一新天地の開闢を見る、蓋し其功偉ならずとせず。宋儒の理學は、元と漢唐訓詁の學風の反動として起れる者にして、孔孟の意を文字の訓詁に求めずして、直ちに其精神上より得んと欲し、專ら義理を講ずるにあり。宋代の儒林、鬱々蒼々、固より其人に乏しからず。今其最も傑出せる者を擧ぐれば、仁宗の朝に、胡安定、周濂溪あり。程明道、程伊川の兄弟は、學を周濂溪に承けて、其名天下に著はる。張橫渠、二程子の言を聞き、乃ち盡く己れの學を棄てゝ其說を承く。邵康節、二程子と友たり、尤も天地變化陰陽消長の學に精し。而して周邵二子は、實に宋代哲學の創唱者となす。南渡の初め、楊時、胡安國、尹焞、李侗、羅從彥等、世に鳴る。李侗の門に朱熹あり。朱熹は晦庵と號し、四方之を仰ぐこと泰山北斗の如し、南使の北に至るの際、金人必ず朱先生何くに在るやと問ふ。朱子の友に張南軒あり。呂東萊も亦程氏の學を祖とす、當代の碩學鴻儒、靡然として程朱の風を仰ぐ。獨り陸象山眇々たる一介の士を以て、此大勢に抗して崛起せり。

陸象山

陸九淵、字は子靜、象山は其號、金溪の人なり。幼よりして奇氣に富む。曾つて古書を讀み、宇宙の二字を解するを看て、忽ち曰く、宇宙內事乃己分內事。己分內事乃宇宙內事と。又曰く、東海有二聖人

出レ焉。此心同也此理同也。西海有二聖人出一焉、此心同也此理同也。南海北海有二聖人出一焉。此心同也此理同也。千百世之上。有二聖人出一焉。此心同也此理同也。千百世之下。有二聖人出一焉。此心同也。此理同也。と此等の言、象山の豪爽雄邁の氣象を見るに足る。

陸王學の起因

之を朱子の小心翼々たる格物究理の學風に比すれば、其差極めて大なり。象山謂へらく、文字の末に拘はり、區々たる禮儀法則の中に其身を屈するは、是れ其天資を殘害するに過ぎず。學問の道は、其外にあらずして其内に在り、古人の文字にあらずして、精神にありと。故に曰く、必ず形跡を以て人を觀れば、則ち以て人を知るに足らず。必ず形跡を以て人を繩さば、以て人を教ふるに足らずと。朱子謂へらく、學は必ず聖賢の遺意を其書中に求めざるべからずと。又脩身の法は必ず小より大に進み、洒掃應對より順序を追ふて、始めて聖人の域に達することを得と。象山は德行を尊びて學問を後にし、晦庵は學問より、德行に入るべきことを主張す。程朱は蕪雜繁衍にして、陸子は簡易直截なり。程朱は六經を以て金科玉條と爲し、六經を註するを以て、畢生の事業と爲す。陸子は則ち曰く、吾れ六經を註するにあらず、六經は皆我が註脚なりと。程朱は究理を以て主となし、陸子は唯心を以て要となす。彼は支離の弊あり、此は頓悟の風あり。淳熙二年乙未四月、東萊、象山及び復齋に約して、朱晦庵及び其從遊諸家と、信州の鵝湖寺に會す。留止旬日に及ぶ。會する者皆な一世の碩學鴻儒、互に胸襟を開て、其蘊蓄を吐露す。抑々亦希世の盛事なるかな。

鵝湖の會

史上最も重要の事となす。鵝湖に到るの途次、復齋先づ所感を賦す。其辭に曰く、

孩提知レ愛長知レ欽。古聖相傳只此心。大抵有レ基方築レ室。未聞無レ趾忽成レ岑。
留二情傳註一翻蓁塞。著二意精微一轉陸沈。珍重友朋相切琢、須レ知至樂在二于今一。

明且相語る、象山曰く。第二句微しく未だ安からざるありと。途上和韻を則す。既にして一行鵝湖に達す。復齋前詩を誦して第四句に至る。晦庵曰く、子壽早已上二子靜船一了也と。詩終りて晦庵辨を復齋に致す。象山乃ち和韻を誦す。其詩に曰く

墟墓興レ哀宗廟欽。斯人千古不磨心。涓流滴到滄溟水。拳石崇成泰華岑。易簡工夫終久大、支離事業
竟浮沈。

豪邁卓犖

誦して此に到るや、晦庵頗る色を變ず。而も象山猶ほ句を繼て曰く、欲レ知二自一下升レ高處。眞僞先須レ辨二古今一と。豪邁卓犖の氣、直に自家の肺腑を吐て、稜々人を襲ふ。晦庵太だ懌ばず。是に於て、衆散じて休息す、明日論議凡そ數十回、隨ふて說き、隨ふて挫き、隨ふて辨じ、隨ふて破る。一揚一抑、一虛一實、雌雄終に決せず。斯の如きもの連日、晦庵則ち謂へらく、人各々見る所あり、到底決を後世に取るの他なし。辨ずべきは、己に之を辨せり、今更に辨難するを要せずと、乃ち止む。

朱陸學說の異同

尙ほ學理に就て爭論あり、太極說是れなり。朱子は周濂溪の說を奉じて、無極而太極を信じ。又易の陰陽を以て形となせり。象山の兄、梭山之を爭ひ、象山に至りては其議論結で釋けず。陸子は太極說

の必ずしも周子の眞說にあらざるとを辨じ、無極の二字は、聖人の書中にあらずして、老子に出でたりと言ふ。朱子は之を辨じて曰く、伏羲文王は太極を云はずして、孔子之を云ひ、孔子無極を言はずして、周子之を言ふ、先聖後聖豈に同條にして共貫せざらんやと。象山又朱子が太極と稱して無極と稱せざれば、後人太極を以て空しく孤立して、其用を爲さゞる者となすと云ひ。朱子は又た之を辨じ、象山又朱子か陰陽を以て形器となせしを駁し、朱子又其可なる所以を說く。

象山は朱子が人心道心を以て、本然氣質の兩性に配せしを非なりとなし。朱子は又陸子の說を以て、全く性を解せざるものとなす。

朱陸二子の差違、既に此の如く大なり。更に當時一般の風潮を察するに、學理益々精微にして、實事愈々疎濶。辯說益々繁肬にして、道義愈々頹廢。實に言ふに忍びざるものあり。象山嘆じて曰く、後世學者の病、好事無益の言多しと。又曰く、古の學者は以て心を養ひ、今の學者は以て心を病ましむ、古の學者は以て事を成し、今の學者は以て事を破ると。是れ眞に宋代究理學者の砭針たらずんばあらず。更に曰く、古人は皆な實學、後人未だ議論辭說の累を免れずと。此れ當日象山の眼中に映せし通弊なり。是に於て、象山獨り程朱を排して取らず、自ら奮つて特翔の見を立つ。此の如きの見識を以て組織したる學問は、勢ひ他の極端に馳するを免れず、而して實に其顯著なる跡を存せり。

當時學者の通弊

朱陸の末流

後人の朱晦庵を奉ずる者は、其孔孟の正傳を得たるとを揚言し、陸象山を奉ずる者も亦然かす。然れども程朱を宗とする者日に隆んに、陸子を奉ずる者月に微なり。是を以て、其勢相敵せず、陸子の學、年々歲々、湮晦に歸するを免れず。宋元の學者、紛紜擾々、其數少からずと雖も、能く陸子の學を復興する者なし。況んや其範圍を擴充する者をや。蓋し眞に陸子を知る者なかりしなり。

陸象山の歿時を距ること、三百三十年、明の王陽明、初めて其眞價を知り、深く其衰頹を歎ず。陽明謂へらく、象山は孔門の正傳を得、而して其學術久しく抑へられて彰はれず。文廟尙ほ配享の典を缺ぎ、子孫未だ褒崇の澤に沾はずと。乃ち撫州府金谿縣の官吏に牌行し、陸氏嫡派の子孫を將て、各處聖賢子孫の例に倣ひ、其差役を免し、俊秀なる子弟あるときは、名を提學道に具し、學に送り業を肄はしむ。陽明は當時江西に巡撫たり。時に明の武宗正德十六年なり。英雄にあらずんば、英雄を知らず、豪傑にあらずんば、豪傑を知らず。前賢後賢時を曠ふすること、三百有餘歲にして融然契合す。默識神通、感奮興起するや、冥然之を助くるものあるが如し。

隔世の知音

王陽明

王陽明名は守仁、字は伯安。明の憲宗成化八年壬辰、九月三十日、餘姚の瑞雲樓に生る。古來偉人の傳記が含蓄するが如く、神怪の說話極めて多し、瑞雲樓の名、已に其一なり。陽明生れて五歲始めて言ふ。幼より文才あり、十一歲の時、祖父に從て京師に赴く、途に金山に遊ひて、咄嗟詩を賦して傍

寧馨兒

人をして驚嘆せしむ。明年塾師に就く、當時既に豪邁不羈。一日師に問ふて曰く、第一等の事は何ぞやと。師答ふ、唯讀書登第耳と。陽明疑ふて曰く、登第恐未レ爲二第一等一或讀レ書學二聖賢一耳と。十三歲母を喪ひて働哭す。十五歲尙ほ京師に在り。時に地方水旱、盜賊機に乘じて亂を作し、所在府庫を掠む。陽明出でゝ庸三關に遊居し、山川形勝を縱觀し、慨然として四方を經略するの志あり。屢書を爲りて朝に獻せんとす。父、華の斥けて狂と爲すが爲めに乃ち止む。行狀記に云ふ、初溺二於任俠一再溺二於騎射一三溺二於詞章一四溺二於神仙一五溺二於佛氏一正德丙寅始歸二正于聖賢之學一と。何ぞ其れ溺るゝの多きや。凡そ事溺れずんば則ち達せず。溺れ溺れて、終に正に聖賢の學に歸す。是れ溺るゝに似て、畢竟溺れざるなり。否な、溺れざるにあらず、溺るゝに足らざるなり。十七歲にして餘姚に歸り、洪都に往て、妻、諸氏を娶る。而して豪放の氣、猶ほ減せず。其合巹の日、陽明忽ち見えず、家人驚き人をして之を索めしむれば寢やく鐵柱宮に得たり。曰く、道者に就て養生の術を聞き、乃ち歸るを忘るゝと。其後漸く詞章に溺る。二十六歲京師に寓す。時勢に感じて兵書に志し、其秘奧を究む。二十八歲、進士及第す。求言に應じて邊務八事を上る。翌年始めて仕官す。虛弱咳嗽の疾に罹り、靜養を思ふ。乃ち佛に參し、老に就き、養生の術、安心の道を求む。越えて三年五月、病を告げ越に歸り、室を陽明洞中に築く。洞は會稽宛委山に在り、里人謂て神仙の會所となす。王守仁が洞に入りて陽明と號し、陽明を以て知らるゝは、其れ亦た神仙の冥眇幽遠を慕へるか。陽明は當時輙もすれば、詭幻を

五溺一歸正

弄して導引の術を衒へるのみならず、實に世の塵俗を蟬脫し、超然として恬澹を守らんと欲せるなり。唯祖母、岑及び父、華の事、常に念頭を離れず、躊躇して決する能はず。一朝忽ち悟りて曰く、此念孩提より生ず、此念にして去るべくんば、種姓を斷滅せんと。乃ち仙釋二氏の非を悟り、終に正に聖賢の學に歸し、確乎として動かざるに至る。陽明は斯學を以て自ら任ずと雖も、子弟の薰陶を以て滿足するにあらず、必ずや進んで其抱負を當世に施さんことを期せるなり。

弘治十八年、孝宗崩じ、武宗位に即く。侍臣劉瑾、谷大用等、便佞姦邪の輩、時を得て事を用ゐ、國事日に非なり。劉健、謝遷等、交々起て之が罪を論し、郤て姦人の陷る所と爲る。正德元年、南京科道官、戴銑等、上疏して忌諱に觸れ、詔獄に下さる、陽明年三十五、時に兵部主事たり。之を見て激昂禁ぜず、首として抗疏して之を救はんとす。疏入り瑾怒る、捕へて詔獄に逮捕せられ、廷杖四十、既に絕して復た蘇す。尋て謫して貴州龍場驛々丞と爲す。二年夏、陽明乃ち謫に赴かんとして錢塘に至る。劉瑾の途に己れを害せんとを畏れ、言を江に投ずと托して之を脫し、商船に附して舟山に抵る。偶々颶風大に作り、夜閩界に至る、陸に上り一寺を得て宿を求む。寺僧怪みて納れず、乃ち野廟に赴き、香案に凭りて臥す。夜半群虎廟を遶りて大に吼え、敢て入らず。昧爽寂然聲無し、寺僧以爲らく必ず虎に斃さるゝと。將に其囊を收めんとす、陽明が熟眠するを見、相共に驚いて曰く、公は常人に非ずと、迎へて寺に至る。寺に異人あり、嘗て相識る者、與に語りて隱潛世を避くるの意を告く。異人其

非を喩す。乃ち悟りて寺壁に題して去る。其詩に曰く、險夷原不レ滯二胸中一何異二浮雲過二大空一夜靜海濤三萬里。月明飛レ錫下二天風一。間道より父を南京に省す。此に門人數名を携へて錢塘を經て龍場に赴く。

龍場は今の貴陽府脩文縣なり。西南荒裔に屬し、諸蠻中に錯處し、言語通せず。地、低濕にして、居、宮室なく。瘴癘の害、蟲毒の災、勝て言ふべからず。陽明土を累て窟と爲し、其中に棲息す。時に肺を病みて大に困む。乃ち石槨を造り、端坐して自ら誓て曰く、吾れ唯命を俟たんのみと。又自ら念ふ、聖人此に處せば更に何の道あるべきと。一夜微睡中、人と語るあるが如く、忽ちにして廓然大悟し、覺えず大呼雀躍し、從者皆な驚く。因て五經臆說を著す。陽明識力敏活にして、意志强健。感性特に銳利なり。事を經ること既に多く、理を察すること既に明かなり。但其閱歷は從來甚だ險難困厄なり。其之れあるは廷杖囚獄に始まり、龍場の謫居に至りて其極に達すと雖も、彼年既に三十有七、其間精神を鍛錬し、氣力を養成し、事理を究明するの深遠なる、果して幾何ぞ。今や此逆境に處して、端坐思惟天地に誓て動かず。一旦豁然として貫通し、胸中凉灑洗へるが如く、頓に別境に入るの偉觀を呈す。蓋し其養の素あるに由らずんばあらず。』已にして蠻人も亦日に來り親む。龍岡書院を建て、教化の具を設け、門人と與に講習討論して、患難共に之を忘るゝ者の如し。此時に當りて水西の安宣慰反して陽明を招く、陽明乃ち一書を作りて之を諭し、安氏畏服す。土人傳說して倍々敬意を加ふ。

廓然大悟

正德五年、陽明年三十九、姦黨劉瑾等倒れて、宿殃方に解け、陽明復た江西廬陵縣の知縣と爲る。歸路門人に謂て曰く、謫居兩年、與に語るべき者無し、今幸にして諸君に會す、共に靜坐して自ら性体を悟らんと。既にして途中書を寄せて曰く、云ふ所の靜坐は、人の坐禪入定を欲するに非ざるなりと。蓋し其野狐禪に陷るの弊を防ぐなり。十一月入覲す。是より官累りに進み、弟子倍々多し。七年十二月、南京大僕寺少卿と爲り、便道歸省し、八年十月、滁州に至る。從て學ぶ者頗る多く、地僻にして官閑なり。乃ち日に瑯琊、瀧泉の間に遊遨し、月夕龍潭を環りて坐する者數百人、歌聲山谷に振ふ。曾眼前に就て點化を加へ、門人各得る所あり、從遊益々盛んなり。十一年九月、都察院左僉都御使に任じて、南贛、汀、漳等の巡撫を命せらる。當時汀、漳、各郡皆な巨寇あり。諸治悉く紛亂し、良賊相混して辨別すべからず。茲に於て陽明日夜焦心、十家牌法を案出す。後更に兵制を嚴立し、盛んに鄉兵を訓練して賊を平ぐ。是より精勵治を圖り、百事大に整ふ。朝廷陽明に任じて、便宜事に從はしむ。初め師を出だしてより、茲に至るまで四十日を越えず。而して搗巢八十餘、大賊首級八十六、從賊首級三千一百六十八。明年正月、三浰を攻め、兩月にして盡く平く。六月功を以て都察院右副御史に陞り、一子を錦衣衛に廕し、世々百戶を襲がしめらる。陽明戰鬪中に在りと雖も、未だ曾て講學教化を廢せず。嘗て人に書を與へて曰く、山中の賊を破るは易し、心中の賊を破るは難しと。七月古本大學を刻し、朱子晚年定論を著はして、世の學者を啓導す。八月門人薛侃、傳習錄を刻す。九月濂溪

坐禪を非とす

汀漳を平らぐ

心中の賊を破る

書院を修めて、倍々四方の學者を教授す。陽明文武の業並に擧ると雖も、未だ其絶頂に達せず。

宸濠を生擒す

正德十四年夏六月、南昌府の宗藩寧王宸濠、兵を擧げて反す、宸濠固より一世の雄なり。陽明此時に方り、適さに出でて福建の叛軍を戡定し、豐城に至りて變報に接す。直に吉安に返り、七月十三日を以て程を發し、秘計名略、二十八日乃ち宸濠を生擒し、江西全く平く。陽明偉勳赫々、盛名一世を蓋ひ、嫉妬讒口も亦之に從ふ。而も素養已に深ければ、超然として意に介せず。講學常日の如く、愈〻進捗を加ふ。正德十六年、年五十。私かに謂へらく、患難を忘れ、生死を出づること一に良知に在りと。

致良知の教を揭ぐ

茲に致良知の教を揭ぐ。曰く、我が此の良知の二字、實に千古聖聖相傳の一點滴骨血なりと、而して陸象山を以て、孔孟の正傳を得る者となせり。九月餘姚に歸り、祖墓を省す。瑞雲樓を訪ひ、母の生けるとき、養ふに及ばず。祖母の死して、殯するに及ばざりしを痛み、涕泗滂沱たり。十二月、江西を平ぐるの功を以て、新建伯に封せらる、祿一千石、廕封三代。適々父の誕辰に會し、陽明乃ち壽を爲す。翁蹙然として曰く、宸濠の變、皆汝を以て死せりと爲す、而して死せず。皆な事を以て平げ難しとす、而して卒に平ぐ。讒搆朋興、禍機四發し、前後二年岌乎として免れざるを知る。天聞て忠良顯はれ、父子復た一堂に相見るは幸ひなり。今に因て昔を思へば、幸と爲すと雖も、又以て懼と爲すと。陽明爵を洗ひ跪て曰く、大人の兒を教ふるや、日夜切心する所の者なりと。陽明封爵を辭すること再び、遂に允されず。明年二月父を哭す。爾來越に在りて學を講ず。文武の業方さに其極に達す。

四年夫人諸氏を喪ふ。六年鄒守益、文錄を刻す。其五月廣西の田州を征し、明年二月悉く平く。十一月二十五日、梅嶺を踰えて南安に至る。門人周積來り見ゆ、起坐す。咳喘已まず、猶ほ問ふ、近來進學如何と。周積便ち恙なきやを問ふ。答へて曰く、疾亟れりと。二十八日、晩に舟を泊す。明日周積を召して舟中に至らしめ、目を開き視て曰く、吾去ると。遺言を請ふ、微笑して曰く、此心光明亦復何言と。頃くにして逝く。十一月二十九日なり。中江藤樹の生誕に先つこと、實に八十年なり。穆宗の隆慶元年五月に至りて、新建侯を贈り、文成と謚す。

遺言

學說

心即理

陸象山の心即理

陸象山の心即理の說は、孟子の萬物皆備二於我一矣の語より來る。萬物の理、皆な悉く我に備はるが故に、身に反省して自然の誠に契へば、樂焉より大なるは莫し。吾人一切の行爲皆な我心を以て本と爲す。若し我心に標準を求めずして、行動云爲すれば、即ち天道の誠に背戻するに至らん。何を以てか樂を得可き。故に孟子は放心を求むるを以て、學問の第一義と爲す。吾人の理想は、必ず我心を以て本と爲すべきを示して、心即理と云ふ。理は宇宙萬物に充塞して、而も一なり。而して其萬物の理にして、我心に具備すれば、即ち學者の要務は、我心を明かにするを以て根本と爲す。故に陸象山曰く、

塞ニ宇宙ノ一理耳。學者之所ニ以學ヲ欲レ明ニセントスル此理ヲ一耳。此理之大豈有ニ限量一と。此理は宇宙の間に在りて、未だ嘗て隱遁することあらず。天地の天地たる所以の者は、此理に順ふて私なきのみとは、象山の常に謂ふ所なり。又曰く、宇宙之間。典常之昭然。倫類之燦然。果何適而無ニ其理一也と。蓋づべきの事は、則ち之を善ぢ、惡むべきの事は、則ち之を惡むとは、此理なり。是は其是たるを知り、非は其非たるを知るは、此理なり。千百の事物、皆な理あらざるはなし。故に又曰く、此理本天所ニ以與レ我ニ非ニ由レ外鑠ニ明得ニ此理一即主宰。眞爲レ主。則外物不レ能レ移。邪說不レ能レ惑と。更に明かに心即理を說て曰く、心一理也。理一理也。至當歸レ一。精義無レ二。此心此理。實不レ容レ有レ二と。親を愛する理想、兄を敬するの標準、皆な之を我心に求めざるべからず。若し心を外にして、事物の理を求めんと欲すれば、終身勞すと雖も得べからず。百事我心を究明するを以て始めとなす。一心正明なれば、世間の百事悉く之に依て解釋せられざるはなし。故に此心を認了するは、斯學の要點にして心を棄て理を他に求むるは、誤れるの甚しきものなり。

王陽明の心即理

王陽明の心即理の說は、蓋し陸象山より來れるならん。然れども其說明は愈々明白と爲れるを覺ゆ。陽明嘗て陸象山の文集に序して曰く、世儒支離。外索ニ於刑名器數之末一。以求レ明ニ其所レ謂物理者一。而不レ知ニ吾心即物理者一。初無レ假ニ於外一也。佛老之虛空。遺ニ棄人倫事物之常一。以求レ明ニ其所レ謂吾心一。而不レ知ニ物理即吾心不レ可ニ得而遺一也、と佛老に對比して說き、世儒の通弊を指斥して之を喩す、何ぞ其れ明晰なるや。心は即理にして學者の專務は、此心を討究するにありとは亦王陽明の雅に言ふ所なり。又曰く、夫物理不レ外ニ於吾心一。外ニ吾心一而求ニ物理一。無ニ物理一矣。遺レ物而求ニ吾心一。吾心又何物邪と。陸王の學を稱して、心學と云ふもの、決して偶爾ならず。斯學が宇宙萬物の理は、之を我心に求むべきを說くは、先づ初めに行動云爲の標準を求むべきを示したるに過ぎず。今既に標準を求むべきを知れば、之より進みて、知と行の關係を示さざるべからず。陽明の學は、簡易直截を旨として、叢脞繁衍を避け、迂遠なる學理を避けて、實事實行を主とするに在り。故に知行の關係は最も注意せざるべからず。

知行合一

百千の知識を得るも、之を行動云爲に施さざれば、未だ以て眞知と爲すに足らず。否な、知て然後に之を行ふと言ふにあらず。知を云へば、行自ら此中に在るべきを云ふなり。即ち知は行を豫想するなり。行を知に得、知を行に得べきを云ふなり。若し先づ知るにあらずんば、之を行ふ能はずと言ふが如きは、業己に陽明の所謂合一の意を知らざるものなり。陽明が所謂知るとは耳目見聞の知識の謂にあらず、自家の經驗に徵し、實事に顯はるるにあらずんば、以て知と爲さざるなり。自家が實地に經驗しつつある時は、固より行に屬するが如きも、是れ正しく知を得、行を得、知行合一するの時なり。又謂へらく、知の始まるときは、行も始まり。行の終るときは、知正に成れるの時なり。知と行

理想と實現

とは並進なり、知は理想なり、行は實現なり、實現は固より理想の結果なれども、實現を容せざる理想は、是亦眞の理想に非るなり。而して陽明は理想の眞切篤實なる處は、即是れ行。實現の明覺精察なる處は、即是れ理想なりと謂はんとす。故に陽明曰く、知是行之始。行是知之成。若會得時。只說一箇知。已自有行在。又說一箇行。已自在知在。更に一段の精密を加へて曰く、知之眞切篤實處。即是行。行之明覺精察處。即是知。知行工夫。本不可離。只爲後世學者分爲兩截用功。失卻知行本體。故有合一並進之說。眞知即所以爲行。不行不足謂之知と。何ぞ其れ親切なる。知の眞切篤實なる處は、即ち行なり、行の明覺精察なる處は、即ち是れ知なりと云ふは、說き得て最も痛快、所謂身に體して誠ならずんば、以て知と爲さざるなり。若し誤て此知を以て見聞の知と爲さんか、直に不合理を發見せん。何となれば世には知るべくして、行ふべからざるもの多し。例へば天體運行の理を知るも、如何にして之を行實に施すべきか。潮汐滿干の理を知るも、如何にして之を行實に施すべきか。陽明が知行合一を主張するは、格物致和、誠意、正心、修身、齊家、治國、平天下の外に出でざるなり。是故に知に行を豫想するは、即ち亦知行合一に、心即理を豫想する所以なり。換言すれば、知を行に合一せしむるには、必ず行爲の標準を心に求むべし。然らざれば設ひ標準を吾心に求めずして、知を行に合一せしめんとするも、決して得べからずとなり。故に曰く、外心以求理。此知行之所以二也。求理於吾心。此聖門知行合一之教と。蓋し世の學者、往々外を專らにして、物を究め、心を措て

可知而不可行的

東西知行論の比較

理を物に存すと爲すものなればなり。是れ自反愼獨の心學の起る所以なり。』知行合一說は、實に王陽明獨得の見なり。之を古今東西に求むれば、相似たるものありと雖も、皆な非なり。ソクラチースは知識即德行論を以て鳴る。ソクラチース謂へらく、善は知識の目的にして、行爲の內容なり。未だ見識なくして能く善を爲す者は之れ有らず。知識は德の精にして、知あれば即ち茲に德あり。未だ知識ありて能く失行を爲す者は之れ有らずと。然れども、其の立言の旨を究むるに、彼は知識を以て因と爲し、德行を以て果と爲す、其失行てふ果を見て、知識欠乏てふ因に反求して、初めて知行論を立つ。是れ固より知行論の名を失はずと雖も、先づ知らしむれば、人は必ず行はざるものにあらず。故に知を以て急と爲すと云ふは、陽明が眞知即所以爲行。不行不足謂之知と云ふとは、其眞意義に於て大に差違あり。陽明は寧ろ行を急とするの意を以て、知行合一を說く者にあらずや。試に彼の言と、彼が憤激せる世儒の通弊とに徵せよ。且つ彼は知行の因果關係論にして、此は知行合一並進論たり。或は說明的たるに於て相同しと云ふも、亦非なり。只稍々類似點の存するのみ。

知德因果關係論

立言の旨趣相同からず

說明的たるに於て相類すと云ひ、甚しきは全く相等しと說く、噫。全く相等しと說くは最も非なり、已に因果關係となす、因に於て人道の知識を得ば、必然的に之を果に於て實現するとなすか、是れ甚だ疑なき能はざる所。人に理想を懷かしむれば、必ず之を實現すと信ずるは、蓋し大早計と謂つべし。或は理想にして止まり、實現に至らざるもの多し。唯實現は理想の結果たることは、斷々乎として公

言するを得ん。若し理想を與ふれば、必ず實現すと確定せるものならば、王陽明は特に知行合一說を立てざりしならん。合一並進說を主張するは、全く理想にして止まり、實現に至らざるもの多きを憤慨すればなり。且つや王陽明は、實現を容せざる理想は、眞の理想と謂ふに足らずと爲す。此れ知行合一並進論が、說明的たると同時に標準的にして知行因果關係論より、遙かに精到周密なる所以なり。故に予は斷じて知行合一說は王陽明特得の見と謂ふ。若し些々たる類似を求め來らんか、何ぞ必ずしもソクラチースを曰はん。先賢已に多く之に類するの語あり。

二種の論者

然れども以上兩賢の比較に就て、世間往々にして異說を懷く者あり。甲は曰ふ、蘇、王、二子の說は、其立言の旨趣に於て已に同からず、故に之を比較して類似點を求むるは益なかるべしと。乙は曰ふ、二子の說は、大體に於ては異ならず、唯其精微に至りては少しく異なるのみと。甲乙二者の異說は、全く其所見の方面を異にすればなり。吾人は元來區々言詮に泥むを非とすれども、兩說を比較研究するときは、能ふ限り其語の範圍を判明せざるべからず。例せば蘇子の知識ありて茲に德ありといふ語も、眞知識ありて初めて眞德行あり、知識なきの德行は眞德行に非ずといふの外、更に德行なきの知識は眞知識に非ずと解すると。單に人には眞知識だに與ふれば行ふものなりと解するとは、大に範圍を異にするなり。若し吾人二子の語を表裏反復思索し、其創唱者當時の社會の狀勢を外にして比較せば、類似點を得ること難からず。否な二說は殆んど同一といふを得ん。然れども吾人が上來論じたるは主として創唱者當時の狀勢を鑑み、其の立言の旨趣を基礎と爲し、なり。後人の解と創唱者の意と相同じからずといふの例を求めんとならば、近くは菅丞相の所謂和魂の二字に就て見るべし。後人か先人の說を究明するは固より然るべきも、先人の思ひ至らざりし意味を其語に附し、依然之を先人の說と爲すは、果して忠か。吾人は寧ろ彼を呼んで特創者と言ふの可なるを見る。

致良知

陽明既に心即理を說き、知行合一を說き、又其關係を說けり。然れども以上二敎は、寧ろ方法に屬し、過程に附すべきものにして、未だ發現行動に至らず。彼は形式範疇にして、未だ實踐躬行に至らざれば、未だ以て陽明の敎學を完成するに足らず。玆に於てか、彼は致良知の說を揭ぐ、致良知は則ち大學の致知より來る。陽明初めて致知の知は、良知の知たることを發明す。故に陽明の學を、又た良知の學と呼ぶ。然れども良知良能の字は、已に孟子に在り。而して其良知は即ち所謂良心なり。良心の二字も亦孟子に出づ。陽明の四言敎即ち四句秘訣に曰く、無善無惡是心之體。有善有惡是意之動。知善知惡是良知。爲善去惡是格物と。又其の良知の性質を說くや則ち曰く、良知只箇是非之心。是非只是箇好惡。只好惡就盡了是非。只是非就盡了萬事萬變と。又良知と心との關係を示しては則

四言敎

ち曰ふ、良知本體。原是無動無靜的。此便學問頭腦と、良知は活動的なり。孟子の言を藉れば則ち仁義の心なり、親を親んずるは仁なり、長を敬するは義なり、仁義の心、人皆な之を固有すと。仁義の心は、即ち所謂良心なり。良心は方今倫理學者の最も重きを置く所なり。故に西洋倫理學者は、良心を論ずること甚だ詳密を極む。或は曰く、良心を解し了らば、倫理學の半を得たるなりと。蓋し或は然らん。但東洋學者は良心の術語を用ふること希れにして、多くは仁義の心と曰ひ、或は良知と曰ふ、而して良知の二字は殆んど王陽明の專有たりとす。甚しきは良心は良知にあらずと云ふ、是れ未だ究めざるの失のみ。今王陽明が良知に就て說く所を以て、西洋諸家の良心說に比較研究すれば、疑團忽ち氷釋せん。然れども王陽明は良知を說くこと、最も廣く最も深きが故に、一人にして西洋諸家の良心說を網羅せり。予嘗て論ずらく、西洋諸家の良心說を總合すれば、初めて完全なる良心說を得んと。其後王陽明の良知說を讀むに至りて、初めて我論の誤らざるを知り、覺えず案を拍て快哉を呼ぶもの三たび。且つ王陽明の良知說が、遙かに西洋倫理學者の說に超絕することを讃嘆するもの亦た之を久ふす。

良知即ち良心

東西の良心論者

良心說

然れども、西洋倫理學者の良知說を縷述せんか、亦別に尨然たる一冊子を要す。只今二三要言を摘みて、比較せんのみ。

普遍的

良心は普遍的なり。普遍的とは種族の如何を問はず、階級の如何を論せず、凡ての人が通有するの謂なり。然れども一般人類が、同樣に發達したる形態に於ける良心を有すと言ふにあらず。但良心は發養に依て發達すべき性質を有すと。王陽明も亦曰く、良知良能愚夫愚婦與聖人同。但惟聖人能致其良知。而愚夫愚婦不能致。此聖愚之所由分也と。兩說恰も符節を合するが如し。

先天的

良心は先天的なり。良心が先天的に存するや、將た後天的に獲たるものなりやの問題は、學者に依て其說を異にす。之を要するに二派に分るべし。其一は先天的に存在して、後天的に發現すと說き、其他は先天的には之れ無く、唯感情と外界刺激との成果のみと說く。而して陽明は孟子が良心を說くが如く、又西洋の或論者の說の如く立論す。其言に曰く、良知不由見聞而有。見聞莫非良知之用。良知不滯於見聞。而亦不離於見聞。と。又曰く、未發之中即良知也と。且つや見聞莫非良知之用と云ふは、或一派の良心論者が良心は吾人の指導者なり、命令者なり、一擧一動、良心の指揮に從はざるべからすと論ずるに似たり。

道なり

良心は無上最尊の意志の聲なり、理なり、道なり、而して最も簡明なるものなり。良心は最も簡明にして更に他の元素に分拆還元するを得ずと論ずる者あり。或は良心は理なり道なり、人間は必ず之に從ふて行動せざる能はず、世に無上の大法なるもの存して、之に從へば善、之に反すれば惡。善なれば榮え、惡なれば滅ぶと。王陽明曰く、良知是天理之昭明靈覺處。故良知即是天理。思是良知之若是良知發用之思。則所思莫非天理矣。良知之思。自然明白簡易と。又曰く、知行本體即是

良能雖レ在二困勉之人一。亦皆可レ謂二之生知安行一矣と。又曰く、良知即是道と。是故に天理に順ひ、ふは、即ち是れ良知を致すなり。良知は倫理説に至緊至要、學者最も意を注くべき所なり。

良知の最大性質

上來陳べたる説に於て、殆んど餘蘊なきが如きも、陽明は更に數歩を進めて、最も大膽に良知の効用を論究せり。良知は宇宙萬物に普遍的なり、豈に特に人類のみならんや。其言に曰く、人的良知就是草木瓦石的良知。若草木瓦石無二人的良知一。不レ可三以爲二草木瓦石一矣。豈惟草木瓦石爲レ然。天地無二人的良知一。亦不レ可レ爲二天地一矣。蓋天地萬物與レ人原是一體。其發竅之最精處。是人心一點靈明。風雨露雷。日月星辰。禽獸草木。山川土石。與レ人原只一體。故五穀禽獸之類。皆可二以養一人。藥石之類。皆可二以療一疾。只爲レ同二此一氣一。故能相通耳と。是れ唯心説、或は天地即ち大人間、人間即ち小天地の説より漸める者なり。異時大鹽中齋は唯心説、天人合一説を唱へて、更に一層の精緻を加ふ。蓋し其説陽明より來れるならん。然れども、或は難じて曰く、若し尋常倫理學に言ふ如き、正當の推論より此説を立てんと欲せば、決して成功せざるべし。何となれば、前三項の良心説は、全く人類に就て説き、此一項は直に有生無生の兩界に跨りて之を説けばなり。彼は實用的經驗説にして、此は純理的推度説なり。良心は既に活動的性質を有し、自ら靜止的の理にあらず、理を以て普遍なりと爲す猶は可なるも、知レ善知レ惡是良知てふものを以て、直に草木瓦石に通有と説くは大に不可なり。若し假りに這般の普通存在を許すも、其の此に達するの徑路甚だ悠遠なるものあらん。陽明が此に陳ぶる如き單純なる説明を以て、草木瓦石が善惡を知り、是非を判別するの狀態は、到底會得するを得ず。或は草木瓦石が、這般の人的作用を具備せずとせば、如何にして彼等に於ける人的良知を認了すべきかと。

天人合一

其然り、豈に其れ然らんや。陽明曰はずや、夫人者天地之心、天地萬物本吾一體者也と。是れ至大至廣の天人合一觀なり。中齋は更に此意を推演して曰く、壞石は即ち吾肉、草木は即ち吾毛髮。雨水川流は即ち吾膏血精液。雲煙風籟は即ち吾呼吸吹噓。日月星辰の光は即ち吾兩眼の光と。又曰く、血氣ある者は草木瓦石に至るまで、其死を視、其摧折を視、其毀壞を視れば、則ち吾心を感傷せしむ。是れ本と心中の物たるを以てなりと。此の如きの觀念を以て、良知は理なり、道なりと云ふより、推擴して説けば、其の此に達するも亦怪むべき所なからん。彼の浮屠氏が萬法唯一心。心外無別法と説き、或は草木國土悉皆成佛と談ずるに比すれば、猶ほ此説の狹隘なるを感せずんばあらず。加之方今進化論者も亦た進化の楷梯を論ずるに當りて、其原始に遡り或は將來其終局する所を究めんと欲して、又草木瓦石も漸々漸に進化して、遂に最上の靈物たるべきを言はんとするにあらずや。

佛家の説

進化論者の説

上來三項は王陽明の特得の説なりとす。猶ほ陽明の學説を知るに資すべきもの夥多存すれども、多くは先人を祖述するに過ぎず、或は時弊に感激して、發揮したる説なきにあらざれども、今之を詳述するの餘暇なければ、他日を待つて論ぜんとす。

祖述者

養子正憲、子正德、皆以て衣鉢を傳ふるに足らず。最初の弟子、妹婿、徐愛は體を具へて而して微なり。陽明門下の顏回を以て稱せられ、亦寔に不幸短命にして師に先きだつ。錢德洪の篤信。龍溪王畿の精微。心齋王良の超脫。聶豹の主靜。薛侃の精研。其他何廷仁、黃弘綱、鄒守益、歐陽德、王時槐、萬廷言、劉文敏、南大吉、尤時熙等、皆高足の門人にして、一方に鳴る。或は門に及ぶ者、或は私淑する者固より枚擧に遑あらず。陽明の勢力は明末に至りて尙ほ衰へず、黃石齋、劉念臺二氏に至て、勃然として復た興る。石齋は知止を以て學的と爲し、念臺は愼獨を以て聖功と爲す。二氏天下の大亂に當て、人臣の節を守り、奸臣の間に周旋して、善類の危急を扶持し、遂に能く社稷と存亡を同しくす。石齋執はると雖も、肯て奴兒に降らず。幽室に在りて、從ふ所の門人、趙士超等四人と與に、講習吟咏常に異ならず。而して遂に共に殺さる。『念臺南都の亡ぶるに及びて、毅然節を守りて變せず、食を絕つこと二十三日、門人と與に、問答平時の如く、遂に以て卒す。其門人三十又五人、皆な慨然として殺身の志あり。或は忠臣と爲り、或は義士と爲る、實に王學者たるに恥ぢざりき。

黃石齋、劉念臺

清朝と王學

秦の始皇挾書の禁を發し、民間の藏書を官廷に集めて之を燒き、尋て諸生四百六十人を咸陽に坑にせり。策に剛柔巧拙の差ありと雖も、始皇の故智を襲ふものあり、清朝は學者を驅て書庫に投し、蠹蟲と相追逐せしめ、亦天下の時事を談ぜざらしむ。事とする所は折衷考證に在り、旨とする所は博覽强記に在り。柔懦なる學者、循々然として程朱を是れ奉し、字句の解釋を以て、能事畢んぬとなす。元氣沮喪識見陋固、以て今日の衰頽を致せり。陽明良知の學は、直に獨立不羈の精神を皷舞す。心術を修養し、進取の氣象を涵養するは、民を愚にするの政策と相合はず。是れ陽明學が徒らに無事を希ふの世に容れられざる所以なり。

日本之王學者

江戸文學

吾人は上來既に支那に於ける陽明學の梗概を述べたれば、今暫らく我國の陽明學派の形勢を窺はんとす、夫れ江戸幕府の初年、慶長元和より、承應寬文の頃に至り、我邦の文敎勃然として興り、實に空前の偉觀を呈せり。藤原惺窩、林羅山の程朱學起りて、幕府の保護の下に、蔚然として一家を成せり。其門に出づる者、菅得庵、堀杏庵、那波活所、松永尺五等あり。南學は則ち谷時中を以て祖と爲し、野中兼山、小倉三省等あり。各々一方に雄視して、其名を恣にせり。石川丈山、山鹿素行等も、前後相踵で起る。松永尺五の門に木下順庵あり、木門に出づるもの室鳩巢、雨森芳洲、新井白石、祇園南海等、人材極めて多し。野中兼山の門に、山崎闇齋、闇齋の門下に、三宅尙齋、淺見絅齋、佐藤直方等あり。而して中江藤樹は、此間に崛起して、餘姚の學を唱ふ。其初は固より惺窩、羅山派隆盛なりしが、闇齋の派も漸く其版圖を擴め、萬治寬文の頃に至りては、全國十分の三を占領するに至り。其後貞享元祿に及びては、仁齋派十分の七を占むるに至れり。德川時代の奎運が空前なるは固より論な

く、且つ此三百年間に於ては、承應寛文より貞享元祿に至る頃を以て、黄金時代と爲す。

我國の王學は中江藤樹を以て祖と爲す、藤樹は陽明子を去ること殆んど八十年。此間王氏の遺書、我國に渡來せざりしか、將た已に渡來せしも、之を唱ふる者なかりしか。予未だ之を徵するの文獻を得ず、故に今は藤樹より其の研究を始む。

中江藤樹

藤樹初年は朱子學を修め、私かに一家を成せり。三十三歳にして王龍溪の語錄を讀みて發觸する所あり。三十八歳にして王陽明全書を得て、大に感會する所あり。悉く舊習を去りて、陽明學を唱へ、知行合一、致良知の說を以て、根本主義と爲す。天資温厚至誠。純孝無比、學德日に新に又日に新なり。名聲藉甚、近江學人の號、遠近に轟き、之に薫化せられて善人と爲る者、幾千人。或は馬丁を感化し、或は轎夫を感泣せしむ。强盜も爲めに悔い、頑民も恥ぢて訴を止む。學徒來集して遂に藤樹書院を立つ。及門者月に進み、蔚然一家を成せり。門人皆な躬行實踐を以て旨とし、有爲の士に乏しからざりき。

熊澤蕃山

熊澤蕃山は、藤樹の高足の門人なり。藤樹の門に在ること、僅かに數月なりしと雖も、能く其精神を得て、時處位の至善に達せり。蕃山の哲學は純然たる師傳にして、特創の見あるにあらず。然れども、能く藤樹の學を實踐して、其効果を致ししものは、特に斯人ありしのみ。蕃山天資英邁にして、王佐の才あり。既に學成るや、出て備前芳烈公に仕へ、大に驥足を伸ばすを得たり。蕃山の岡山に在るや、國政を總理し、江戸に遊ぶや、天下の爲政家として公卿侯伯に交る。四方の士翕然として、其風采を想慕せり。然れども、蕃山は自ら大經綸を以て任ずるもの、固より區々學說を株守するものにあらず。故に遂に王學の範圍内に安ずる能はず、超然として朱王並進の自由主義を取るに至れり。其門人の如きも僅々二三十人に過ぎずして、能く其奚裘を紹ぎしものは、遂に聞くを得ず。然れども蕃山の根本的精神の修養は、陽明學に得たること瞭々として疑ふべきなし。

北島雪山

熊澤蕃山十九歳の時、北島雪山生る。幼にして圖南堂に從ひ、學を講じ、書法を修む。資性宏達不羈にして、陽明子の學を崇ぶ。熊本侯國中に令して、陽明學を禁ずるに會ひ、雪山乃ち上書して、爵祿の爲めに道を變ずるは、丈夫の所爲にあらざるを言ひ、致仕して諸國に漫遊し、書を以て世に知らる。然れども門人を薫陶するに、書を以てせずして、君子の大道を立てんことを勸む。蓋し人物養成を重むずるに由るなり。

三宅石庵

三宅石庵は、三輪執齋に長ずること四歳。幼にして學に耽り、陸王の學を喜ぶ。三都に歷遊し、英名翹然として起り。弟子雲集す。中井甃庵等、相謀りて官に請ひ、庠序を建て、懷德堂と名づく。衆皆な石庵を推して之に主たらしむ。固辭して可かず、遂に祭酒の事を領す。石庵書を善くす、隻字も人爭て之を求む。然れども或は石庵を評する者あり、曰く、世に石庵の學を鵺學問と呼ぶ。此れ其首は朱子、其尾は陽明にして、其聲は仁齋に似たるを以てなりと。鵺の鳥たる、白翼黄足にして、首に文彩

鵺學問

あり。石庵資性朴素にして、沈晦自養し、育英を以て任とせり。

三重松庵

三重松庵は、京都に帷を垂る。子弟を敎化するに陽明良知の學を以てし、深く朱子學の弊を厭ふ。古本大學講義數卷を著はす。又元祿十五年、門人の爲めに陽明學名義二卷を著はし、陽明學の意を推演し、要領十七箇條を述ぶ。演するに方語を以てし、錄するに國字を以てし、最も初學に便にす。三宅石庵三輪執齋と時を同ふせり。

王學論談

當時闇齋門の俊髦、佐藤直方、王學論談を著はして、陽明學を非議す。然れども固より一家の僻論にして、取るに足らず。直方嘗て赤穗の四十七士を以て、橫暴者と論斷せり。固より一種の見識なきに非れども、我國無雙の忠臣義士を論じて、卻て橫暴者と爲すの眼識を以て、王學を論談す、其當を得ざること推知すべきなり。

三輪執齋

石庵と前後して起りしものは、實に三輪執齋なりとす。初め執齋は十九にして佐藤直方の門に入り、後陽明子の遺書に就きて獨習し、大に悟る所ありき。執齋は藤樹の道德、蕃山の事業を聞て、奮然として立ち、直に之に伍せんとしたる者にして、學問と文章を以て一世に鳴り、傳習錄を標註し、古本大學を和解して、普く陽明學を宣布せり。當時伊藤東涯、物徂徠の如き、碩學鴻儒、東西に崛起して、互に雄を爭へり。執齋專ら講道を以て自任し、著述を以て事とせり。其門に遊ぶ者甚だ多かりしと雖も、能く衣鉢を傳へしもの、獨り

川田雄琴

川田雄琴ありしのみ。雄琴は精思力行の人にして、伊豫大洲侯に仕へて、其道を行へり。雄琴死して其傳を得ず。當時近江を中心とし、京畿內には陽明學を奉ぜし者少からず。

石田手島
石川諸子

石田勘平、手島蓋岳等、或は著書に、或は敎授に依て心學を宣布せり。又石川某は藤樹先生學術定論を著はす。蓋し王陽明の朱子晚年定論の例を襲ふ者か。本書又之を孤琴編と云ふ。

中根東里

中根東里は、初め孝を以て顯はれ、後ち禪に入り、三たびして文章に溺れて、徠門に鳴る。已にして修辭の非を悟り、全く陽明良知の學に歸す。雄琴と時を同じふして起り、江戸に遊びて陽明學を宣揚せんとしたれども、其志を果さず。後年下ッ毛天明鄕に移りて大に斯學を唱ふ。東里は天地万物一體を以て敎義の根本となす。」其後殆んど五六十年間、王學衰頹、諸國末流の傳統なきにあらざりしも、旗

王學餘風

色鮮明を欠ぎ、聲焰甚だ揚らず。加之、朱子學は年と共に根柢鞏固に、枝葉繁茂す。仁齋徂徠の古學の隆盛に加ふるに、折衷考證の諸派起り、天下滔々として之に向へり。且つ幕府は正敎として朱子を取り、遂に昌平に異學禁制の令を發するに至れり。此に於て榮を競ひ、名に趨くの徒、靡然として朱子學に向ひ、復た王學を唱ふる者なきに至れり。

鎌田柳泓

鎌田鵬は。柳泓と號す、南紀の人。寬政享保の間に起りて、心學を振興し、著はす所の書四名公語錄、其外四十有餘卷の多きに及べり。一時學德を以て稱せらる。主とする所は簡易實用にありて、詩文を以て事とせず、故に世の學者の知る所と爲らず。

梁河星巖

梁河星巖も亦晚年深く王學に潛心して、自ら涵養す。活潑地の事業なしと雖も、氣格高邁、規模宏大、

固より尋常詩人と同じからず、是れ蓋し其の養の素あるに由れり。

竹村悔齋

竹村悔齋は、陸王の學を喜び、知行合一の旨を實行せり。擧母藩に仕へて奸宰津村某を除きて自刄しき。故を以て其學大成に至らず、後人知る者希なり。然れども彼が心中の賊を平げ、又國家の賊を平ぐるの功は、遂に沒すべからざるものあり。凡そ世の事を遂ぐる者寛なれば長く、猛なれば短し。悔齋の行爲は短くして猛なる者なり。稍稍過激の跡なきにあらざれども、毫も知行合一の敎旨に戻る所なし。蓋し快擧と謂ふべし。後の事業を爲さんと欲する者、悔齋に則らば必ずや優柔の謗を免れん。

大塩中齋

幕末文政天保の交に及び、大塩中齋眇々の軀を挺して大勢に抗し、毅然として立ち、鋭意王學を宣揚せり。然れども惜むらくは、中齋時を得ず、孤憤空しく屈して復た遂に伸びず。只救民天誅の一聲を絶叫して、浪華一片の煙と消えぬ。中齋資性、孤峻峭拔、清廉剛直、陽明學に於て特創の見少しとせず。大虛說の如きは、其最も顯著なるものなり。其性格或は藤樹蕃山に及び難きものありと雖も、哲學的考察に至りては、二子を拔くと更に數等ならん。

佐藤一齋

中齋と時を同じふして、江都に佐藤一齋あり。一齋は碩學を以て當代に重きを爲し、時運に遭遇して、位置を得たれども、遂に公然陽明學を唱ふるに至らず、所謂陽朱陰王主義を以て終れり。然れども一齋が陽明學を信ずるの深きは、其文章を見、其門人に徵せば疑ふべきなし。

一齋の門に吉村秋陽、山田方谷、奥宮慥齋、池田草庵、村上量弘、等あり皆な純乎たる陽明學者として世に知らる。

吉村秋陽

吉村秋陽は、安藝廣島の人、一時學德を以て世に推尊せらる。子弟を敎ふるや、其人に應じて器を成す。常に誡むるに、訓詁の陋に落ちず、門戸の見を立てず、知解の精を賴まざるの三條を以てせり。讀我書樓遺稿あり、一讀以て盛んに王學を皷吹せし狀を見るべし。秋陽の友に林良齋あり、又王學を以て著はる。

山田方谷

山田方谷は、備中松山に在りて、實用經濟の學を唱へ、隱然重きを爲せり。其門に河井繼之助あり、越後長岡藩の總督と爲り、維新の際國難に徇す。三島中洲及び岡本巍、宮內默藏、島村久等も又た方谷の門に出づ。

奥宮慥齋

奥宮慥齋は土佐の陽明學の開祖なり。其門人には尾崎樞密顧問官、南部男爵、中尾捨吉、丁野遠影、小畑稻、中江兆民居士等あり。

池田草庵

池田草庵は但馬の人、育英を以て其任と爲す。北垣男爵、濱尾新、和田垣謙三等、皆な幼時草庵の門下に在りき。

春日潛庵

潛庵春日讃岐守は、幕末多事の際に起り、終身屯邅志を成す能はざりしも、其言行優に王學者たるに耻ぢざるものあり。其敎旨は本體即ち工夫、工夫即ち本體と云ふに在り。西鄕南洲、深く潛庵の人と爲りを慕ひ、弟小兵衛及ひ門下の士十數人を派して、潛庵の門に學ばしむ。末廣鐵腸亦其門に出づ。

伊藤茂右衛門 西郷大久保海江田諸氏

當時鹿兒島に伊藤茂右衛門といふ者あり。偶々陽明の遺書を得て之を讀み、深く其旨趣を喜び、後ち王學を以て子弟に教授す。西郷隆盛も亦た陽明の遺書に就て自修し、稍々悟る所あり。乃ち大久保利通、海江田信義等に勸めて王學を伊藤茂右衛門に承けしむ。爾後互に往來して傳習錄等を讀習し倍々得る所ありきと。

其他幕府の末路に當りて、勃興せし英雄豪傑佐久間象山、鍋島閑叟、吉田松陰、高杉東行、雲井龍雄、横井小楠等、皆な陽明學を以て、其心膽を練り、氣格を高め、道理心肝を貫き、忠義骨髓を塡し、死生の際に談笑して、能く撼天動地の大業を成せり。

吾人は上來既に彼我兩國の陽明學の大勢を略述したれば、此より陽明學の性質、及び彼我兩國學者の差違を論せんとす。

概括

陽明學の性質

大凡そ陽明學は、二元素を含有するが如し。曰く事業的、曰く枯禪的是れなり。枯禪的元素を得ば、以て國家を亡すべく、事業的元素を得ば、以て國家を興すべし。而して彼我兩國の王學者、各〻其一を得て、以て實例を遺すものあり。

彼我の王學者、均しく王文成公の遺風を慕ふて立つと雖も、其得る所相同じからず。蓋し是れ兩國民の性質、己に異る所あればなり。獨り王學のみならず、凡そ異域より傳來する教義は、必ず一種の日本的性質を加味して後、始めて其功を奏するなり。而して吾人は、王學に於て其最も顯著なるを見る。

支那王學の弊風

今彼我兩國王學の差異を見んが爲めに、暫く重ねて支那王學の狀態を考察せんとす。當湖陸侍御、嘗て王學を議して曰く、王學敗壞風俗。致明季之喪亂と、是れ恰も孟子が口を極めて楊墨を排擊したるが如し。孟子が楊墨を罵倒して、禽獸の道なりと云ひしは、其末流の弊習を目擊したればなり。一代の名儒陸侍御をして、彼が如き痛擊を爲さしむるもの、豈遇然ならんや。是れ全く支那王學の末流の罪なり。王學者或は陸侍御の言を以て酷評と爲し、彼れ朱子を尊奉するが爲めなりと云ふと雖、然らず。吾人は寧ろ陸氏に左祖するの止むを得ざるものあるを信ず。

明末の王學者流、紛々擾々、野狐禪に非ずんば、則ち虛老、晉代竹林の醉士と毫も擇ぶ所なし。禮儀を蔑如し、道德を顧みず、媚を權門に納れ、賄賂を公行す。猶ほ謂へらく、是れ末節のみ、論するに足らず、且つ曰く、未だ我心學を害することなしと。

唯〻黃石齋と劉念臺の二子は、學問事業兼ね備はり、遂に其忠節を全ふせり。優に王文成公の徒として耻づる所なし。龍溪の精微。心齋の超脫。近溪の無我の如き、其高尙に於ては、文成公を拔くと遠しと雖も、遂に全く枯禪に失するを奈何せん。然れども、三子猶ほ恕すべし。三子の末流の弊や、到底恕すべきにあらず。

此の如くして明末の陽明學者は、社稷の滅亡を致し、後人をして漫りに亡國學の評を下さしむ。故に支那の陽明學者を聞くもの、直ちに枯禪虛老と、放蕩狂逸を聯想するに至れり。故に吾人は斷じて曰ふ、支那王學者は其枯禪的元素を得て、事業的元素を遺失せりと。

日本王學の美風

之に反して我邦陽明學は、其特色として一種の活動的事業家を出せり。藤樹の大孝、蕃山の經綸、執齋の薫化、中齋の獻身的事業より、維新諸豪傑の震天動地の偉業に至るまで、皆な王學の賚ならざるはなし。彼の支那の墮落的陽明學派に反して、我邦陽明學は凜乎たる一種の生氣を帶び、懦夫も志を立て、頑夫も廉なるの風あり。是れ他なし、兩國民の性質の然らしむる所なり。日本國民の性質は、

我國民の性質

彼に比して義烈にして俊敏、且つ更に現實的に傾き、實踐的性質に富めり。故に偶〻微妙幽玄なる理論を得て、之を攻究するあるも、未だ之が闇奥を闖はずして、忽ち之が實行如何と顧み、若し實行に得ざらんか、遂に之を取らず。故に玄妙精緻なる哲理も、一度我邦學者の頭腦を通過すれば、直に日本化して一種の淺近にして、實行に便なる部分のみ發達し、抽象、純正、高尚の部分は或は疑はれ、或は除かれて、其發達を見ず。我邦に在りて最も高妙幽遠なりと稱せらる、眞言天台の二宗が、平安朝に在りて、如何に加持祈禱を專一とし、又本地垂迹說に盡瘁せしか。德川時代の諸儒が、宋學の理氣說を取舍する、近時の學者が西洋哲學を撰擇する、皆な然らざるはなし。カントの哲學は、如何に精妙に入るも、我邦人は只〻日本的眼光を以て、其彷彿たる片影を窺ふに過ぎず。而して皆な謂へらく、吾れ彼の全豹を窺ひ得たりと。豈に特にカントのみならんや。

王學の得失

然れども更に一言す、吾人が此の陽明學を分析して、二元素と爲すものは、後輩に就きて言ふものにして、王文成公に就きて言ふにあらず。夫れ王文成公は、文武兼備の達士なり。其學は該博にして究めざる所なく、其事業は赫々青史を照すものあり。故に簡易直截を旨とし、頓悟の風ありと雖も、野狐禪に流るゝとなかりき。支那後世の王學を承くるもの、唯〻彼の頓悟の風を仰き、心法を是れ事として、學問事業を顧みず、沈思默坐、面壁數息を以て、斯道の本領と爲すに至れり。然らざるものも、外觀頓悟を粧ふて、狂逸を以て高しとなし、遂に人倫を蔑視するに至れり。是れ末流の弊にして、亡國學の謗を逃きし所以なり。然れども陽明學が元と其素を含まざりしとは言ふを得ず。是れ王學の特色にして、功罪共に之に係る所以なり。唯〻之を學ぶ者の性質如何と顧みるべきのみ。我邦人幸に其善美なる一元素を主として、事業學問兩ながら好結果を得たり。是れ彼我兩國の王學派が相同じからざる所以なり。

本書の微志

方今我邦奎運隆盛、敎育事業、固より既に備はれり。然れども重んずる所は智育に在りて、品性の陶冶に在らず。讀書登第を以て、敎育の能事と爲すは、識者の深く嘆する所なれども、之を矯正する固より容易の業にあらず。偶〻具眼の士、之が救濟の策を講ずる者ありと雖も、未だ其功を奏せざるに似たり。『陽明學は簡易直截の學なり、簡易なるが故に入り易く、直截なるが故に行ひ易し。入ること易

く、入りて得ざるなきは、陽明學を以て最と爲す。特に精神の修養、人物の鎔鑄は、陽明學の長所とする所なり。日本の陽明學を以て、支那の陽明學に比して、其差異あると、己に上來陳述するが如し。是を以て吾人は竊かに日本の陽明學を歴史的に攻究し、一は以て學界に微貢を献じ、一は以て世の青年の精神修養に資せんことを期す。唯、恨むらくは短識謭才にして、椽大の筆なく、偉人傑士を傳ふるに適せざることを。然れども讀者若し文を以て意を害するなくんば、古今の活動的偉人は、躍如として起ち、能く諸君が精神を養ひ、氣格を高むるの友たらん。

本論

第一　中江藤樹

生長

中江藤樹、諱は原、字は惟命、通稱は與右衛門、默軒と號す。皇紀二千二百六十八年、慶長十三年三月七日を以て、江州高島郡小川邑に生る。幼にして穎悟、嶄然頭角を見はす。元和三年、祖父吉長に從ふて伊豫大洲に移る。吉長は風早郡の宰たり。藤樹年十歳、塾師に就き庭訓式目等の書を讀む、誦過數遍にして盡く之を背記す。祖父吉長大に喜び、客に對する毎に輙ち口を極めて之を誇稱す。然れども藤樹未だ以て自ら足れりとせず、謂へらく、人生當さに爲すべき所、豈に是より大なる者なからんやと。歳十一始めて大學を讀み「天子より以て庶人に至るまで、壹に是れ皆な脩身を以て本と爲す」と云ふに至り、嘆して曰く、幸なる哉　此經の存するや、聖人豈に學んで至るべからざらんやと、因て感泣衣を霑す。年十二、一日藤樹食に方たりて箸を投じ、自から責めて曰く、此は是れ誰の賜ふ所ぞや、一は則ち父母、二は則ち祖父、三は則ち君、三者の恩は須臾も忘るべからずと。六年夏、霖雨、五穀登らず、風早郡最も甚し、奸人須トと云ふ者あり、郡民を煽動して將に暴行を爲さんとす、吉長

戯學

報恩を期す

探知して之を罪す。既にして須トの子爲めに讎を報せんと欲し、夜に乘して火を吉長の宅に放ち、因て以て之を殺さんと謀る。吉長藤樹に命して、毎夜其庭内を巡察せしむ。一夕、須トの子、徒を率ゐて來り襲ふ、其の備あるを知りて去る。吉長藤樹と與に門を開て出てて之を逐ふ、時に年僅かに十三。而して意氣安閑、神色自若たり、家人其膽勇に服す。是年冬、吉長風早郡より藤樹を携へて大洲に歸る。藤樹謂へらく、吾素と田野に長じ、今遽かに士大夫と接す、苟も言語動止、禮節に違ふことあらば、恐らくは其笑侮する所と爲らんと、因て日夜思慮す。年十四、一夕大夫某、來りて吉長と談す、藤樹以爲らく、是れ國政を執る者、器識當さに常人に異なるべしと。乃ち耳を壁に屬して之を聽く、終夜の言論、平平凡凡、他の奇なし、藤樹大に之を怪しむ。八年九月祖父吉長歿す。藤樹大喪に遭ふて哀痛色に形はる。爾來益〻言行を謹む。

藤樹の膽勇

朱學時期

寛永元年、京師の僧來て論語を講す。時に大洲の士人、武を崇び文を卑み之を聽く者なし。藤樹獨り往て學ぶ。乃ち四書大全を得て之を讀む。然れども深く物議を憚り、晝は乃ち諸士と與に武を講じ、夜は則ち燈に對して書を讀む、未だ期年ならずして業大に進む。寛永二年正月、父吉次歿す。訃至り藤樹慟哭し、歸り葬らんと欲す。故ありて果さず、是に於て藤樹始めて致仕の念あり。四年夏、儒禮を用ゐて祖父長吉を改葬す。時に大洲の士人、藤樹の言行に感して學に志す者あり。藤樹同志を得て大に喜ぶ。乃ち中川貞良等と經學を講習し、斯文を興すを以て己が任と爲す。時に藤樹專ら朱學を奉し、動もすれば禮法を用て自ら持す。嘗て兒玉某を訪ふ、會〻荒木某座に在り、藤樹を呼て孔子と爲す、藤樹怫然として曰く、孔子卒してより此に二千有餘歲、今汝我を目するに孔子を以てする者は、豈に我が文を學ぶを以て之を嘲けるか、文を學ぶは士の常のみ、士にして文なければ奴僕と何ぞ異ならんと。某愧ぢて去りぬ。六年冬、暇を乞ふて母氏を江州に省す。九年春、復た暇を乞ふて歸省し、因て母氏を奉して大洲に歸り以て養はんとす。母氏老て他鄕に往くを好まず、乃ち己むを得ずして返る。途に咳喘を患ふ。十年正月元旦、藤樹阜魚傳を讀み、「樹靜ならんと欲して風止まず。子養はんと欲して親待たず。」と云ふに至り、母を思ふて止まず、乃ち詩を賦して曰く、

格法家

風樹の感

羈旅逢(テ)春遠耐(タリム)レ哀　繙(タル)レ黄鳥止(ル)二斯梅(ノニ)一
樹欲レ靜兮風不レ止　來者可レ追歸(フフリナンイザ)去來

十一年三月、藤樹官を棄てゝ去る。此より前き藤樹母氏老て侍養人なきを以て、屢〻情を陳べて致仕を請ふ。侯其人と爲りを重んじ、且つ他藩の爲めに聘せられんことを慮りて允さず。是年又書を執政佃氏に上りて苦請し、誓ふに二君に仕へざるを以てす、報せず。是に於て先づ京師に如き某氏に寓し、以て罪を待つこと百餘日にして逮問至らず、乃ち小川邑に歸る。

孝養の爲めに官を去る

鄉先生

初め藤樹の大洲を去るや、俸米若干斛、之を倉廩に藏めて封鎖し、家貲を傾けて悉く諸債を償ひ、餘す所、錢三百、乃ち二百を分て僕に與へて遣り歸らしむ。餘錢僅かに百文、以て生を爲すなし。乃ち佩刀を鬻き、銀十枚を獲、以て酒を買ひ、親ら壚に當て之を賣り、又た債を放て息を收む、其息を收むるの薄きを以てや、鄉人期に及て償還せざるなし。又旁ら子弟を集めて學を講す。一日門人に語て曰く、余は小川邑に歸りてより此に一年、始めて此心稍々安然を覺ゆ。故に寢ぬれば則ち席に貼く。嚮きに大洲に在るや、夜寢に就くも人呼一聲すれば輒ち覺む、自ら謂らく、語に所〻謂寢ぬるに尸せざる者に庶かしと。今にして之を思へば、是れ支撑矜持の過のみ。十五年、大野丁佐來て學を受く、丁佐性魯鈍、醫を學ばんことを請ふ、藤樹之に大成論を授く、讀誦數百遍、一字を記する能はす、後漸く進み、丁佐遂に醫を以て家を成す。藤樹一夕諸生に語りて曰く、余、丁佐に於て吾が精力を竭し丁んぬ、然れども彼の勉勵の功に非んば、吾亦た未だ之を如何ともすべからざるなり。二三子天資丁佐の比にあらず、苟も志あらば何ぞ成らざるを患へん、特に一の勉の字を欠くのみと。是より先き藤樹四書を講じ、凡そ日用常行、一に聖賢の遺法を遵守せんと欲す。是に於て稍々其窒礙して行ひ難きを覺ゆ。更に五經を取て之を讀み、頗る感發する所あり。乃ち原人及び持敬圖說を著はす。十六年學舍を建て、

丁佐を教ふ

朱學を疑ふ

乃ち藤樹規及び學舍座右戒を撰ぶ。年三十三性理會通を讀み、感する所ありて太乙神を祭る。爾來每月以て例と爲し、曰く祭天の禮は天子之れあり、士庶人の如きは、則ち太乙神を祭れば可なりと。乃ち太乙神經を撰び、未だ稿を脫せずして疾に罹りて止む。又深く孝經を尊信し、斷乎として以て孔氏の遺書と爲し、每朝之を拜誦し、且つ愛敬の二字を揭げて諸生に敎ふ。

陽明學の曙光

是年冬、王龍溪語錄を獲て之を讀み、心に其多く禪語を用ふるを病む。後に陽明全書を見るに及び、乃ち釋然として悟りて曰く、聖人一貫の學は太虛を以て體と爲す、異端外道、皆な吾範圍內に在り、吾安んぞ言語の相同しきを忌まんや。且つ當時禪を學ぶの徒甚だ衆し、若し其をして之を讀ましむれば、則ち亦た吾道の至大にして外なきを知り、自ら其非を悟るに庶からんか、先賢世を救ふの苦心想ふべしと。十八年七月熊澤蕃山來り學ぶ、藤樹未熟を以て辭す。固く請ふ。乃ち謁見を許す。冬十一月再び來り、門人淵出某に因て懇請して止まず。藤樹其篤志に感じて、遂に業を授く。是年藤樹始めて拘泥の非を悟り、諸生に謂て曰く、余嘗て朱學を信し、汝輩に命するに專ら小學を以て準則と爲しき、今始めて其拘泥の甚しきを知れり。蓋し格法を守ると名利を求むるとは、日を同ふして論ずべからすと雖も、其の眞性活潑の體を害するに至りては則ち一なり、汝輩聖賢の書を讀まば、宜しく其意を師と

豁然貫通

拘泥の非を悟る

すべし、其跡に泥む勿れと。聞く者大に興起す。年三十七、陽明全書を得て之を讀み、沈潛反覆して大に得る所ありき。是より先き大學の解を作る、凡そ三たび、未だ格物致知の要を得ず、心深く之を憂ふ、是に至て其致知を解して致良知と爲すを見て、乃ち默坐澄心、之を人情に驗し、之を事理に考へ、之を詩書語孟の言に質して、一として脗合せざるはなし。是に於て豁然開悟、多年の疑、始めて釋けぬ。爾來常に學者の爲めに至善に止まるの工夫を說く。藤樹多病、嘗て四書解を著はさんと欲し、僅かに數篇にして又疾に罹りて止む。藤樹病革まるに及ひ、几に憑りて端坐し、遠く婦女を去り、門人を召して曰く、吾去らん、誰か能く斯文に任する者ぞ、噫と言ひ畢て瞑目して逝きぬ。實に慶安元年戊子八月二十五日なり。享年四十有一。門人相會し、文公家禮を用て、之を小川邑玉林寺先塋の側に葬る。隣里鄉黨、老を扶け幼を携へ、涕泣して柩を送ると親に喪するが如し。備前芳烈公、訃を聞き、其臣熊澤蕃山をして來り、賻せしむ、後ち邑人藤樹の宅を修めて祠堂と爲し、春秋奉祀、今に至りて廢せず。

終焉

學說

世界觀

藤樹は宇宙を以て太虛より生ずる者とし、太虛は理を體とし、氣を用とす、太虛は只理氣のみなり。而して理は寂然不動にして氣は流行活動す、理は寂然不動なれども、至神にして感す、且つ感に動靜あり、故に動て陽を生じ、靜にして陰を生ず、此感即ち太虛の原動力なり。感ずるは太虛の用にして氣の流行活動は此に始まる、故に先天に在りては、理氣は合一なり。已に一動一靜、互に其根となりて生々息まず、遂に天地を生ずるに至り、天地は亦た人、及び物を生せりとす。以上の意を考察するに宇宙は無始無終なり、何となれば太虛より生ずと言ふも、太虛は只理氣のみ、其理氣は無始以來、法爾として存在すればなり。且つ一動一靜、互に其根となりて生々息まずと云ふは、無終の意なるを見るべし。是れ藤樹が純正哲學に入るの點なり。又云く『太虛は理のみなり、語を換へて言はゞ唯一氣なり、理は氣の德なり、一氣屈伸して陰陽と爲り、陰陽は八卦となり、八卦は六十四爻となる、其れより以往、一理萬殊、言語を以て盡すべからず、天地萬物の理、極盡せり。理を主として謂へば、氣は理の形なり、動靜は太極の時中なり』と云へり。

宇宙の本源

藤樹は詳密なる天道圖說を立つ、即ち左に揭ぐる所なり。

天人合一

是れ天の四德を四方に配當し、五行を四方及び中央に配當して、生々の順序を示せるものなり。此配當を試みるは、其根源は夙とに尙書洪範に見えたれども、數を以て彼此配合し、天人をして直に貫通融會するが如く極言せしは、漢儒の首唱に係り、特に董仲舒の春秋繁露、荀悅の申鑑等に詳かなり。當時學者多くは批評的眼光なくして、盲信瞽從するの傾あれば、何等の顧慮批判もなく、五行、讖緯學を

東西比較

唱道するに至れり。其害の及ぶ所は極めて廣く、天下到る所に祥瑞符命の怪談を生じ、遂に王莽の簒立を資するに至りしなり。天地自然の現象に托して教を立つることは、或範圍内には極めて有効なれども、一歩を過まれば、言ふべからざる弊害を生し、迷信を懷かしむるに至ることあり。

五行を以て宇宙創造の元素と爲すの説は、支那に在りては太古より有りしが如し。之を希臘の古代哲學に徵するに、ターレスが天地萬物の本は水なりと云ひ、アナキシメネスが空氣を以て萬物の元と爲し、ヘラクリタスが火を以て萬物の元なりと論じ、エンペドクリースは水、土、火、空氣の四元を以て萬物の元素と爲したるあり。支那に於ける五行説と粗、相似たり。支那には早とに易經に於て宇宙の創造を説き、「天一生レ水」云々の語あり。洪範の五行説は支那に於ける五行説の淵源にして、古今一轍に之を信じ、遂に東洋一般に行はるゝに至れり。

藤樹は最も熱心に之を唱へ、詳かに之を解説せり。然れども固より奇怪なる現象をも妄信するの失なきにあらす、今左に之を掲げて其一斑を示さんとす。

天道圖説

天道圖説の解

口は寂然不動の象なり、○は流行活動の象なり。口は理を圖し、○は氣を圖せり、太虛は理氣のみ、天道は至誠無息なり、故に誠の字を中に書す、誠は天の道なればなり。其中自ら元亨利貞の條理あり、之れを天の四德と云ふ。四德もと一理にして無方の神なれども、天地開らけ形象定りて後ち、木は東方に位す、木氣の神を元とす、故に左に書す。火は南方に位す、火氣の神を亨と云ふ、故に背に書す。金

は西方に位す、金氣の神を利とす、故に右に書す。水は北方に位す、水氣の神を貞とす、故に前に書す。元理感じ、木氣流行して萬物生ずるを春とす。亨理感じ、火氣流行して萬物長ずるを夏とす。利理感じ、金氣流行して、萬物收まるを秋とす。貞理感じ、水氣流行して、萬物藏るゝを冬とす。土は中央に位す、土氣の神を誠とす。土用は四氣に應ずるが故に、四隅に書す。然れども生々の序は、木火土金水なり。火は土の母なれば、未申を盛位とす。これ天地鬼神の造化をなして、無盡藏なる道理なり、と。五行を以て方位に配當するは、易の說卦に起りしものならん。斯る配當學には、或は薄弱なる現象を認めて、强ひて之が說明を爲すもの多し、藤樹が信奉的性僻に傾きて、最も奇異なる事實を以て、眞面目に宇宙の現象に融通せんとするは驚くに堪へたる所あり。

元素

五行を以て萬物の原素とするの說は、東洋に於ては久しく其勢力を逞くしたれども、西洋に在りては漸く緻密なる分析を試み、遂に六十四元素に至て、尙ほ之に止らずとす。然れども五行を以て萬物の元素と爲すの說は、之を誤れりとは言ふべからず。只未だ化合體たる物に、已に元素の名を附したると、且つ其外に許多の元素の存するを探究せざりしのみ。

摘要

要するに藤樹の宇宙觀は、宇宙は太虛より生ず、太虛は理氣のみにして、萬古に亙つて始終なく、中に陰陽五行の活動流行ありて、生々不息なり。即ち造化は無盡藏なるとを認む。故に太虛は自存にして絕待的なるとを知る。彼の耶蘇敎徒が天地を以て上帝の創造と爲すとは全く異りて、藤樹は理氣より活動流行して萬物を生々して無盡藏なりと云ふ。而して此說は實に儒敎古來の相傳に外ならず。

人生觀

天人一貫の說

藤樹は專ら天人の合一を唱ふるの便を求め、盛んに配當を試みたり。故に人は小躰の天地にして、天地は大躰の人なりとし、太虛即心なり、心即太虛なりと看破せり。而して人は小宇宙なり、人は宇宙の模寫なりといふは西洋哲學者も均しく唱ふる所、王陽明の學派に在りては合一、若くは即の字を以て一貫するの手段多し。而して唯心說を以て巧に此一貫を說けり。藤樹は能く此學風を承けて、天人合一を說きて倫理の基礎を作らんとす。其言に曰く、「人は其形小なれども、太虛の全體あるが故に、人の性にのみ、明德の尊號あり。故に人は小躰の天にして、天は大躰の人なり。人の一身天地に合せども、少しも違ふ事なし、呼吸の息は、運行に合す。天地造化の神理主宰を元亨利貞と云ひ、人に在ては仁義禮知と云ふ。天地人を三極と云ふ、形は異なれども其神は一貫周流して隔てなし。理に大小なきが故に、方寸と太虛は本より同じ」。と又曰く、「心は空を以て躰とす。故に天地萬物に於て、感應せずと云ふ事なし。心は生々の理を以て神とす、日として生せずと云ふ事なし。是を以て性と云ふ。性は心の本然なり」。又曰く、「無極の理、二氣五行の精神合して人となり、明德具はる、之を性と云ふ。性中自ら仁義禮智の條理あり」。又曰く、「我心即ち太虛なり、天地四海も我が心中に在り。」と。異日、大

二氣五行

鹽中齊が太虛主義を唱へ、天人合一を證したるも、此に淵源するもの少からざるべし。斯の如く天人合一を說き、天の道は至誠無息とすれば、性善說は直に之より推斷せらるゝも、惡は何に由て生ずるやは、更に說明を要するなり。而して藤樹は水の清濁を以て性の善惡を說けり。是れ宋儒が均しく唱ふる所にして、濁を以て氣禀の溷濁に比するものなり。然れども水の清濁を以て、性の善惡を說くは、已に不完全を免れず。猶ほ他日を待て之を論せんとす。

惡之起源

藤樹の人道圖說は次に示すが如し、

人道圖說

人道の解

「惟此の無極の理に、五行の精妙、合して人となり、明德備はる之を性と云ふ、性中自ら仁義禮知信の修理あり」と云ひ。次に元亨利貞を仁義禮知に配當し、天の至誠無息の眞を信に配當せり。又曰く、「仁義禮知信は天理未發の中なり、故に口に書す、喜怒哀樂は氣の靈覺なり、故に○に書す、惻隱、羞惡、辭讓、是非は、仁義禮知の端なりと雖も、氣に感じて聲色に表はる、故に○に書す。」と又曰く、「信は至誠無息の天理にして、仁義禮知は皆な信あり、故に四端皆な眞實無妄なり、是れ恰も天道に元亨利貞を云て誠を言はざるが如し。四時皆な土用あるが如し。誠は天の道なり、誠を思ふは人の道なり、故に信を中に書す、仁義禮知も無方の神理なれども、同しく水火木金土の神なる故に、天地の方位に配して書す、四端も又四時に配して書す、喜怒哀樂を四隅に書するものは、天の時に象どる」云々。又曰く、又天人合一の圖に、五倫の五典十義を書するものは、天に五行ありて、人に五倫あり、五行の神は元亨利貞の誠なり、五倫の眞は、仁義禮知の信なり」と。又曰く、「天地は元亨利貞の理に從ひて、四時行はるゝ時は、天地立し、萬物育す。人の仁義禮知の性と、五倫明かなるときは、家治ひ國治り、天下平かなり。父母の子を生ずるは、春の物を生ずるが如し、故に左に書す。兄弟長幼相列るは夏の物を長ずるが如し、故に背に書す。君臣は極を立るの大義なり、君臣相適ふて國治り、天下平かなり、天地の化育を助けて物を爲せり、秋に實のるが如し、故に右に書す。夫婦は人倫の始なり、天地開らけて後ち男女あり、男女ありて後ち父子あり、兄弟あり、朋友あり、君臣あり、故に五倫は皆な夫婦

の内に籠れり、天の冬を以て隠すが如し、故に前に書す。朋友は五行に配しては土なり、土は定位なし、故に外に書するのみ」と。前後左右の位置に關して精密ある理由を附す、復た吾人の解說を要せざるべし。

修德の工夫

藤樹の修德の工夫は、上來陳べたる諸節の要旨より、直に推究するを得べけん。夫れ天は大躰の人なり、人は天の小躰なり、已に天人合一なれば、其太虛の德を心に存して、之を喪ふことなからんと努むること、是れ修德の最大要義なり。然るに外界の誘惑は、絶えず太虛の德を損して、天と合一することを妨げんとすれば、之を排除して其德を全ふすべきのみ。若し天理を心に存して邪欲を去り得なば、小なる人は即ち是れ大なる天と合一するなり、常に天德を全ふすれば、「天地位焉、萬物育焉」の廣大の德を成すことを得ん。修身、齊家、治國、平天下の大業も、皆な一心の邪欲を去るを以て基本と爲す。

復古を非とす

孟子が「學問之道無ㇾ他求ニ放心ヲ一而已矣」と云ひしも、天性の德を存して、邪欲なきを謂ふに過ぎず。然れども復性說は往々にして誤解に陷り、空禪虛無に流るゝの虞あり、故に伊藤東涯は復性辨を著はして、此害を痛論せり。且つ復性說は退步主義、復古主義に陷りて、生々進化の原則に戻るの恐あり。

心法圖說

心法の圖に口の内に中の字を書する者は、中は天下の大本なればなり。上に無形無色無聲無臭を書する者は、未發の本然を云ふなり。靜虛無欲は中の德なり、寂然不動にして感する者は中の神理なり、故に皆な口の内に書す。神明を方圓の間に書するは、知は心の神明なればなり。元と寂然不動の理なりと雖も、五常の中、先つ感する者なり、天下の萬事を司りて、照さずと云ふ事なし、無聲無臭の本然に於ては、形容接觸すべき端緒なし、聖人の敎を設け、學者の學問を好で理を極め德に入るの門なり、

故に心の神明を方圓の間に書し、愼獨を以て心法の要とす、○の内に和の字、及び動直、無爲。遂通天下之故。を書する者は、發して節に當るの義なり、寂然不動、感するの本立て遂に天下の故に通するなり、靜虛なるが故に動直なり、無欲なるが故に無爲なり。無爲と云ふとも何も爲ざるには非らず、人欲の私なく、天理に從て已むを得ずして應ずる時は、終日爲す事ありて而も無爲なり。文字は同じと雖も、利眞の利と利欲の利と黑白の差あり。天德に在ては物を利する故に道なり。庸人は己を利する故に欲なり。○の下に視善聽善言善行善を書する者は、人は動物なり、行を以て性とするの義なり。善を爲さゞれば德を積むとなし、善と云ふも是れ事を作爲するにはあらず、六藝に遊ぶも、善を爲すなり。今日當さに爲すべき事を爲すは皆な善なり』と。藤樹の意に從へば、倫理學、政治學等の學問は、悉く此修德の工夫に外ならず。心學の名は蓋し此に由るべきも、大學に縷說する所も、要は之に過きず。藤樹は陽明子の學を承け、修德の工夫を說きて、其實用的にして空理に馳せざると此の如し。而して以上に陳べしは君子の心狀にして、次に示すは小人の心狀なり、二者を比較すれば、更に學者の工夫を下すべき所以を明察するを得ん。

凡心圖說

凡心

凡心の圖も口○をなして神明を書すると、君子の圖に同しき所以は、人は聖人凡夫共に天性に於て差なし、善を知り惡を知るの神明存せずと云ふとなし。人々不義を惡み、惡を耻づるの良知ある故なり、唯愼獨と自欺の差より、千里の誤りと爲りて、君子小人の名あるなり、然れども一念自反して惑を辨へ、獨を愼み、過を改めて善に遷るときは、凡夫も君子と爲るべし。故に神明のみ同じく書する者なり。小人は自ら欺て氣に隨ふ故に、心の体の空なる時も眞空ならず、故に口中に頑空を書す、念慮動くときは妄なり、故に意必固我、問思雜慮を○の中に書す、左右の十二字は、凡心の常を書す、是れ唯重き者を擧るのみ、驕るものは客なる者を誹り、客き者は驕者を誹ると雖も、共に凡心の迷ひなる

事を知らず、甚しき者は欲惡の二に陷る故に下に書す。

口の○を離れて高きを悟道とする者は、外見のみにして用を爲さざるとを示す。口○は理氣なり、理氣は有るときは共に在り、離る可らず、離る時は口も實理ならず、○も眞氣ならず、口中に見性を書する者は異端と雖も、寂然不動、無欲無爲の性を見たる事は一なり。口は無の至極なり、聖學には其無を能く極めたる故に惑なし。異學には無を極むると至らず、故に悟りたる所に則ち惑あり。造化の神理を誤解して、天地をも輪廻と見たり。故に佛者は太虛を出て、陰陽を離ると云へり、輪廻を恐るればなり。太虛は外無し、越え出づ可き所なし、又輪廻なし、離る可きもの無し。唯口の寂然不動、無欲無爲にして現はれず、跡なきの眞を見て、佛性とし。茲に至て不生不滅なるを成佛とし、陰陽の生々する体を離れて、我二たび生れず、又子孫なきを以て、出離生死とするなるべし、造化は無盡藏にして無中より生ず、生ずる者は消えず、行くものは返らず、輪廻と云ふ事なし、無始無終とは云ふ可

し、不生不滅とは云ふ可らず。口の前後表はれず、形象聲臭だになければ、又滅ずると云ふとある可き理なきを不生不滅といふ。

禽獸の心の解說

○のみにして、口なきを禽獸とする者は、禽獸は形氣の欲のみを以て心とす、故に○中に主欲の二字を書す、理の知覺なければ、虛生浪死とて、生ずるも辨へなく、死するも朽ち失するのみなり。禽獸も口○離るゝと能はざれども、共に濁りて昧き故に、理の靈覺は見えず。故に無きが如し。人たる者は無欲の性を固有して、無欲の理を知りながら、欲のみを心とするは禽獸に異ならず。禽獸は禽獸と生れたるものなれば、罪なし、人は人の性ありて禽獸に近きは、大なる耻なり、或は問ふ心は靈覺の

名なり、人も物と共に靈覺あり、心の虛靈知覺は一あり、理氣の知覺にあるが如く聞ゆるは如何、曰く靈覺の本は理なり、理の靈覺は至て明かに、至て速かなり。故に感とのみ云ひて知覺とは云ひ難し、是れ至て神明なる故なり。聖人は人の神明なり、平人は聖人の未だ開けざるなり、禽獸蟲魚草木は、氣濁り質變なる故に靈覺鈍し、故に末になりて氣質の靈覺のみなり、本の理の照しは及はず、人は靈覺全し、故に生を知り死を知り、死して亡びざるもの存す。獸は生を知らず、死を知らず、死して亡ぶ。氣質の知覺厚き故に、死を哀しむことを知るのみ、鳥は獸よりも知覺薄し、痛みて哀鳴すれども死を恐るゝ心はなし、大鳥は獸に近きもあり、魚は感のみ有て知覺なし、草木は感もなし質の生のみなり、次第に知覺の薄きを以て不二の二を見るべし」と。鳥獸の知覺の厚薄を說く所、極めて大膽なる推測なるを覺ゆ、其說の事實に反するものあるは已に明かにして、學說として論するの價値なきやの疑を懷かしむ。古人の說を尊奉するの餘り、時々奇怪の說に陷り、知らすして大膽なる臆斷を爲すと多し。是れ殆んと東洋學者の通弊と爲れり、惜むべきかな。

天命性道合一圖說

愛敬は生理なり、悅樂は生氣なり。生理生氣は天道を以て之を言ひ、愛敬悅樂は人道を以て之を言ふ、此れ天命性道合一の圖なり。天人合一、理氣合一之を機と謂ふ、機とは心の天理にして、人間是非の鑑なり。靜虛にして動直なり、至誠にして明達なり、故に機は誠を以て背と爲し、神を以て耳目手足と爲す、体用一源、顯微無間なり。然らば則ち機は良知なるか、良知は無心なり、愛敬を以て心と爲す、良知は無体なり、無欲を以て体と爲す、良知は無知なり、無知を以て知と爲す、愛敬は慈悲無我の眞、無欲は圓神不倚の中なり。無知は謙虛神明の靈なり、嗚呼、愛敬無欲無知は夫れ聖人の聖人たる所以か、心の聖人此れ之を良知と謂ふ、故に其良知を致せば則ち聖は茲に得べし」と。圖中口〇交會の所に『神明』の二字を書すると『機』の一字を書するとに付て藤樹門下に於ても異議あり、清水

季恪は前書の君子凡心の心法圖の方圓交會の所に、機の字を書すべきを主張せり。

上來述ぶる如く、藤樹は修德の工夫を說き、格物致知を以て其意を誠にし、誠意を以て其心を正くし、茲に始めて小人の心狀を脫して、君子の心狀に入るを得べしと云ふ。君子の心狀は即ち太虛なれば、此に達すれば則ち中庸に所謂天地位焉、萬物育焉の德を完備す。然れば吾人は茲に藤樹か格物致知及び誠意に就きて如何なる意見を有するかを考察せざるべからず。

致知格物

藤樹は致知格物を解して曰く、「致知格物は誠意の眼目、入德の門戶、聖と作るの途轍、學者力を用ひ手を下すの實地、聖學の始を成し終を成す所以なり。然るに諸說紛紜として決する所なし。朱子は致知の知を以て德性の知と爲す、即ち曰く知は心の神明、衆理に妙にして萬物を宰する者なりと。而して朱子集註には知を解して猶ほ識の如しと云ふ、是れ蓋し陸象山の末流が徒らに識を斷滅せんとして虛禪に流るゝの弊を矯正せんが爲めなり、故に朱子は他日知は本體の知なりと解したる所あり」王陽明は此弊を憂ひて致知の知は良知なりと解す、此に由て致知の義愈〻眞切明白となれり」と。

更に格物を論しては則ち曰く、朱子は物は猶ほ事の如しと解して、以來學者皆な襲用したれども、未だ盡さゞる所あり。私かに惟ふに事とは五事なり、五事とは視聽言動思を云ふ、蓋し天下の事千種萬

端なりと雖も、五事を離るゝとなし。五事を離るゝときは天下の萬事止む、五事は萬事の根本、善惡の樞機なり。故に五事皆な良知に從ふて、天下の事、善ならざるはなし。五事皆な良知を離れて、天下の事、惡ならざるはなし。書の洪範の九疇には、天道あり、人道あり、天道は五行を以て本とし、人道は五事を根本とす、此を以て印證と爲すべきなりと。又曰く、致は至なり、格は正なり、と。

藤樹は往々にして妄信の跡なきにあらざれども、亦た頗る獨得の見を立つるとあり、事の字の解說を試みて先人未發の言を立て斷々乎として之を五事なりと定む。朱王の說は抽象的にして稍〻漠然たりしが、藤樹は之を具體的に說明して、截然視言聽動思の五事と爲す、其功尠少ならざるなり。

誠意

藤樹意を論じて曰く、意は萬欲百惡の淵源なり。故に意あるときは、明德昏昧、五事顚倒錯亂す、意なきときは、明德明徹、五官令に從ひ、萬事中正なり。是を以て聖人の德を開示するには、則ち曰く、「子絕」四。「毋」意。「毋」必。「毋」固。「毋」我、と。大學の道を敎ふるには、則ち曰く、「誠」意と。人の欲心は昏迷萬端なるに、只意の一字を以て、或は聖德を明かにし、或は學術を開示して他の弊習を指點するの旨趣、深く注意を要する所なり。然るに朱子は大學には意は心の發する所と訓し、論語には私意なりと訓し、互に差異あるに似たり。陽明も深く考ふるとなし、朱子の解に從へるにや。今私かに之を考ふ

意の解

に、未だ明かならざる所あり、夫れ心の發する所は、本來の靈覺、善ありて惡なき者なり。凡心の起發、善あり惡あるは本と心の裏面に意の伏藏あるが故なり。然らば則ち惡念は意の伏藏より發するものにして、本心の發見にあらず。然るを只發する所のみを認めて、善念も意なり、惡念も意なりと爲すときは、善惡の根源、分明ならず。且つ發する所のみを退治して、伏藏の病根を省察克治する講論なきは、本を端たし、源を澄ますの功、缺けたるに似たり。夫れ意は心の倚る所なり、誠意の意と絕四中の毋意の意と本と異義なし。何となれば聖の聖たる所以は他なし、唯意を誠にして聖人の毋意の明德に復るのみ。聖德には本體自然上に論を立つる故に毋意と云へり。大學には用力工程上に言を立つる故に、誠意といへり。誠は純一無雜、眞實無妄の本體即ち良知なり。心の倚る所、良知の誠に從ふときは倚と云ふも邪僻にあらず、倚を以て不倚に至るときは、倚も猶ほ不倚の如し、誠意の立言、切實なるかな、精妙なるかな』と。藤樹の意の字の解は極めて偏固なるを覺ゆ、方今心理學者の所謂意と爲して、之を見るときは殆んど妄誕に近し。藤樹は意を以て全く惡にして意は万惡の根源なりと說く。然れども朱王の說にも合はざれば、之を特刱の見と謂つべきも、取るべき說にあらず。王陽明は其四言敎に於て、有レ善有レ惡意之動と說く。是れ万古不易の確言なり。藤樹は無意を以て自然に合ふとなし、意の作用を絕滅せんとを欲す。且つや誠意の意と、毋意の意を以て同義と爲す、恐らくは非ならん。凡そ吾人か世に在りて善を爲し惡を爲さんと欲するは、皆な意の作用にあらざるはなし。

評論

然るに藤樹は意を以て純惡と爲し、善を害するものと云ふ。是れ蓋し陸象山の末流が、徒らに識を絕滅せんと努めたると擇ふ所なからん。

上來論述する所は、藤樹の學說の綱領に過ぎず、猶ほ其唱說する所許多ありと雖も、繁を恐れて今暫く割愛することとせん。

教育

前後二途に分る

藤樹初め朱學を宗とし、後ち王學に歸す。故に弟子を敎化するの方針も、自ら前後二途に分れ、初め專ら格法を主とし、朱子の小學を以て標準となす。已に王學に歸して後は、弟子に敎ふるに心法を以てし、乃ち自ら致良知の三大字を書して之を楣間に揭く。藤樹自家も初めは嚴肅なる格法家として朱子を學び、後には渾然通達の王子に倣はんとす、故に諸生に告ぐるに屢〻前日拘泥の非を以てしたり。

藤樹歸鄕の後、子弟を集めて聖學を敎授す、遠近より來り學ぶ者日に多し。藤樹は諸子の爲めに、一棟の長家を建て之を會所と號し、此所に臨て書を講し、又時々諸子を集めて談話を爲す、而して其敎育の狀況を察するに

藤樹嘗て誡て曰く、一人の農夫の務と、自身の作用とは一般なりと、會所に臨む時も、一座の議論、深

切ならざるときは「淀舟話に爲りたり、我等は年貢を量り申すべし」とて表家へ歸り去れりと。

取舍

又嘗て曰く、「大學も中庸も經一章にて足れり、論語は聖賢の言行を記したる所に、今日に合はざると有り」と、而して諸子に授くるには其必要の所のみを以てせり。

立志

又嘗て諸子を戒めて曰く、「學問の始めは志を立つるより先なるはなし、憤を發して志を立つるの法他なし、此學は天下第一等の學、人間第一の義にして別事の做すべきなく、別路の走るべきなしと見るべきのみと。

凝滯なし

藤樹孝經を講する時、非二先王之法服一不二敢服一と云ふに至り、此法の字は水を以て去るといふ意なり、此字尤も着眼すべし、水は活潑周流して凝滯なし、聖人の法式は國風に因り、時と位とに因りて、中正の極を立つ、毫厘も人情に違ひ逆ふとなきものなりと說けりと。而して世に所謂藤樹規は寛永十六年、年三十三の撰にして未だ王學を窺はざりし以前に在りと雖も、藤樹規に示す所は、人倫の基礎なれば、固より學說の異同を以て變ずべきにあらず。

藤樹規

大學之道。在レ明二明德一。在レ親レ民。在レ止二至善一。

朱子曰。堯舜使二契爲一司徒一。敬敷二五敎一。五敎者。父子有レ親。君臣有レ義。夫婦有レ別。長幼有レ序。朋友有レ信是也。學者學レ之而已。愚按三綱領之宗旨。一是皆以二五敎一爲二定本一。而其所二以學一之術。存養以二持敬一爲レ主。進脩以二致知力行一。而日新。其別如レ左。

畏二天命一。尊二德性一。

右持敬之要。進脩之本也。

博學レ之。審問レ之。愼思レ之。明辨レ之。篤行レ之。

右進講之序。學問思辨四者。所二以致レ知也。若二夫篤行之事一。則自二脩身一以至二于處事接物一。亦各有レ要。其別如レ左。

言忠信。行篤敬。懲レ忿窒レ欲。遷レ善改レ過。

右脩身之要。

正二其義一。不レ謀二其利一。明二其道一。不レ計二其功一。

右處事之要。

己所レ不レ欲。勿レ施二於人一。行有レ不レ得。反求二諸己一。

右接物之要。

原竊惟。今之人爲レ學者。惟記誦詞章而已。是以吾道之所レ寄。不レ越二乎言語文字之間一。愚嘗憂レ之也深。故推二本聖人立敎之宗旨一。而參以二白鹿洞規條一。列如レ右而揭二之楣間一。庶幾與二一二同志一。固守力行之也。

是れ有名なる藤樹規にして江西なる藤樹書院は此の學規の下に成立し、幾多の子弟も皆な之が躬行實踐を努むるを以て標的と爲す。而して藤樹の學術は日新の學にして毫も固滯する所なし。門人に教ふるにも時處位の至善に達するを以て最緊要の事と爲す。藤樹日新の狀は事々に就て見得べきも、今其の一例を揭げて之を示さん。

藤樹嘗て門人に語りて曰く、『嘗て三綱領解を山田某に贈る、其至善の解に、事善而心無善者。非至善。心雖不違善。事不中節者。亦非至善と曰ふ。當時未だ支離の病を免れず、乃ち此誤謬に陷る。心事一なり。心善なれば事も亦た善、事善なれば心も亦善、天下未だ事善にして心不善、心善にして事不善なる者あらず』と。蓋し前解は朱子に出で、後解は王子に出てたらん。或は難して曰く、所謂善とは如何なる意ぞ、主觀的に善とする所、必しも客觀的に善ならず。中節と善とは、差違ありや、否や。『心、善に違はずと雖も事、節に中らざるものあるは、至善にあらず』とは眞理ならん。藤樹か唯心說の閫奧を闖ひ得て後に、正誤したる『心事一也』の說は、却て前說に及ばざるものあるを覺ゆ、是れ不肖淺學の致す所かと。曰く然り、吾子未だ心事一也、主客一貫の理に達せざればなり。

善惡の標準疑問

藤樹は屢當時諸侯の招聘を受くると雖も、毫も仕路に念なく、悉く病を以て之を辭し、專心一意、子弟の薰陶と著述とに從事せり。故に一言一行も、進學の過程にあらざるはなし。其門人の歸省若くば宦遊するに際しては、必ず當時講習せる書の意義を賦して之を送るを例とす。其他事に觸れ、節に應する、皆な修德の工夫に非るはなし。今左に數首を摘記せん。

送二森村氏一

森村子は道に志して學を好む、已むを得ずして貧仕を干む、東奔西走し、猶は未た得る所あらず。而るに間暇なしと雖も、其志の厚きを以ての故に、來りて予を草廬に訪ふ、爲めに原人持敬圖說を講し、別に臨み、拙詩一章を賦し、以て成美の一事を爲すと云爾。

世間富貴片雲輕　天壽常尊知足榮
西走東奔還可喜　常心庸玉汝於成

送二中村子一

中村子學に志して來り、予に大學の講を求む、既に篇を終へて其志は彌〻篤く、其終始を愼まんと欲す、故に別に臨み、一絕を賦して、誘掖の一助と爲すと云爾。

八目工夫請勉諸　浩然眞氣復二其初一
死生貧富我何與　一片浮氣過二太虛一

死生首尾吟二首

生死は浮べる雲よ昧からぬ
こゝろすなはち大そらのつね

なみたゝぬ水に氷の結ばれて
とくれはもとのなみたゝぬ水

同上

湛然虛明一池水　嚴凜寒風堅氷至
春來風光和煦時　湛然虛明一池水

明德首尾吟

いさきよき月にかゝれるむら雲も
はるればもとのいさきよき月

同上

原是太虛月一團　怒雷陰雨甚無端
陳々西風雲霽后　原是太虛月一團

自反之贊

僅願乎外邪火妄動　胸中焦熱煩燥不恬
一念自反水升火降　焦熱倏消清涼滿腔
大本時立達道溥通　大上眞機自在此中

自反

うつし見よ向ふ心の水鏡
あをぐもふすも身よりなす影

愼獨之贊

心之良知　斯之謂聖　當下自在　聖凡一性
微有動氣　依愼獨名　提撕警覺　太陽已出
昏迷自明　雲行雨施　天日自若

愼獨

あだとなる五の官天つ君
いますときにはみかたとぞなる

止至善二首

春の花秋の紅葉もうつり行く
色は色なき根にし現はる
至善に止りぬれば苦しみの
海の水ひてたのしみの國

良知

外に願ふ百の思案を打すてゝ

良知の外に利もとくもなし

甲申之歳旦

舊年の多同志と與に詩の周南邵南を講明し、臘の下浣に至りて篇を終ふ、是を以て其体察の一得を賦して、以て試毫の事と爲すと云爾。

穆々文王不レ顯レ春　梅花鶯語二南民

何爲后學不二興起一　豪傑惟人予亦人

文王を待て興るは凡民なり、豪傑の士は、文王なしと雖も、亦興るとは、孟子の言にあらずや。後學何爲れぞ興起せざる、豪傑も唯人、予も亦た人なりとは、藤樹の意氣にあらずや。吾人後進豈に奮起せずして可ならんや。

門人

藤樹の人を敎ふるや、其材に隨て之を雅飾す、故に門下名士を出すこと少からず、熊澤伯繼、中川權右衛門、加世八兵衛、中村又之允、山脇佐右衛門等は其錚々たる者なり。

元祿の頃に至り、石川某藤樹先生學術定論を著はし、兼て末流の狀勢を說く。其一節を見るに左の一事を記せり。

門派二分す

藤樹は格物を以て五事を正すと解し、五事を正し、已に克つの工夫を說き、又た良知を致すことを敎へられたり。故に藤樹の門下には克己方と本體方との二派を生するに至れり。克己方とは五事の不正を防ぐを以て專務とし、私欲に克たんとす、本體方とは良知の本體を尊信し、之を保存すれば克己は自然に其中に在りとするなり。

と、此の如く末流は自然二派に分れて克己派と本體派と爲れり。

著作

一　孝經啓蒙　二　翁問答（四冊）　三　大學考（晩年之作）　四　大學解（數章）
五　中庸解（數章）　六　論語解（數章）　七　論語鄕黨翼贊　八　易經解
九　鑑草（三冊　單行）　十　春風　十一　神、大義　十二　持敬圖說
十三　天道圖說　十四　人道圖說　十五　心法圖說　十六　明德圖說
十七　五性圖說　十八　四書合一圖說　十九　大學朱子序圖說　二十　天命性道合一圖說
廿一　大學抄　廿二　詩集　廿三　文集　廿四　歌集
廿五　醫書（若干）　廿六　知止歌

以上の著作は、大抵藤樹全書初編に網羅せり。

孝養

全孝說

藤樹は孝を以て畢生の德行と爲し、一日片時も孝を忘れしことなし、吾人は藤樹の孝を敢て大舜の孝に比せんと欲す。古今孝を以て稱せられし者少からずと雖も、藤樹の孝の如きは、天地間有數のものにして、千歲に一を見るも猶ほ難からん、藤樹の成功せしは、忠にあらずして孝に在り、藤樹の德行は孝を全ふするに因て成り、近江聖人の號は、偏へに彼の孝德の金牌なり。是故に藤樹の孝を說くこと、至大至廣、先人未發の言あり、此說を以て察するも、彼が孝を重んし之に心血を注ぎたるを知るべし。然れども其說は往々附會杜撰の憾なきにあらず、唯孝を以て太天黃地、人間萬物を網羅して之を說き、之を根本說としたるは特創の見にして、輕々看過すべからざるものなり。故に吾人は藤樹の孝養を叙するに當り、劈頭第一に全孝說を揭げん。其說に曰く「孝は天地未畫の前に在る太虛の神道なり、天地人萬物、皆な孝より生せり。春夏秋冬、風雷雨露、孝に非るはなし。仁義禮智は孝の條理なり、五典十義は孝の時なり、神理の含蓄する所を孝とす、言語を以て名狀すべからす、强いて象を取て孝と云ふ、孝の字は老子の二字を合して作れり。今の孝の字は文字の傍偏をなす時、其の畫を省きしなり。天地の未だ開けざる太虛の理を老とし、氣を子とす。天地既に開けては天を老とし、地を子とす。乾坤を老とし、六子を子とす。日を老とし、月を子とす。易の字は日月を合して作れり、日月と老子は其義一なり、易と孝經と隔なき道理なり。山を老とし、川を子とす。中國を老とし、東夷南蠻西戎北狄を子とす。君を老として、臣を子とす、夫を老とし、婦を子とす。德性の感通に於ても、仁は老なり、愛は子なり。此理を以て萬事萬物に推して見れば、孝の理なくして生ずる物なし。此理の我心に有する物を取て受用とすれば、愛敬なり、上より下を見れば、老夫の幼子を携へたる体にして、愛の象なり。下より上を見れば、子の老を載きたる体にして、敬の象なり。其親を愛する心は、推して天下の萬事を敬すべし、愛敬を親に事るの一心の上に盡して、天地同根、萬物一体の性命明かなり、一日も私慾亡びて天理存する時は、其大を尋ぬるに外なく、其小を見るに內なし。僅かに始めて仁を言ふべし、義は孝の勇なり、禮は孝の品節なり、智は孝の神明なり、信は孝の實なり。赤子孩提の時、孝の理始めて親を愛するに發す、花の僅に綻びんとするが如し。其長ずるに及で、心に親を尊ぶの敬發す、花の清香を發するが如し。此愛敬の德は親に始めて顯はる、故に原との名を改めず、親に事る道を孝と云ふ。母に事へては愛顯はれ敬存す、父に事へては愛敬並び顯はれ並び存す、父に於ては其の愛が事を用て、其敬は內に伏す、之を父の慈と云ふ。父の慈と子の孝とを合せて父子有親と云ふ、此孝を以て君に仕へては、敬は外にして愛は內なり。君に於ては、愛敬並び伏して威嚴備はり、仁政行はる。君の仁と臣の忠と合せて、君臣有義と云ふ。妻に於ては愛は導き敬は存す、夫に於ては、敬を用ひて、愛は存す。夫の義と妻の順とを合せて、夫婦有別と云ふ。心ありて斯の如くするに非ず、是れ心の妙にして自然に斯く變化するなり。其中自ら淺深の天則あり、兄に事ふること父に事ふるが如し、弟を惠むこと子を愛するが如し、兄の惠と弟の悌とを

孝及び愛敬

五倫、五常

合して長幼有レ序と云ふ。朋友は眞實無妄なる天道を父母としたる兄弟なれば、實なき者は朋友に非ず、之を朋友有レ信と云ふなり。一人の人ありて子に逢ふては父と呼ばれ、父に於ては子と云ひ、君前には臣と名け、家臣には又君と稱せらるゝが如し。畢竟一人の人なれども、逢ふ所に隨て名替はれり、是れ本と心の一德なれども、位に依りて神通變化して其義極りなき故なり。

と、孝の意義を擴充して、天地未畫の前に在る太虛の神道と爲すの說は、全く藤樹に於て初めて見る所なり、故に他に類を求めて比論することを得ざれども、其說は語りて精からざるの憾あり。孝の字を分析して老子と爲し、二者の關係を示さんとする所、業已に鑿空の嫌なきにあらず。且つや老と子は定體なくして、關係を示すの記號と爲す所も、亦完全ならず。是故に世の學者往々此說を以て、附會杜撰と爲し、直に一笑に附し去らんとす。然れども大孝藤樹の如くにして、初めて此說を立て得べく、且つ以上に陳べし說の外尙ほ數千言の孝を說くものありて皆な親切を極む、是れ職として藤樹は孝經を主腦とし、愛敬の二字を根本主義と爲すに由れり。吾人之を講ずる者、豈に其の立說の源由を究めずして可なんや。

侍養

藤樹天資孝順、幼より祖父母の許に在り、之に事へて甚だ謹む、祖父母亦頗る之を愛養し、凡て書籍筆墨の費毫も吝惜する所なし。是を以て藤樹は講習を得ること意の如くなりき。

藤樹深く先哲を尊崇し、床間に道統傳の一軸を掛け、每朝昧爽に起き、盛服を着けて香を燒き禮拜し、次に孝經を誦讀す。其讀誦は主として感應篇なりき。始めは誦聲高かりしが、晚年に至り音聲稍稍低く、遂に口の內にて讀誦せり。嘗て曰く聲の高きは外に向ふの氣味ありと。世に傳ふ藤樹大洲を辭するの日、一書を裁して之を遺せりと。今左に之を擧げん、

我等老母一人江州に罷在候、母子相離れ候ては、養育心に任せず候故、當地へ呼び下し哺くみ申度由、文にて申遣候へば、返事に婦人は境を越えずと申越し、其の國を出べき氣色なく候、親一人子一人の事に候へば、某を賴みに致し罷在候ゆ、かやうに國を隔て親を他國に捨置物事、道ならず存候故、類りに御暇之義奉願候得ども、御宥免なければ、力及ばず、唯今立退申候。然れば不忠の者と、可被爲思召候得ども、つら〳〵忠と孝との二つをかけくらべ候に、君は祿を以て御招候得ば、我等如きの庸儒は、如何程も御恩に集り可申候。さて又老母は、某に離れ候ては、他に賴むべき者無御座候。されば忠孝の二つを辨へ見申すに、孝は重くして忠は輕し、私儀は重き方に志さし、輕きを棄てゝ立退申者也。かやうに御家を出で、重れて二君に仕ふべき心底無之候。此段聞こし召し分けられずして、不屆に思召候はゞ、如何樣とも可被仰付候、少しも御恨みに不奉存候。道の重きに引かされ罷出候得ば、かりそめにも御厚恩を忘れ不申候、不忠に似たれども天命の至極に於ては丈夫の了簡此上に難及、如斯御座候以上。

中江與右衛門維命

孝は重く
忠は輕し

評論

藤樹は官を棄てゝ孝養を全ふし、忠孝を比較して孝を重しとなし、忠を輕しとなす。是れ其境遇に因ると少からずと雖も、資性純孝の致す所なり。然れども藤樹か忠孝の比較論は直ちに方今我邦に適用すべきにあらず、藤樹の論は唯封建時代の諸侯に對するのみ、吾人帝國臣民としては、忠を以て重しとなすと固より論なきなり。藤樹嘗て痰疾を患ふ、疾む每に數枕を重ねて臥し、癒ゆるに從て之を去

忠は重く
孝は輕し

る。病革る時、母之を問ふ。藤樹母の憂へんことを恐れ、疾を勉めて手自ら一枕を去て曰く、少しく癒えたりと。母喜んで曰く、然らば則ち數日にして必ず起んと。室を去るに及んで沒しき。藤井懶齋の本朝孝子傳に、藤樹の孝を稱し、贊を作て曰く、「淡海吹起。陸王儒風。豈翅善身。誨人有忠。爲母顧褓。旋鄉色愉。于嗟篤孝。性乎學乎。

資性

德化

藤樹人と爲り、眉目清秀、四體豐肥、之を望むに威あり。性濶達大度、其心極めて洒落、而も人其の洒落たるを知り難し。極めて愛敬あり、而も人其の愛敬たるを知り難し。卑遜にして而も陋劣ならず、樸實にして而も固滯ならず。人に對するや、色温にして言正し。平生の作用活法ありて定体なし。應酬の變殆んど形容し難き者あり。其氣宇の定靜なるや、倉卒の間に當ると雖も、遽色あることなく。其威儀の閑雅なるや、昇降進退、自ら規矩に中らざるはなかりき。

大溝侯の臣、別府某は小川村の令たり。一日小川村に來りて事を執る。村民某過て法に觸れ、縲絏に羅る。村民等藤樹に請ひ、別府某に說き、彼が罪を免されんことを求む。藤樹其夜別府某の寓舍に往き、談話して夜半に至る、一言も罪人の事に及ばずして歸る。村民大に之を怪む。藤樹曰く、別府某の顏色解けたり、汝等憂ふることなかれと。翌日果して彼の囚者赦免となりぬ。或人別府某に其故を問ふ、

門人を戒む

別府某曰く、前夜先生の來られしは、彼れの罪を謝せんが爲めなるべし、然るに一言其事に及ばざりしは、我が令たるを敬し玉ひてなるべし。先生禮儀を重んじ玉ふと斯の如し、謝するに堪へず。故に彼れを放免せしなりと、語れり。

藤樹門人中川某が、莊子の大簡飛揚論を悅びて、狂見に走れるを憂へ、或時門人中西某に向ひ、中川子の狂見に走りしは甚だ憂ふべきことなり。假令ひ我子を失ふとも、斯くは憂ふまじきなりと云ひしを、中川某傳へ聞きて大に驚き懼れて、師に見え、怨言して曰く、愚拙は幼年より先生を信じ、身を先生に委ぬ、是れ敢て名利を求むるの意あるにあらず。只正心脩身を求むるのみ。先生御異見の事あらは、何ぞ亟かに正し玉はずして、此過ちに陷らしめ玉ひしかと。藤樹之を聞き顏色を正して曰く、然り、君子は人の非を云ふに忍びず、我不肖なりと雖も、亦君子を學ぶものなり、故に妄りに言はざりしのみ。今にして之を言ひしは、是れ實に止むを得ざるの良知なり。吾子其れ之を思へと。中川某悚然として其過を謝せしとぞ。

聖人の遺蹟

藤樹同里の人、江戸に來りて某家を嗣ぐ、一日客あり、言次儒に及ぶ。客問て曰く、中江藤樹は子の里人なり、聞く其學、世の爲めに仰がる、子必ず其行誼を審かにせん。請ふ吾が爲めに語れと。其人容を改めて曰く、藤樹先生は吾先子の師事せし所なり、因て其平生を悉くせり。實に近江聖人の名に乖かず。我れ出でゝ此家の後と爲るに及で、先子其什襲する所の墨蹟一張を將て我に付し、且つ戒めて曰

く、此れは是れ聖人の手澤なり、兒善く之を藏めて、知らざる者をして汚さしむる勿れと。今吾子は先生を慕へば、則ち之を觀ることを得せしめんと。乃ち起ち更めて禮服を着け、一軸を櫃より出し、捧じて案頭に置き、頂禮跪拜する者猶ほ緇徒の佛像を崇むるが如し。客始めて敬意を起して以爲へらく、藤樹は畎畝の一匹夫、而も士太夫の間に重んぜらるゝと此の如し。其道德 世の所謂儒者と迥かに同からず、我豈に禮せざるを得んやと。盥嗽再拜して後に之を觀たりき。

弔客慚歎す

某州の一士人、藤樹の故里を過ぎ、其墳墓を弔せんと欲し、路を一農夫に問ふ。農夫即ち耒耜を舍て、直ちに趨りて屋に入り、更に潔服を着けて出つ。士人之に跟して行く。既にして墓所に至る。農夫拜掃甚だ恭やし。士心之を訝る。因て問て曰く、爾ち藤樹に於ける、何の親故ありて敬禮乃ち爾るや。農夫曰く、藤樹先生を欽仰する、豈に唯余のみならんや、闔邑皆な然り。父老毎に其子弟に語りて曰く、吾里父子禮あり、兄弟恩あり、室に忿疾の聲なく、面に和煦の色ある者は、職として藤樹先生の遺敎に由ると。此れ一人も其恩を戴かざる無き所以なりと。是に於て士人容を變じて曰く、世稱して近江聖人と爲す、吾乃ち今にして其虛譽に非るを知ると。即ち其墓を敬拜し、厚く農夫に謝して去りぬ。

賊を化す

藤樹嘗て夜、郊外より歸る。賊數人あり、突如として林中より出て、路を遮て曰く、客、橐を解て以て我飲酒に供せよ。藤樹乃ち熟視し、錢二百を擧けて之を授く。賊、刀を拔き叱して曰く、客に求むる所以の者、豈に是れに止まらんや、速かに衣裝及び佩刀を卸せよ。否ざれば則ち多言を須たずと。藤樹神色變せずして曰く、姑らく之を緩ふせよ、吾れ其の授くると否やの孰れか是なるを慮らんと。乃ち瞑目手を叉ぬき、少頃して曰く、吾之を慮るに、假ひ戰て利あらざるも、輕ろしく卸して以て汝に與ふるの理なしと。即ち刀を撫して起ち、且つ曰く、戰ふ者は必ず先づ姓名を以て告く、我は近江の人中江與右衞門なりと。是に於て賊大に驚き、刀を投し羅拜して曰く、敝鄕五尺の童子と雖も、藤樹先生の聖人たるを知らざる者なし、吾黨擾擾して活を爲すと雖も、豈に之を聖人に施すことを得んや、願くは先生其不知を矜んで之を宥せよと。藤樹曰く、人誰か過ちなからん、過つて而して能く改むる、善孰れか焉より大ならんと。乃ち之に說くに、知行合一の理を以てしければ、賊皆な感泣し、遂に其黨を率ゐて良民と爲りぬ。

藤樹の鄕黨皆な其德に薰し、商賈に在りと雖も、得るを見ては義を思ひ、旅舍茗肆の如きも、客の遺卻する物あれば、則ち必ず之を閣上に置きて、以て遺卻者の復た來るを待つ。歷年の後ち、塵土坌滿す、煙管煙包の類と雖も、竟に收用せざりき。嘗て里人驛に供する者あり、値を受けて二錢を餘す、乃ち追行數里、之を還す。其人曰く、汝一に何ぞ廉なるやと。曰く敢て然るにあらず、二錢の微と雖も、之を私せば鄕里に容れられざるなりと。嘗て京師に赴く、行路轎中に在りて、心學を說く、轎夫感動流涕するに至る、其の德化自然に人を感ずること此の如し。是を以て鄕人之を親しむこと親の如く、之を尊むこと神の如し。竟に推尊して佛子と曰ひ、又た遠近、近江聖人を以て稱せり。近江聖人の感化豈に只

轎夫を化す

其の當時のみならんや、今に至て至大の感化力を有す。嗚呼偉なるかな。

論贊

得書時期

藤樹は殆んと一生純然たる學者として立ちたれば、其の生涯は極めて平穩なり。然れども其期する所、高尚にして、聖賢を以て師友と爲したれば、一生は間斷なく進歩したり。彼は中年までは純粹なる朱子學者とし　格法家として立ち、中年以後に至て陽明學者として、渾然通達の人となれり。惟ふに藤樹の學力は多くは朱子學に得て、陽明學に入りし頃は、朱子學を學び盡して之を躬行實踐せんとして此に疑點を發見したるの時なりき。故に陽明子と融然契合したるは、既に一家の朱子學者と爲りたる後なり。而して其陽明學を得たる時期に關しては、先哲叢談には三十三歲の冬、王龍溪語錄を得たりと云ふ。行狀には、二十八歲にして陽明全書を得たりと云ふ。年譜には、三十七歲に陽明全書を得たりとす。然れども王龍溪語錄を得しは、陽明全書を得しに先つと明かなり。而して彼が該語錄を讀みたるは實に王學の門に入るの時なりき。彼が四十一歲の八月に歿せしを以て算すれば、二十八歲に得しとするも、僅々十三年間なり、若し三十七歲に得しとせんか、僅かに四年間なり。然れども元來陽明學は頓悟の風あり、訓詁と究理を主とせざれば、一讀して豁然貫通すれば、則ち幾十年前に悟りたると、毫も異なる所なし。況んや藤樹の既に朱子に疑を懷き、猛烈なる感悟と、鋭敏なる推理力を以て、王學を迎へしをや。故に藤樹が王學の精髓を得て、我邦王學の鼻祖たるとは、疑ふべき所なし。

頓悟

感化力

藤樹が佛子と稱せられ、又近江聖人の號を生前に得しは、自ら彼の資性非凡なりしを見るべし。且つや彼は敏捷なる智力と強大なる意志力を欠かざりしも、寧ろ最も感情に長するの人なりき。遭ふ者を感化し、見る者を感化し、聞く者を興奮せしむるものは、彼の眞摯にして至誠なりしに由れり。藤樹は所謂溫良恭謙讓を以て之を得たりと云ふべく、溫潤含蓄の氣象あり。渾然として玉の如くなりしも、彼は往々聰敏智慧を以て稱せられたり。而も彼は務めて圭角を抹殺し、專ら德行の人たらんとを期せり。彼は人を壓服せずして、人を心服せしめたり。彼は最も感化力に富める精神的教育家となりしなり。日本の學者か一般に支那の學者より實用的なるか如く、藤樹は王陽明よりも、朱子よりも、實行に於て優りたり。彼の教養の主眼は、智に在らずして德に在り。學術に在らずして、實用に在りしなり。即ち彼は王學に入らざりし以前より、知行合一の人なりしに、王學を得て更に數歩を進めたり。彼は知るが爲めに學ばずして、行ふが爲めに學び、又た知るが爲めに教へずして、行ふが爲めに教へたり。

德行

教學主旨

藤樹は其資性と境遇に於て、孝の全德を成せり。人を感動し、一生社會の愛兒として待遇されたりしは、彼れ自身が純孝至誠なりし效果なり。彼の心血は孝の一字に向て傾注されたり。故に孝を以て太虛の神道と爲し、萬有は悉く孝より生せりと言ひ、隨て專ら愛敬の二字を以て教義の根本と爲して曰

全孝

愛敬

く、愛敬は是れ人心自然の感通なり。猶ほ水の濕に流れ、火の燥に就くが如し。吾人は全く氣習の爲めに蔽はる、然れども父子兄弟の間には、猶ほ時ありて發見す、苟も此を認得して存養すれば、則ち聖賢の氣象を窺知すると難からずと。此孝の主義は畢生一貫、王朱の學派を以て變せざりしなり。予は近江聖人の號は、彼か孝養の効果たるとを斷言すれども、若し彼の境遇をして君に仕ふるを得せしめば、忠德を全ふせしや疑なけん。事毎に活應して綽々餘裕ありしは、藤樹の藤樹たる所以なれども、遂に隱君子、鄕先生として一生を終へたるは、彼が資性純孝なると又時勢の然らしめしものあらん。當時朝野の人、學派の異同を問はず、翕然として藤樹の人物を評して、善人と爲し、賢人と爲しき。予は寧ろ聖人を以て、彼を目するの適當なるを信ず。何となれば從來我邦人は支那人と同じく、尙古卑今の弊風に潤溺し、世は古に隆盛を見、人は古人に聖賢ありしが如く、今を以て末世澆漓として、毫も日進の開化を認めざりしが故に、日本に聖人を許されたる人少く、支那に在りても、孔孟以下には聖人を以て稱せられたる人なし。是れ聖人賢者なきにあらずして、尙古復古てふ迷想妄信に因れるなり。無位無爵の人と雖も、已に聖德の天爵ある者は、固より之を聖人と稱せざるべからず。

近江聖人

邦人之弊習

進化猶ゝ攻ゝ瑛

藤樹は既に感情的の人なり。朱王の學も共に信仰的に歡迎し、之を學ぶや智力を以て批評的に解釋せしよりは、寧ろ先づ信して之を習ひ、實行に至りて、始めて齟齬と吻合を發見するなり。而も彼は最も微妙なる點にまで、思索を遂げたれども、或點にては感情の爲めに動かされて、信奉すると多し。

其著書中の事例を擧ぐるを見るに、奇異なる事蹟も、信して之を採れるの跡あり。此の如くなれば彼は精神的敎育家として、亦た頗る宗敎的性質に富めり。若し機會もありたらんには、彼は必ずや宗敎を開始したらん。嘗て性理會通を讀みて大に感ずる所あり、是より每朝必ず太乙神を拜し、遂に太乙神經を作らんとしたりしを見るも、宗敎心に富みしを知るべし。設令ひ一宗を成さゞりしも、彼の性質は最も宗敎家に適當なりしや疑ふ所なけん。

敎育家
宗敎家

藤樹が敎養せし人物は、其目的の如く實行的にして、熊澤蕃山の如き、中川權右衛門の如き、加世八兵衛の如き、其他許多の門人、何れも躬行實踐を旨としたり、然れども藤樹は既に株守家にあらず、時處位の達士なり、其門人蕃山の如きは往々師說と反する點なきにあらず、師說に反するの點ありしも、藤樹敎學の神髓を得たるとは彼が如く明かなり。藤樹と蕃山とは其性行の殆んど總ての點に於て相同じからざりしにも拘らず、蕃山が師の感化を受くるの深く其精神の無限なる賚賜を享けしや、極めて大なるものあらん。

藤門之士

藤樹は己に實行的人物にして感情を以て勝り、信仰に傾ける人なりしも、其鋭敏なる推理力は深く學理の闡明に用ひられたり、固より斬新なる學說を立てずと雖も、取舍折衷の結果として、一種の學說を得たり、特に全孝圖說の如きは藤樹特得の見、是れ古今を通して最も厚く孝經を尊信し、最も完全に之を了得して、其實修を遂げ効果を收めたるに由れり、哲學的考察てふ一段に至りては、稍々薄弱

特創見

の憾なきにあらざれども、世界觀に、人生觀に、倫理說に、一種の意見を有せり。彼は長壽を得す、僅かに四十一にして歿したるに比しては、其著作頗る多し、然れども其著書は朱子學者たる時代に多くして、陽明學者としては寧ろ少し、彼の生活は極めて沈靜にして、變化少かりしを以て其傳記の如きは讀者が覺ゑず案を拍て快哉を呼ぶものなく或は悽然同情を表して、知らず哀涙の襟を霑すものあるなし。然れども彼の間斷なき至誠純孝と、無限なる感化力は、徐ろに後人をして薫化の大なるを感せしむるものあり。故に藤樹を以て標的となさば、設令ひ偉人たる能はざる者も、純正なる孝子たるを失はず。藤樹は畢生胸中に春天和煦の樂地を懷抱せり。大得意の時期なかりしと同時に、大失望の深淵に呻吟するの不幸なかりしなり、溫乎として玉の如く、學德兼備と謂つべきは、其れ此人にあるか。藤樹の名を聞く者は、先づ腦裡に一箇の愷悌の君子を描き出さゞるものなからん。

愷悌君子

天台道士杉浦重剛、嘗て藤樹先生の肖像に題して曰く

何要後進贊　和光而同塵　早已有天爵　曰近江聖人

と頗る吾意を得たり、今籍りて之を茲に揭げつ。

第二　熊澤蕃山

蕃山の幼時

熊澤伯繼、字は了介、小字次郎八、後に助右衛門と改む、蕃山と號し、又息遊軒と號す。本姓は野尻氏。父を藤兵衛一利と曰ふ。肥後守加藤嘉明に仕へ、後ち肥前鍋島侯に仕ふ。熊澤氏を娶り、元和五年を以て伯繼を平安に生む。伯繼八歲にして平安を辭し、母と共に水戸に到り、外祖熊澤守久の鞠育する所と爲る、因て其姓を冒す。守久初め福島正則に仕へて、步卒隊長と爲る。正則の罪を獲るや、大兵其第を圍む、將士離散し、留る者纔かに七人なり。守久。慷慨激烈、危難の間に周旋して、未だ嘗て臣節を失はず、竟に配所に從ふ。正則嘉歎す。後ち水戸公賴房に仕へ、旗奉行と爲る。蕃山外祖の家に在ること八年。此間は彼も亦た當日一般士人の如く、少許の習字讀書の外は、專ら武技の練修を以て、其年少の日を經過したり。蕃山幼にして穎悟、外祖の嚴肅なる薫陶を受け、武術大に進み、齡已に志學に達す。男兒方さに志を立つべきの時なり。寬永十一年、水戸公、德川第三世、家光將軍に從て京師に朝す。守久之に從ふ、是歲蕃山年十六、遠族板倉內膳正重昌、其友京極主膳正高通等の薦を以て、備前の岡山侯池田光政に仕へ、祿七百石を受く。蕃山の家世々武人、父祖の業を習ふ。蕃山は其躰軀素と肥滿す、嘗て人の富貴に豢養し、煖衣飽食逸樂に是れ耽り。身體豐肥、動作便ならざるを見て、謂へらく此の如くんば以て不虞の用に供すべからずと。是に於て酒色を遠ざけ、滋味を絕ち、寢るに帶を解かず、痛く自ら刻苦し　稍や暇あれば輙ち弓銃を提げて、山野に遊獵し、寒暑風雨を避けず、行役江戸に在るも、猶ほ、弄槍擊劍を廢せず。其の宿直に當るときは、臥具中必ず木刀草履を

外祖に養はる

岡山に仕ふ

克己耐忍

儲へ、深夜人の定る後を候ひ、中庭に出でて獨り刀法を習ひ、或は人を避け屋上に上り、疾走飛ぶが如く、其の輕捷を試みて以て防火を習ふ。人或は之を見て天狗の誘ふ所と爲す者ありき。或人光政に問ふて曰く、熊豎子果して異狀ありやと。曰く彼我に侍する、儀容嚴肅、未嘗て懈怠せず、人をして自ら畏敬の念を起さしむ、是を異狀と爲すのみと。此の如くするもの多年にして、體軀稍々削瘦したりと。亦た以て蕃山が少時より克己精勵の常人に超えたるかを想見するを得ん。凡そ人に過ぎたる大業を爲すものは、亦豫め精神と身體に就て人に過ぎたるの素養あり、之を古今英雄豪傑の迹に徵せば、吾言の妄ならざるを知らん。蕃山嘗て當年の實況を語つて曰く。

克己の實況

「愚拙十六七許りの時、已にふとりなんどせしに、他人のふとりて進退自由ならざるを見て、存候は、斯く身軽くては、武士の達者は成り難からん、如何にもして、ふとらぬやうにと思ひ立ち、それより帶を解きて寢れず、美味を食せず、酒を飲まず、男女の人道を絶つこと十年なりき、江戸詰めにて山野の勤めならぬ所にては、鐵を使ひ太刀を習ひ、さのゐの所にも寢葛籠の中に木刀と草履を入れ、人靜まつたる後に、廣庭の人氣なき所に出で、闇に獨り兵法を遣ひ、火事の時にも見苦しからじと、人遠き屋の上を驅け廻り候得ば、稀に見付けたる者は、天狗やいざなはんと申たるげに候。是は二十より内の事にて、餘りに過ぎたるにて候。其以後も麁を持たねば、夏の暑氣にも日中に鐵砲を持ち、野に出でて雲雀を撃ち、霜月極月の雪霜を分けて山中に入り候得共、夜衣蒲團持たせたることなし、薄綿の肌衣の上に木綿裕重ねたる許りにて、挾箱一つ持たせたるも、中ば硯に書物にて　小袖二つ入れたるまでにて、民の家のあばらなるに行掛りに泊り候ひき。其外の勤は精しく申すに及ばず候。三十七八歳まで斯くの如く勉め候故に、終にふとり申さず候、」

天草の亂

此時に當り天主教徒の餘黨、天草島に蜂起して島原城に據る。實に寛永十四年なりき。蕃山の遠族板倉內膳正重昌は、征討兵の監軍として征途に上り。父一利も肥前鍋島侯の軍に從へり。大阪陣後、脾肉の歎に堪へざりし武夫は爭ひ起て軍門に向ふ。多年武術練習に餘念なかりし年少武士、熊澤蕃山の胸中更に如何ぞや。蕃山、雄心勃如として禁ずる能はず、遙かに不知火の天を睨視して、慨然として偉勳を翼ふ。加之、征討の兵久くして功なく主人池田光政は、應援の命を受けて武士を點檢し、寛永十五年二月、兵を出さんが爲に其國に就く。而して蕃山は未だ冠せざるの故を以て之に從ふと能はず、留つて江戸にあり、其の遺憾實に想ふべきなり。光政の國に就くに及び、蕃山は遂に禁ずる能はず、自ら元服を加へ、潛かに歸りて軍に入り只管ら發程の日を待てり、既にして事平らぎ、岡山の師出づるに及ばずして止みぬ。有司彼が法を犯して軍籍に入りしを以て當に刑に處せんとす、光政彼れが志を嘉して措て問はず、却て其敢爲の氣象を知り、漸く將に登用せんとす。然れども徐ろに當時の形勢を察すれば、世は已に攻城野戰を以て功名を博取すべきの時にあらず。今や江戸幕府は四海統一の業已に完成し、第三世家光大將軍の威嚴、天に冲し地を壓す、爾後二百數十年昌平の瑞氣、藹々として四海に充滿す。蕃山の烱眼早く既に此の大勢を洞觀して、謂へらく文武兼資にあらずんば以て世用を爲すに足らず。私かに省みれば武備教育は敢て不足を感せざれども、文事に至りては則ち未だ以て得る所あらずと。是に於て蕃山躰然意を決し、知遇の賢主を辭し、列大夫の位を棄て、飄然笈を負て道を求めんとす。豪傑兒の所爲何ぞ其れ果斷なる。嗚呼尺蠖の屈するは、將に大に伸びんが爲めなり。寧馨兒の志望何ぞ其れ遠大なる。有爲の士誰か彼の精神に感激せざらんや。

肉跳り血涌く

法を犯して軍に從ふ

時勢を洞觀す

苦學時期

寛永十五年、蕃山年方に弱冠、新太郎少將光政、頻りに眷遇を加へ、將に大に用る所あらんとす　而して蕃山固辭するに未學を以てす、光政深く其志を嘉みして强て之を止めざりき。蕃山の仕を致して岡山を辭するや、乃ち去つて近江桐原に赴き、處士伊庭氏に寓す。是より父に從ふて兵書を學ぶと歲餘。

兵書を學ふ

志學深厚、氣力方に壯なり、夙夜精勵、殆んど寢食を忘る。同十七年、初めて四書集註を讀むに及びて恍然感悟し、茲に攻學の大方針を確定せり。翌年八月笈を負て京師に遊び、良師を求めて未だ其人を得ず。失意悶癇、交も至り、獨り鬱陶として逆旅に在りき。一客あり、俱に宿に投ず。蕃山に語りて曰く、往日余れ主の爲に遠行す。時に金二百兩を懷にす、即ち主の齎らしむる所なり。途に驛馬に跨り、金を出して鞍に繫く、日暮之を收むるとを忘れて宿し、困頓して枕に就く、半夜始めて覺む、及ち金を遺却せしを覺ゆ。則ち茫然猶ほ疑て夢寐と爲す。既にして神及ち定り、痛心疾首、千思万慮、之を求むるに術なし、一に死を薙經に決し、戚然自ら歎ずらく、晏天の弔恤する所と爲らず、此の悲涼に逢ふと。時に剝啄の聲甚だ急なるを聞く、之を問へば則ち稱す馬夫某と、因て亟かに出づ。渠れ即ち金を出して曰く、小子家に歸つて將に馬を洗はんとす、鞍を解くに及で之を得たり、是れ君の遺却する所、故に來て還呈すと。封の完きこと故の如し。吾驚喜措く所を知らず、腰纏別に十六兩有り、即ち解て以て之を謝す。馬夫受けずして曰く、君の物を君に付す、奚の謝か之れ有らん。然れども爲めに夜を冒して來る、此顧賃二百錢を得ば足れりと。吾曰く、孽自ら作す、汝が義心を發すると微かりせば、吾れ生を得るの地なし、所謂る死を生かして、骨に肉つくるなり、不腆の黃物、敢て報と云ふにはあらず、聊か以て寸心を表すと。馬夫愈々辭す。及ち八兩を減ず、亦受けず、稍稍減じて幾かに方金二に至る、馬夫執ること益々確く且つ曰く君請ふ我を溷ると勿れ、予守る所ありと。吾歎じて問ふて曰く、欲に淡き者今の世多く見ず、其の義を以て利と爲すこと、汝の如きに至りては即ち絕えて得べからず、所謂る守る所の者は何事ぞやと。曰く賤役口を糊す、豈に利を想はざらんや。而も中江與右衛門藤樹と云ふ者あり、我が里中に敎授す、嘗て其言を聞くに曰く、誠正以て其身を修め、君に事つるに忠を致し、親に事まつるに孝を盡し、貧を以て濫ること勿れ、賤を以て枉ること勿れと。今若し賜はる所を以て之を利せば、則ち此の心を欺くなりと、言ひ畢りて去りぬ。噫、澆季の世安くにか此の如き人を得べきと。蕃山傾聽するもの良久ふして曰く、馬夫は一鄕の鄙人のみ、素と道の何物たるを識らず、利に趨くこと馳するが如く、何の義をか之れ思はん、而るに其廉潔古の君子に愧ざる者は、必ず敎育の致す所、所謂る中江氏と云ふ者、其の德と學と想見すべきなり。今の世に方つて、此の人を捨て誰にか適從せんと。即日裝束し往て藤樹を問ふ、藤樹辭して見ず。邑人淵田氏に寓して之を請ふこと甚だ切なり。因て相見ることを得たれども、猶ほ業を受くるを許さず、辭するに人の

馬丁も猶ほ義を知る

藤樹の德に感ず

就學

師と爲るに足らざるを以てす。蓋し其の志の眞僞を疑ふなり。十九年七月、再び中江氏に到り、益々請ふて置かず、二夜其廡下に寢ぬ。藤樹の母其志を憐み、藤樹に謂て曰く、人、遠方より來り懇請此の如し、之に其の習ふ所を傳ふるも、誰か好んで人の師たると謂はんと。是に於て始めて之を諾しぬ。時に蕃山年二十三、藤樹之より長すること十有二。二人一たび會ふて聲氣投合、互に其相會ふの遲かりしを恨むもの丶如し、問語數回、蕃山幾くもなくして僑居に歸り。同九月遂に藤樹の門に入る。孝經、大學、中庸を受け。翌二十年四月、桐原に歸省す。藤樹序を作りて之を送る、其意に曰く、悠々たる旻天を父母と云ふ。是に由て之を觀れば、火食して竪立する者は、四海の內皆な兄弟なり、其中或は性命を以て相友愛する者あり。或は面貌を以て相友愛する者あり。或は顚沛流離して告ぐる無き者あり。今吾の熊澤子に於けるや、性命を以て相友愛する者に似たり。是を以て愚不孤の德なしと雖も、往年辛巳の秋、謬て有隣の訪に與かる、と云ひ。次に、推下其所二以相識一之由上有二同聲相應、同氣相求之機一焉。人乎。天也。故講習討論。心々相通融。而甚喜レ得レニ輔仁之益、莫逆之寄趣一の語あり。其終りに曰く、今中庸の講、篇を終ふるに及びて歸省す、因て中庸の要旨を賦し、以て窃かに送言の事に比すと云爾。淵鑑せば惟れ幸なり。

師省

動而無レ動靜無レ靜　無倚圓神未發中
愼獨玄機必於是　上天之載自融通

其就學の期、僅々十箇月に過ぎずと雖も、同聲相應じ、同氣相求むるの機あり。是れ人爲か人爲にあらず、天の然らしむる所なり。故に講習討論、心々相ひ通融せり、甚だ輔仁の益、莫逆の寄趣を得たるを喜ぶと云ふを以て見れば、師弟相承の間、融然契合し、自ら以心傳心の妙機の存せしものあらん。蕃山歸省するや、會〻父、一利は祿を失ふて落魄し、仕を求めて江戸に遊び、蕃山及ひ母と妹とを桐原に留む、蕃山後年自ら當時の狀況を語りて曰く、

苦學の實況

父たる者仕へを求めんが爲めに、江戸に行きければ、東江州の人遠き城屋敷に、母幷に妹共のみありければ、京師にも西江州にも行くこと叶はず、家極めて貧にて獨學すること五年なりき、浪人の間五六年は江州下民の食、百合粉雜炊とゆふものを食し、糠味噌を菜にして、汁肴酒茶なく、清水紙子、木綿布子にて、寒を禦ぎ衣食共に昔を忘れて、樂みて居たりき。』

一簞の食、一瓢の飲、以て陋巷に居る。人は其憂に堪へず、彼れ獨り裕如たり、晏如たり。蓋はず、鳴かざること、既に五年。果して何の樂む所かある。蕃山の歸省は不幸にして退學となり、復び藤樹の門に及ぶ能はざりと雖も、歸省後二年、即ち正保元年、藤樹始めて「陽明全書」を得て之を讀み、廓然感悟する所あり。後ち良知の說を擧げて、以て蕃山に授く、蕃山も亦た其大旨を了得せり、是れ蕃山が陽明學者として樹立するの基礎なり。蕃山爾來深く王陽明を欽慕して、寤寐に之を忘る能はず、所謂る心法を鍛錬して、精神を修養す。私かに謂へらく、大丈夫徒らに雌伏すべからず、當に雄飛す

王學者と爲る

べきなりと。蕃山當時世儒の固陋を見て、心窃かに之を惡む。乃ち自ら奮つて曰く、士君子當に文武兼資之れを事業に施して世用を濟すべし、吾寧ろ一介の武夫たるも、世の儒家者流と爲るを願はずと。蕃山が王陽明を追慕する、豈に偶然ならんや。蕃山既に文武兼備、只其用ふる所に隨て之を施すべし。

經綸

復た岡山に仕ふ

此時に當り、岡山侯池田光政、勵精治を圖る。蕃山の文武の材己に備はれるを知り、復た之を聘致せんと欲し。屢ば京極高通に因て之を招く、遂に正保四年、更めて治郎八伯繼と稱し、禍を解て、復た岡山に仕ふ。光政與に語りて大に悅び、二月十四日、命じて側役となし、祿三百石を給ふ。此時年廿有九。然れども爾後三年間は、蕃山の位置未だ高からず、事務も亦閑なりしを以て、專ら心を王學に潛め、夙とに起き夜はに寢ねて、心法を練り、精神を修養せり。是れ蕃山が異日一躍して顯要の位置に上りて國政に參與し一浮一沈、困厄に遭遇し、難局に當りて綽々然として餘裕ある所以なり。吾人縱令び百千の技藝身に具はると雖ども、之が基礎たる精神の修養を欠がんか、百事全く廢せん。蕃山天睿雄傑、文武兼備、加之、精神敎育の最も完全なるものあり、而して當年蕃山が如何に熱心に心法を練りしかの狀況は其言に徵して知るを得んか。『知れる人、母弟妹のあるを知り、饑饉の餓死に入りなんことを憐れみて、仕へを求めしむ。其比、中江氏王子の書を見て、良知の旨を喜び。予にも亦諭されき、是より大に心法の力を得たり。朝夕一所に居る傍輩にも學問したることを知られず。書を見ずして心法を練ること三年也。舊より親しき者一兩人、粗知て尋ねしに聖學のあることを語りければ、又傳へて志す者五六人に及べり、大に悅で披露せしかば、謗り出來、風波起り、予を失はんとする者あり、是に由りて主人其是非を格たし聽かれき、是れ世に名を知らるゝの初め。主人が志の出來たる端なりき。其時は良知の旨に專らなりき、江西にて學びたる者は、猶ほ以て良知の旨を披露せり、傳て志の眞ならぬ者は珍敷事を得たりと思ひて、十百倍して王子の學をふれ流せり。世の人の聞く所違はず、斯く世に唱へざる以前に幾程もなくて中江氏死亡なりき。』と、此三年間の心法鍛錬は、實に蕃山一生中最要の時期にして、精神修養の完成せる秋なりき。

心法を練ること三年

王學振興

賢良の遇

光政にあらずんば蕃山の蕃山たる所以を知る能はず、蕃山にあらずんば光政をして光政たらしむる能はざりしなり。世の小人輩、蕃山を目するに異學を以てし、之を斥けんと欲し、甚きは之を殺さんと欲しき。然れども賢主光政は深く蕃山の憑依すべきを知り、考糾して其實を得、愈々眷遇を加ふ。蕃山の名是より漸く世に高く、君臣の情交水魚の如く、言ふ所聽かれ、計る所用ひられ、將に驥足を伸すの時到らんとす。

此間藤樹が其門下生、淵源左衛門宗誠に托して、蕃山に與ふる書中に曰く。

仕途紛擾之中、御受用底如何、陰陽起脱而己を底に徹し、中庸を御離れ成されざる樣、日用第一義に候云々。

又、書を與へて曰く、

通音教授

聖學御受用無二間斷一御座候由、自他の大幸不レ過レ之候。愚拙も病者にて何方へも不二罷出一候故、去冬より舊友同志を招き、晝夜議論講明仕り、互の合力にて加增、近年不レ覺至論共出來、聖の至味、古からず存候。此頃の議、其御地同志中へ爲レ聞申度候と、夕庵も申し居る事に御座候。備前公彌〻御進修の由、節々御狀も下され、夕庵の物語りを以て承り、大慶奉レ存候云々。學者も亦た凡夫の徒を樂まずして、日々必爲二聖人一の心術躬行あらば、天必ず之に賢人君子の名を許さん、何ぞ悠々として一生を空くせんや、戒しむべし云々。

光政藤樹を招く

といへるを見れば、東西相距ると雖も、師弟應答を以て相輔益するは曾て絶えざりしならん。光政蕃山の故を以て其師藤樹を尊信し、遂に參觀の途次、大津に宿し、藤樹を招きて道を問ふに至りき。尋いて光政は蕃山の薦に依り、藤樹を聘せんとしたれども、藤樹病を以て辭して就かず。因て其子を招て客と爲し、門人中川謙叔等を召して祿を授く、謙叔直諫を以て著はれ、匡救する所多かりき。蕃山屢〻光政に從て江戸に往來す、諸貴人の其名を聞く者、爭ひ詣てゝ見えんとを求む。閣老或は請て上客と爲し、與に抗禮するに至る。紀伊公賴宣、及び松平伊豆守信綱、板倉周防守重宗、久世大和守廣之、板倉内膳正重矩、松平日向守信之、堀田筑前守正俊等、皆な其人と爲りを欽慕す。是に於て名聲朝野に轟き、天下の士、翕然として其風采を想慕するに至れり。大猷將軍家光公、將に召して之を見んとす、會〻將軍病あり、未だ果さずして薨じぬ。蕃山の德望亦た以て推知すべきなり。蕃山嘗て紀伊侯に過りて備邊策を畫す、公等之を善とす。所謂北狄可レ警の說なり。此時清人明國を滅し、其遺臣鄭成功等の援を我に請ふあり、之が處置は實に當日の大問題なりき。蕃山全盛時代の光景は彼自ら語りしものあり。

將軍も亦蕃山を召見んとす

全盛

三公の職におはします人、愚が虛名を聞召して召されき、饔膳ありしも、少しも取り繕ふ事もなく、輕き朝夕の常と見えたり。其の後ち、こひ茶出でぬ、予辭して次の間に立ち、暫くして入りたれば、其儘置て飲む人なし、關内侯の歷々ありしかども、皆々予に讓り給ひき、其間に關内侯の來て歸り給へ其、次の間までも送り給はず、予が歸りの時は玄關まで送り給はり、下に居て禮し給へり、名を呼び給ふにも殿を付け給へり云々。

蕃山嘗て紀伊侯に至り、入るに及て、一士人の威儀特秀、骨相非凡なるを見る。相與に目を張り注視する良や久ふし、遂に一言を交へず。侯を見て曰く、余今一士を見る、知らず仕臣か將た處士かと。侯曰く、渠れ吾が爲めに兵書を講ずるもの、處士由井民部助正雪と云ふ者なり。蕃山色を正ふして曰く、余其相貌を熟視し、以て其意を察するに君復た彼が如き士を近くる勿れと。他日正雪亦來て侯を

兩雄相評す

見て曰く、前日退朝する比、某衣某形の人を見る、未だ知らず、其れ誰れとかすると。候曰く渠れ吾に説くに經書を以てするもの、岡山の臣、熊澤次郎八と云ふ者なり。正雪色を正ふして曰く、余其相貌を熟視し、以て其意を察するに君復た彼が如き士を近くる勿れと。其後正雪果して不軌を謀り誅に伏す。人其の遠識に服しき。

光政亦蕃山の建議を容れて、諸課役を除きぬ。此の如く國主已に蕃山を信任したるを以て、一藩上下共に彼を信用するに至り。遂に慶安三年五月忽ち擢てゝ番頭とし、藩政に參與せしめ、祿三千石を給ふ。蓋し蕃山をして其驥足を伸さしめんが爲めなり。是歳蕃山年三十二。巨室世家皆な相率ゐて其令を聽き、國中大に治まる、蕃山常に君の心を格すを以て自ら任ず。光政嘗て謂て曰く、我が政善きにあらず、唯隣國に比して稍〻長するを見るのみと。蕃山曰く、是れ則ち非なり、隣國の政固より惡し、今稍〻之に長すと言ふは、所謂五十歩を以て百歩を笑ふものなりと。光政感悟し、益〻勵精して非を改む。

國政に參與す

蕃山が岡山侯の參政として第一に着手したるは、武備の振肅なりき。和氣郡八塔寺村は播磨美作との國境にて、犬牙相錯まり、國其守を難んず。光政特に蕃山に授けて便宜事を行はしむ。蕃山曰く、臣聞く治に居て亂を忘れずと。古へは兵士皆な土着し、墾田自ら備ふ。今遽かに舊制に復し難しと雖も、聊か其法に倣ふて、以て緩急に備へんと。乃ち地を相して田を墾し、士をして土着せしむ。是れ即ち農兵主義の實施なり。蕃山家を治むる儉にして法あり、多く壯丁を養ひ、良馬を畜ふ、婢妾に至りては甚だ寡し。居恒客を愛して士に下り、間燕談論、朝夕倦むことなかりき。是の故に武備振肅久しからずして其好果を得たり。國老某、光政に謂て曰く、「臣等公の伯繼と事を議するを見る、曉るべからざるもの多し」と。光政微笑して曰く、「之を曉らんと欲せば、須らく書を讀むべし」と。賢良の遇、古今稀に見る所、嘻、慶かな。

經綸

次に林政を改善して旱槁を防ぎ、租税法を改良して貢法を平にし、言路を開きて時事の得失を言はしめ、窮民を救恤し、孝悌篤行を賞しき。

蕃山妙へに水利を解す、乃ち建白して溝洫を通し、隄防を造りて以て旱澇に備ふ。蕃山自ら巡察し、馬上に利害を指點す。數年の後ち其言皆な驗あらざるなし。人水利を問ふ者あれば輙ち曰く、吾が治水の術に於ける、固より民の其地に生長する者と、吏の其事に老練する者とに如かず、吾は唯人に取て善を爲すを知るのみと。

水理を解す

此等は實に蕃山が治績の顯著なるものにして、其他奢侈を抑へ、賭博を禁ずる等、固より枚擧に遑あらず。光政の賢を以て蕃山の良に任し、君臣相得て鋭意治を圖りしを以て、當時四方の各國皆な爲政の摸範を岡山に取りしと云ふ。

功成り名遂げて身退くは天の道なり。張良は人間の事を棄てゝ赤松子に從ひ、范蠡は寶を散して五湖の遊を爲す。是れ他なし盛名の下久しく居り難く、喬木の枝風多ければなり。蕃山嘗て三十二、國政に參與してより、明歷二年、年三十八に至るまで、七年間は縱橫に大手腕を弄し、隱然國政を總理するの勢ありき。承應三年、光政に從ひ國に就かんとし。京師を過ぎて京都所司代板倉重宗に到る、重宗窃かに彼に謂て曰く、「卿既に其君を顯はし鋭意政に從ふ、其の失は唯專任に在り、恐らくは中廢せられん、復た江戸に往くと勿れ」と。蕃山曰く『善し』と、弟子其語を聞て曰く、京兆は商賈の政のみ、焉んぞ諸侯の事を知らんと、乃ち勸めて江戸に赴かんとす、然れども蕃山己に私かに遯世の志ありき、同列も亦た久しく其の國柄を執るを疾み、屢々其短を暴露し、讒言漸く起る。其翌明曆二年、和氣郡木谷に獵し、馬逸して壑に墜ち、其右臂を傷け、又た倍〻遯世の志あり。乃ち國老池田伊賀を介して、請ふて光政の第三子池田輝祿を得て家を承けしむ。尋ひで其食邑寺口村を改めて蕃山村と曰ふ。實に源重之が

重宗の忠告

蕃山村に遯世す

筑波山はやましげやま、しげけれど
思ひ入るにはさはらざりけり

の義に取り、以て遯世の意を寓せるなり、蕃山先生の號是より起る。

京師に歸る

萬治二年、蕃山年四十二、病と稱して京師に歸り、了介と號す。今や新生涯に入り、悠々琴書自ら娛む。國典を窺ひ、音樂を學び、兼て著作を事とす。

琴書自ら娛む

蕃山琵琶を小倉大納言實起に學び。箏を藪大納言嗣孝に學び。各〻其の精妙を究む。又笛を善くす。一日笛を吹て越天樂を奏す、適ま名手安倍飛彈守、門を過ぎて之を聽き、歎じて曰く、此れ非常の人なり。其性情の正、聲音に發すと。

蕃山亦和歌を嗜み、好て聯歌を賦す。中院大納言通茂、飛鳥井（アスカヰ）從一位雅章の如き、實に其吟友たり。而して其國典を窺ふや、源語を洛南深草山元政律師に學び、源氏外傳、紫女物語の著を爲す、以て源語の蘊を得たるを知るべし。

此時蕃山は復た天下の學者として、一時名卿鉅公に尊信せられたり、其贄を取りて道を問ひし者は、一條左大臣敎通、久我右大臣廣道、中院宰相通韶、野宮中納言定緣、野宮中將定基、清水谷大納言實業、押小路三位公起、久世中將定清、油小路大納言隆貞等、四方の士固より數ふるに遑あらず。

從遊の士

嘗て深草山の稱心庵に風流佳人の遊あり。蕃山、小倉少將實起と共に庵主元政を訪ふ。興來りて蕃山琵琶を彈し、少將琴を鼓し、元政和歌を賦しぬ。風流雅致、後の韻士をして追懷神往かしむ。

風流佳人の會

京洛に處士たること已に八年、蕃山才鋒絕倫、識見高邁、往日は當代第一流の政治家として英名を博し。

今又た思想界に縦遊して聲價一世を蓋ふ、其交を訂する者は皆な是れ有力なる鉅卿名公なり。然れども彼が有力なる公卿に交はるは、既に江戸幕府の喜ぶ所にあらず。且つや此時牧野佐渡守親成は、板倉重宗に代りて京都所司代たり、讒を信して蕃山を憎む。又其才を妬む者あり、流言益〻行はる。甚しきは「熊澤は備前羽林の小臣なり、妖術を以て聾盲を誣ゆ、聞く者迷ふて多く結納す。漸く黨與を爲すに至る、志を同くせざる者は敢て晤せず、語は大抵耶蘇の變法なり」と言ふに至りぬ、當時幕府の學柄を執りし林家は、蕃山と學派に於て既に相容れざる所あり、且又藤樹の門下に出てたる士も、蕃山が區々たる師迹に拘泥せず活應自在なるを見て、非難を爲すに至る。或は傳ふ蕃山の疑を被りたるは偏固なる山崎闇齋が會津公保科正之に訴ふる所ありしに因ると。會津侯は將軍の近親にして、國家無二の元老なり。加之、寛文六年、備藩淫祠を毀ち僧尼を淘汰するや、愚昧なる佛徒等、糊口の道を失ひ、之を以て蕃山の遺謀に出でたりとして、甚しく蕃山を攻擊せり、之を要するに其源因は一にして足らずと雖も、社會の誹謗と畏懼と猜疑は蕃山の人物の偉大を消極的に發表するものなくんばあらず、當日の京師は多年戰亂の衝に當り、稍々衰頽に傾きしと雖も、豐織二氏以來、已に安樂に就き、公家の都、名爵の中心として、學藝宗教の主權を統ぶ、猶ほ千年の古都として、文物燦然闔國に冠たり。蕃山にして此地に居り、名公鉅卿の間に縱遊唱說せば、幕府の畏懼する所となるは固より其所なり、故に百方手を盡して蕃山を去らしめき。

謗議起る

其の源因

幕府已に四世に及ぶと雖も、家康は創業、秀忠は凡庸、家光は賢明にして巧に諸侯を壓したれども、根柢未だ堅固ならず、未だ以て天下の諸侯をして心服せしむるに至らず。而して幕府の猜疑常に絶えず。京師の名卿、四方の諸侯にして、若し豪邁卓犖なる者出づれば、百方其勢力を殺ぎ、或は之を害するものありしと。士人處士と雖も、文武兼備の豪傑は皆悉く嫌疑を蒙むり、或は反し或は幽閉せらる、凡庸なる國守、無爲の學者、及び僧侶は、最も優遇せられて其終を全ふせり。其例を求めんか、蕃山と同時に出で、德川三百年間屈指の豪傑を以て稱せらるゝ山鹿素行は、兵法家としては山鹿流の祖たり。學者として程朱の說に安せず、卓然として一家の特見を有したる人あらずや、而して此の偉人は幕府の畏懼する所と爲り、事に托して赤穗に謫せらる、時恰も寛文六年十月、蕃山吉野に赴くの前年なり。謫居後に薫陶したるの士は實に赤穗の四十七士なりとす。(聞く四十七士中にも王學者一人ありと)。又た處士軍略家、由井正雪は志を得ずして遂に反しき。浪士の擧動と京都の勢力は、最も幕府の注意を惹く所、蕃山が京都に永住を得ざる、固より怪しむに足らざるなり。

壓制

寛文七年、年四十有九、遂に京師を去りて大和に赴き、吉野に居る。其の永言に、

吉野に赴く

此の春は吉野の山の山人と
なりてこそ見れ花の色香を

既にして蕃山は南山城相樂郡木津川の上鹿背山に遯る、

鹿背山の

つたへ來て春は神代にかはらぬを
人の心ぞ昔にも似ぬ
おなじ江に眠るかもめの心をも
知らで千鳥のたちゐなるらん
雪霜の下より匂ふ梅の花
春まだぬ身ぞうらやまれける

又寒中の梅花雪霜にも色香のかはらざるを手折りて

今ぞ知る蕨にもあらぬ梅が枝を
折りて首陽の人のこゝろを

風して愈々高し

蕃山身に微瑕の存するなくして、端なく謫居の人と爲る、豈に多少の感慨なからんや、然れども蕃山の精神は多年の修養を得て確乎として動く所あらず、困厄の中に在りと雖も、其心常に浩々焉たるものあり。嘗て自ら言ふ『君子は順に逢ふて物を成し、逆に逢ふて己を成す。春夏に暢びて秋冬に收まるが如し』と。今や實に逆に逢ふて己を成すの時到れり。凡そ吾人長へに順境に立つとは到底望む可からず。順境に在るの君子、逆境に在りて小人たる者往々にして存す。是れ其境遇の然らしむる所なりと雖も、其素養の足らざる所以なり。若し眞に價値ある品性を具へんか、屈を受くるに及んで益、其高きを見るべし。蕃山自ら以て雪中梅に比し、又伯夷叔齊の高潔を希ふ、逆に處して晏如たり、裕如たるもの、蕃山の青年に於て、吾人己に之を見き。而して今亦綽々然たること彼の如し、蕃山の人物は年毎に高きを加へ、學問も又更に一段の進歩を見る。

明石に移る

既にして姦黨の蕃山を讒構する者、亦稍勢を失ひ、所司代牧野親成は罷められ、禍に罹る。老中板倉重矩出て丶、京都所司代を兼ぬるに至りしも、蕃山をして再び京都に復らしむるは流言飛語を生せしむべき虞ありて、決して世の靜謐を保つ所以にあらず、是に於て新所司代板倉重矩は、執政酒井雅樂頭忠清に請ひ、明石侯日向守松平信之をして、蕃山を其邑に待たしむ。廼ち鹿背山より明石に至り、大山寺の側に居り、其寓を名けて息遊軒と曰ふ。寛文九年時に年五十有一、精爽少しも衰へず、讀書靜養以て己を成すのみ。

郡山に接む

大山寺の僧始め蕃山を以て佛敵と爲し、大に之を忌む、後ち漸く其眞を知るに及びて、終に其德に服し、遂に蕃山の子が寺邊に狩して、殺生禁制の地に入ると雖も、敢て拒まず。且つ言ふ、「誰か先生を謂つて佛敵と爲すや」と。蓋し蕃山佛を排すと雖も、其意公正、毫も妬猜爭角の情なし、是を以て僧徒之を崇親する者多かりき。

蕃山明石に寓すること十年にして、明石侯松平信之封を大和郡山に移さる。因て彼も亦た郡山に赴き、矢田山に接みき。時に延寶七年、年六十一。諄々後進を誘掖するは蕃山の境遇遂に之を許さず、唯書

窓古人を友として、靜かに道を樂み、心會し興來りて之を筆に命するのみ。然れども諸方に流寓するの際と雖も、舊主岡山侯を思ふの念は、寸時も去らず。時々意見を吐露して補益したり。

翌年五月に、「四世將軍嚴有公薨し、五世常憲將軍職に就く。筑前守堀田正俊策立の功を以て大老となれば、即ち默過するとなし、『予も亦た一人の天民也、天の靈あり。言はざるは罪あるとに候』と、以て彼が經世濟民の意を窺ふべし。

著作

蕃山齡既に耳順を越え、復た世事に意なければ、其母衣服(ホロヒロ)を三輪の社に納めぬ。蕃山是より先き、岡侯の招きに應し、筑紫に遊ひしより聯想して、今亦大和に在りて屢々三輪の社に詣てたるより觸發し、『宇佐問答』、『三輪物語』等を著はし、寓言以て所謂神儒佛三道の得失、國躰皇室等を論せり。遂に水土解を作りて新神道を思ふに至りき。

此間老境に入り、氣力漸く衰へんとする老處士は、端なく悲哀に遭遇せり、即ち彼が最も恃む所の父野尻一利は、延寶八年八月沒し。彼が知遇の舊主池田光政は、同十年五月薨じ。最愛の長子繼明は貞享二年七月、彼に先ちて逝去せり。

古河に移る

且つ日向守松平信之は、老中として貞享二年六月を以て、下總古河(コカ)に封を移さる、尋いて翌年信之歿し、子忠之封を繼ぐ。然れども新郡山侯は池田光政の女婿、下野守本多忠平なりしを以て、好遇前日に異ならざりき。遂に貞享四年八月、幕府命あり、下總古河城主松平忠之をして蕃山を其邑に待たしむ。蓋し此移轉や第五世常憲將軍遂に一たび蕃山を召し見んが爲めなりき、亦た以て老處士蕃山の德望を見るべきなり。

封事を上る

十月、蕃山封事を幕府に上りて、時政の得失を陳じ、大に將軍綱吉の旨に忤ひ、古河に禁錮せらる。或は傳ふ、「大學或問」は實に蕃山が當日幕府に上りし封事にして、其旨に忤ふに及んで、門人改めて大學或問と云ひ、或は「經濟辨」「理濟拾遺」とも名くと。又云ふ、大學或問は、一に「治平別卷」と題す。蓋し別に正編あるなりと、若し然らば所謂正編なる者は、此時の上書なるべし。

蕃山は是より復た時事を言はず。人と語りて語或は之に及べば輙ち筆を把て之を吹き、略〻一言なかりき。且つ業を受けんと請ふものあるも、辭して見ざりきと。自ら語りて曰く、

予を方々より謗り込めて、遠方より尋ぬる人にも、近里の同志にも、道德の物語りするともならざる樣にし。他出も不自由なる躰になり候は、外より見れば、困厄の樣にあるべく候得共、予が心には天の與ふる幸と覺え候。配所の月罪なくして見んとあらまゝ欲しと云へり、世を遁れたる如くなる

粹如晏如たり

靜なる月は、世に在る人の見難き事也。配所なればこそ浮世の外の月も見るにて候へ。假令富貴にして世間廣くとも、我心に實に罪過の覺えあらば、心は困厄の地なるべし、縱令ひ外には罪のとなへ有りとも、我心に耻る事なくば、心は廣大高明の本然を失ふべからず。北野の天神も讒によりて

公明正大

流され給はずば、此くの如き譽はあるまじく候云々、

と邪正古來觀ニ大節一是非死後有ニ公言一とは實に蕃山當日の心事なり。

困厄に處して自若たり、人の寂寥を慰問するあれば、則ち曰く、『人善をなす、惟れ日も足らず』、と。

或は其善をなすの事迹なきを言ふ、彼曰く、『本心義に立てば、則ち梳より盥まで、亦善をなすなり、苟も義に立たざらんか、諸侯を匡合するも、只〻是れ徒閑』と、客歎服しぬ。

其翌元祿元年、年七十其の所懷を述ふ。

老の身の見んとかたき故郷に
春待ち得てや歸るかりがね

懷郷の情

たとへ蘇武にならへる雁がねに、玉章を傳ふがとありとも、人の知らざるが爲めにおふやけの命を背くべからず

ゆく雁に關はなくともおふやけの
いましめあれば文もつたへじ

易實

蕃山天を樂しみ命を知る、固より天を怨みず人を尤めずと雖も、人情豈に故郷を戀ひざらんや。

禁錮の後は蕃山只管ら易解を作くるに潛心したれども、未だ成らずして疾に罹り、元祿四年、秋八月十七日、溘焉として歿しぬ。享年七十有三。

城主松平忠之、彼の長逝を聞て慟哭し、知音親戚を會し、儒禮を用ひて、古河鮭延寺に葬りぬ。訃の岡山に達するや、丹波守政倫大に之を悼み、神主を其家廟に安し、後ち祠堂を蕃山村に建つ。寶永年中に至りて、之を綱濱村の別莊に移し、春秋の祀を奉すと云ふ。

取舍の見地

師弟相承

吾人は今茲に、蕃山の學說を論述すべき機會に到着したれども、彼は自家特創の見なくして、主として、朱王折衷を試みたり。若し彼の特見を知らんと欲せば、唯其出入取舍の際に注目すべきのみ。藤樹も吾人が既に陳べしが如く、特見は希にして、其說は初年より中年までは朱學を專修し、晚年に至りて王學に變したり。而して藤樹が自家の學說として傳へたるは蕃山悉く之を繼承し。只往々二字若くは三字の句を變ずるあるも、意義の差違あるとなし。抑も蕃山の蕃山たる所以は、經綸の才略にありて、學殖の富贍にあらず。且つや彼は知行合一に於ては、堂々たる王學者として仰ぐべきものあり。

精神、を取れ經綸を取れ

是故に吾人は哲學の論は、一に之を師說に讓り、今は彼の出入取舍の間に特見を窺はんとす。而して彼が出入せし區域は、單に朱王に限らずして廣く程、張、周、邵等に及べり、而も王學が其素養の多分を占むるとは、遂に忘るべからず。

藤樹は生前に近江聖人の號を得し如く、活動的にして感化力に富みしと雖も、一國の大政に參與して、其學說を適用したるとなし。藤樹の學を實地に應用して効果を得し者は、蕃山の手腕に依れり。故に蕃山が實施するに當りて、取舍せし所は自然の結果にして、藤樹をして自ら實施せしむるも、亦其揆を一にせしならん。蕃山にして徒らに師說を守株して、應變の才略なからんか、藤樹の學は死學として了らんのみ。是れ固より藤樹の素旨にあらず。蕃山自ら語りて曰く、

時處位の達士

「予が先師に受けて違はざるものは實義也。學術言行の未熟なると、時處位に應するとは、日を重ねて熟し、時に當りて變通すべし。予が後の人も亦予が學の未熟を補ひ、予が言行の往々叶はざるをば改むべし。大道の實義に於ては、先師と予と一毫も違ふこと能はず。予が後の人も亦同じ。其變に通して、民人倦むことなきの知も等し。言行の跡の不同を見て、同異を爭ふは道を知らざる也。先師存生の時、變せざるものは、志ばかりにて、學術は日々月々に進て、一所に固滯せざりき。其至善を期するの志を繼で、日々に新にするの德業を受けたる人あらば、眞の門人なるべし」と、蕃山の言是なり。

卓見

獨り蕃山のみならんや、一般學者も當に然らざるへからず。

彼は又他の門人と異なれば、江西學派に屬せざるやの疑問を解して云へり、「諸子は極りある所を學び、愚は極りなき所を學び候。其時には大小たがひなく候ても、今は大にたがひ申べく候。極りたる所は、其時の議論講明也、極りなき所は、先生の志こゝに止まらず、德業の昇り進む也。日新の學者は、今日は昨日の非を知ると云へり。愚は先生の志と、德業とを見て、其時の學を常とせず、其時の學問を常とする者は、先生の非を認めて是とする也。」と、蕃山が群雀中の一鶴たる所以は、其れ斯れに由るか。

評朱王二子

上述の如き見地にて、蕃山は朱王並取の意見を有せり。其朱王二子を評する言を揭くれば、「朱子……經傳の註に於ては、古今一人の名人也。古人の心に叶ひたると、叶はぬとはあれども、先は初學の手を下しよき樣に、手近く義理の聞ゆる註也。此の一色は後生の者、大に恩を得たり」。と、「王子……孟子の良知良能の奧旨を開き敎へ、自反愼獨の功に於て、後生の學者をして、心を內に向はしむ、吾人德を蒙むること淺からず。內に向ひたる心にて經傳を見れば、語も理も本のものなれども、格別なる所あり」と云へり、是れ朱王二子の功德を稱したるものなり。

二子長所

又其弊を數へては則ち曰く、「朱子……文に廣過ぎたる弊あり、學者理に近くして心法に遠し、書は例へ之(レヲ)は雪中の兎の足跡也。兎は心也、聖經賢傳は皆我心の註也、兎を得て後、足跡は用なし、心を得て後、書は用なし、一貫一路に大やうに取る所もあり、大意を見て心を得べし、日用の功夫に於ては委しく見る事もあり。然れども我が受用の委きが爲め也、唯書のみ委しく見るにあらず。朱子學は餘りに章句を分ち過ぎて、文句の理に落ちて心を失ふこと多し。今の朱學をするものは、是も非も朱子の語とさへ云へば善しと思へり、是故に聖經は註の爲めに掩はれ、心法は經義の爲めに隔てらる、朱學者の

朱子短所

却て朱子を聖門の罪人とするなり」と。

王子短所

「王子……仁に過ぎ、約に過きて、異學悟道の流に似たることあり、學者愈其弊を大にするものあり、亦王子の罪人也」、と云ひ。二子の異同ある所以を陳べて曰く、「道統の傳より來る所、朱王共に同し。其言は時によりて發するなるべし、其眞に於ては符節を合せたるか如し。又朱王とても各別にあらず、朱子は時の弊を矯むべきが爲めに、理を窮め惑を辨ずふる上に重し、自反愼獨の功なきにあらず。王子も時の弊によりて、自反愼獨の功に重し、窮理の學なきにあらず。朱王の世、學者の惑ひ異なり、地を易へば同じかるべし。」と云ひ、前陳の如く自ら其見地を示しては、「愚は朱子にも取らず、陽明にも取らず、唯古の聖人に取て用ゐ侍る也」と又曰く「愚拙は自反愼獨の功の內に向て受用となる事は、陽明の良知の發起に取り、惑を辨る事は、朱子窮理の學に據り侍る云々」と云へり、此等の語に徵するに蕃山は超然として學派の外に出て、只其變通の神髓を得て之を活用するに熱中せしを知るべし。區々學派に拘泥し、朱王の爭を爲すが如きは、固より識者の取らざる所。況や時處位の至善を以て最大要務と爲す、活動的英傑は一學派を以て拘束せんとするも得べけんや。將來學を成さんとする者は、科學的知識と精神修養とを兼ねさるへからず、朱王二子の精神を得て其跡に拘泥するなくんば亦以て偉人たるべきか。日本の王學者が支那の王學者に比して、數層も實行的なることは、既に之を陳べしが、就中、蕃山に於て其最も顯著なるものを見るべし、

王學者の神髓

王學の最好模範

夫れ王陽明の學を傳へて、知行合一を完成し、陽明にも讓らざる活動を爲し、一代の豪傑として欽慕せられ、今に至て王學者の最好模範として擧ぐるには獨り此人あるのみ、若し我國の陽明學派に蕃山の才略事業なかりせば、後に王學に入るもの、或は支那に於ける王學の末流と擇ぶ所なかりしやも知るべからず、是れ獨り吾人の私言にあらず、維新前後の傑士が、如何に蕃山の經綸を欽慕せしかは彼等の言に據りて昭々たるものあり。而して今や遂に我邦の王學者は活動的經綸家の異稱の如く爲れり。

著作

一　集義和書(十六卷)　二　集義外書(十六卷)　三　論語小解(八卷)　四　孟子小解(七卷)
五　大學小解(一卷)　六　中庸小解(二卷)　七　易經小解(師卦以下未完)　八　孝經小解(二卷)
九　易繫辭傳小解(三卷)　十　孝經外傳或問(四卷)　十一　大學或問(三卷)　十二　宇佐問答(二卷)
十三　三輪物語(八卷)　十四　神道大義(一卷)　十六　夜會記(四卷)　十七　三神託解(一卷)
十八　葬祭辨論(一卷)　十九　女子訓或問　二十　女子訓(三卷)　廿一　大和四鑑
廿二　二十四孝評(一卷)　廿三　槃女物語　廿四　源語外傳(五十四卷)等あり
(江西同窓の士、西川季恪、嘗て集義和書顯非を著はして、蕃山を痛擊す。然れとも是れ固より燕雀焉んぞ鴻鵠の志を知らん庶の事のみ)

論評

德川氏三百年は我文學界に於ける空前の盛時。此間或は道德學術に、或は詞藻技藝に、蔚然一家を爲しゝもの、固より少からず。然れども學者として其道に徹底し、政治家として王佐の才あり、經濟家

として濟民の略ありて。偉功を後昆に垂れたる者、獨り吾熊澤子あるのみ。

荻生徂徠豪傑の資を以て、博識洽聞。傲然一世を睥睨して推す所少し。而も其の藪震庵に答ふる書に於て、蕃山を稱するや則ち曰く、『嘗聞。其人太聰明。蓋百年來儒者巨擘。人材則蕃山。學問則仁齋。餘子碌碌未レ足レ數也』と、又徂徠毎に自ら言ふ、『熊澤之知。伊藤之行。加レ之以二我之學一則東海始出二一聖人一』と。又俊逸なる儒醫永富獨嘯庵曰く、『假武以來。豪傑之士四人。山鹿素行。熊澤了介。伊藤仁齋。物徂徠是也』と。

太宰春臺、湯淺常山に復する書に曰く、『夫れ芳烈公は不世出の英主、熊澤子を得て、之に任するに國政を以てせり、明良の遇、實に千載の一時なり』と。

日本詩史に載す、熊澤了介政を其國に爲す、世を擧て知る所なり。余嘗て松原一清が出思稿を閲するに、其の牛隠泊舟の詩に、『漁家兒女亦知レ字。笑將二孝經一教二老翁一』と云ふ句あり。一時の教化想ふ可し。今に至て泮宮の設、尚は典刑ありと云ふ。

蕃山の影響は啻に其當時に止るのみにあらず、遠く幕末に及び、猶は天下幾多の志士に標式尊信せられたるを見る。

顧ふに後の王學者、大鹽中齋の如きも必ず深く蕃山に負ふ所あるべし。特に維新の際、經世濟民の事功を期して崛起したる志士は蕃山の風を慕へるもの決して少からざるなり。横井小楠の如きは日本の學者に於て唯、蕃山のみを取りしといふ。

藤田幽谷嘗て蕃山を評す、其意に曰く、『熊澤伯繼、王佐之才を抱きて位は陪臣に過ぎず、經世の略ありと雖も、諸れを全國に施す能はず。猶は能く區々たる岡山を以て政を立て教を施し後世に傳ふべし。後の學者皆な其平生の志に酬ゆるに足ると稱す。其れ然り、豈に其れ然らんや。(中略)伯繼既に歿して其言尚は立つ、斯れ亦以て朽ちざるに足る』と、亦た以て蕃山欽慕の意を見るべし。

横井小楠曾て藤田東湖を評して曰く、『其人辯舌爽に議論甚密。學意は熊澤蕃山湯淺常山抔にて程朱流の究理を嫌ひ專ら事實に心懸たる樣子也』といひ。又た當夜會談漸く佳興に入れるとき左の和韻あり、

訪二藤田虎之助一。夜話極適。和二虎之助韻一

温レ酒寒園夜摘レ蔬　虚心交レ膝總忘レ予
議論不レ熱作二於水一　似レ讀二集義內外書一

と詠ひたるを以て察すれば東湖が蕃山に取る所ありしを知るべし。

橋本景岳、蕃山の手簡眞蹟を贊するや則ち曰く、『徠翁咬レ豆好詈レ人詈二例今人一。及二古人一。不レ詈獨有二吾熊澤子一。且贊二其才一評二經綸一。(中略)徠翁筆札亦好絶。一時壇坫稱二雄傑一。失二足權門一心早飢。嘲レ人却被二人慢樸一。何若熊子骨崛强。晩節受レ屈節愈烈。書分何雄恢。即是熊子經濟才。書分何清貴。即是熊子浩然氣。』と。上來掲げしは、追慕者の著名なる人に過ぎず。凡そ后世の學者、學派の異同を問はず、

聊か經綸に志ある者、直接若くは間接に蕃山の遺澤を被らざるは無し。嗚呼百歳の上に奮ふて、百歳の下興起せざる者なし。蕃山も亦偉人なるかな。

第三　北島雪山

雪山は肥後熊本の人なり。幼名は三立、北嶋を以て氏となす。幼にして圖南堂に從ひ、學を講じ、書法を修め、後に蔚然一家を爲せり。延寶五年丁巳の春、江戸に遊び書を以て名を顯はす、嘗て肥後侯に仕ふ、食俸四百石、性宏達不羈にして陽明王氏の學を崇ぶ、熊本侯嘗て國中に令して陽明學を禁ず、雪山同志の徒と與に謂へらく、爵祿の爲めに我操行を變ずるは、大丈夫の所爲にあらずと。乃ち上書して曰く、臣少より陽明の學を修め、君父に事ふるも必ず斯に由る、今にして之を棄てば君父に事ふるの道なし、請ふ臣たるとを致して去らんと。侯甚だ其志を高しとして之を許し、特に命じて三年の祿を賜ひ、隨意國を去るを得せしむ。雪山の高行と侯の有禮、今に至て肥人之を賞して措かず。欣古雜話に曰く、『寛文九年十月一同に朝山次郎右衛門、西川與助、小笠原勘助、淺野七左衛門、北島三立など、多くの人御暇給はりしなり。此は世に傳る所は、彼の王陽明が學派を禁ぜられしに因ての事となし、すべては廿人近くもありけらし。北島は誰も能く知れる雪山の事なり、儒醫にして四百石賜はりし由なり、此人の編述せし肥後一統志』と云ものありとなむ。名のみ聞侍りて未だ見しこと侍らず』、

丈夫の節操

と。

雪山の既に致仕して官舍を罷るや、屋宇を修理し、庭内を洒掃し、之を有司に致して後、野服蕭然として鄉里を去る。初め八代に至りて親交の家に寓し、既にして又行て長崎に遊ぶ。雪山書を善くして、奇行多し。書は文徵明を主とし、加ふるに瑞圖を以てす、年老て書法愈遒逸、風骨神妙、自ら謂へらく、宇宙獨歩なりと、絶えて印を打せず。永富獨嘯庵曰く、『南郭の詩、雪山の書、芭蕉の俳諧歌、皆一世の逸品、研精刻意、之を久ふして、遂に此域に詣る、亦豈に容易ならんや』と。雪山長崎に如くや、一夜橋下に寢ね、其翌酒肆に飲む、主人錢を乞ふ、雪山曰く、有る無し、曰く、家何くに在る、曰く、有る無し、然らば則ち子の業とする所は何ぞやと、曰く。字を作ると、曰く近日煩忙、子請ふ我が爲に帳簿を點せよ、以て酒錢に充てんと、曰く、諾、乃ち逗留連月、主人大に其風神の高邁なるを愛して遂に長崎に住せしむ。性劇飲を好み、戲筆文を成す、狂吟放浪繩墨に拘らず、士太夫と席を接するに、衣、襤褸を纏ひ曾て愧色なかりき。元祿十年丁丑閏二月歿す、年六十有二。或時雪山、其門人廣澤に謂つて曰く、足下の書は當時來遊五六輩の中にて第一の不器用なり。字の形甚だ醜し、然れども久しく學はゞ善書の名を得べし、然らば書名のみ顯はれ、君子の大業を失ふべし、必ず强て書を好むこと無れと。嗚呼、此一言何そ其れ高く且つ大なるや。且つ昔日肥後侯を辭するの言動は優に彼が節義に富み、道を信ずるの深きを表はすものあり、惜かな雪山の本領は空しく書名に掩はれて遂に

書

奇行

君子の大業

世に顯はれず、後人をして徒らに書家と呼ばしむ。然れども其言其行共に高潔、王學者として仰ぐべきものあり。豈尋常の書家者流と日を同くして論ずべけんや。著書あれども今之を見るを得ず、唯雪山の片影を描て遙かに之を仰ぐのみ。

眞價は其書名に掩はる

第四　三重松庵

三重貞亮、通稱新七郎、松庵と號す、平安の人。三輪執齋と時を同くして興り、專ら陽明良知の學を唱へ、元祿十五壬午の歲七月、門人の爲めに「陽明學名義」二卷を著はして、其蒙を啓く。上卷は則ち初めに致良知の旨を說き、中に五倫五常を說き、終に孝を說き、凡て七項に分つ。下卷は則ち大學說、仁義禮智信、孝悌忠信、心性情、理義、知行合一、四句敎法の七箇條を說く、皆な簡易實用を以て急となす。門人豐滿敎元其刊行の趣旨を序して曰く、「三重松庵先生嘗て九經を研究し、諸賢を折衷して以爲らく、子王子の致良知及び知行合一の旨、世敎に切近にして、實に孔孟の正宗なり。然れども本邦近頃世間に陽明學と稱する者あれども、其說解王子に違ふ者少からず。先生之を慨き、嘗て「陽明學名義」二卷を著はす。其意は以て初學を發藥せんと欲するなりと。豐滿敎元は、江州八幡の人、亦陽明學を崇びし人なり。

傳習錄よ

松庵又自ら其後序に曰く、余一日傳習傳を讀む、初は未だ文義を曉らず、之を讀むこと已に久くして、恍然として省みる所ある者に似たり。然後に知る、陽明子の學、眞切簡易にして、粹然たる大中至正の歸なるとを云々。末尾に曰く、村上の子明亮、年十七、聰敏にして讀書を好む、時に拘らずして余に學ばんとを請ふ。余其志を嘉みして、爲めに「陽明學名義」二卷を著はして、以て之に貽る。意は其名義を曉らしめんとするなり。又曰く、若し夫れ直に本意を言詮の外に求めて、眞に以て其必然疑ひなき者を驗するは、則ち其自力に存するのみと。本書は演するに方語を以てし、錄するに國字を以てし、初學の士も一讀通曉するを得ん。且つや其解說する所、其字義文意に止まらず、直ちに我國の國体、民情、風俗に及べり。今只最緊の一二節を揭ぐるのみ。

り悟る

著者の志望

致良知

此三字は、學問の肝要にて、聖人の人を敎へたまふ第一義なり。良は、本然の善なりとて、根本より善なるをいふ。知は、明覺の自然をいふ。花を見て花と知り、風を見て風と知り、善は善、惡は惡と、それ〳〵に知りわきまふる心の神明にして、人たるもの同じく天より稟けて、根本より善なる智慧を吾心の良知といふなり。されば天道の春夏秋冬と運行すること古今のかはりなく、柳は綠、花は紅、甘艸はあまく、黃連はにがく、牛は耕作をしり、犬は夜をまもるごとく、吾心の良知も萬古一日のごとく、更にかはることなし。目の黑白をわかち、耳の聲音をきゝ、鼻の香臭をしり、口の甘苦をわきまへ、身の寒暖をおぼゆること、昔の人も、今の人も、かはることなく、善を善と知り、惡を惡と

良知は普遍的なり

知り、孝悌仁義を知る吾心の良心も、堯舜の代の人も、末世末代の人もかはりなく、同一體の神明なり。然れば二三歳ばかりの童、たれがをしへもせず、何の思案もなけれども、をのづから父母を愛することを知り、漸く生長すれば、兄を敬することを知る。貴賤賢愚へだてなく、京も夷中もかはりなく、人々契約せざれども、をのづから同じきは吾心の良知を失ざる人を、聖人賢人といふ。然るに迷倒凡夫は目に美色を視て愛着し、耳に好聲を聽て心を動し、鼻に香を嗜み、口に味を貪て、朝夕種々の欲心妄念をれこし、吾心の良知を自と昧まし、不孝不悌の業をなし、禽獸と相去ること遠からぬにいたる。誠に悲むべく、愍むべし。されども、吾心の良知息滅することなければ、時々にをこりあらはる。其證據は、孺子の何のわきまへもなく、井の中に陷るを見れば、いかなる惡人も怵惕惻隱の心、をのづからおこるは、吾心の良知のある故なり。其發るについて、をしひろめをこなふを致良知といふなり。致とは、推極也と釋く、いたすとも、きはむるとも訓む。たとへば、十の物を一つより二三四と逐て十に至るごとく、吾心一念の良知、君を見て忠節の心をこり、父兄を見て孝悌の心おこる。其一念を認め取て、至極まで、きはめをこなふをいふなり。唯君父に忠孝すべしと知る心のをこるは、吾心の良知といふまでなり。致二良知一とはいふべからず。』さて四書五經に說きたまふところは、皆な吾心の良知をいたす註文なり。されば此致二良知一の三字を標的として四書五經を讀まば、皆な我身のをこなひとなりて、今日の用となるべし。若しさなくば、四書五經も我身と別になりて、其益なし。さてこそ此三字は、學問の肝要にて聖人の人を敎へたまふ第一義といふ。殊に陽明學の宗旨なり。

四書五經は吾心の註文也

知行合一

知は、しると譯む。事物の道理を能く合點するをいふ。行は、をこなふと譯む。身に道を修行するをいふ。合一は、あはせひとつにすと譯む。儒學にても、佛敎にても、知行を分て二とす。故に先つ事物の道理を心に知得て、其後身に行と會得せり。」然るに陽明子の說は、知は是れ行之始め、行は是れ知之成るなりと宣玉ひて、知行合一なりと立て玉ふ。要を以て之を言へは、孝を行ひ、悌を行んと思ふ心は、是れ知にして行の始なり。其孝悌の淺深は、行ひ得て知る、是れ行にして知の成就したるなり。譬へば、飲食するか如し、飲食せんと欲する心ありて、飲食を知る、其飲食せんと欲する心は、行の始なり。飲食の味は口に入るを待て後に知る、是れ知の成るなり。且つ夫れ孝悌を知ると云ふは、孝悌を行ひ得たるを謂ふ。孝悌の理ばかりを曉り得たるをいふに非らず、是故に知即ち行、行即ち知にして、知行相離れずして、兩個にあらざれは、知行合一といふ。是れ乃ち陽明學の宗旨にて、孔孟の本旨なり、具さに傳習錄に見えたり。方さに今略して其大概をいふならしと。

大橋訥庵

著者此書を、上野なる帝國圖書館に見る。而して此書、恰も好し、元と大橋訥菴の所持せしもの。而して此處にのみ欄外朱書あり、今幸に訥菴の知行合一に關する說を窺んが爲めに之を附記す。

順曰、知行は一物にして、指す所より名を異にするのみ。然るに合一と云ては、兩個の物を合せて一つにする樣に見ゆ。是れ姚江の本旨にあらず。故に文成公も不レ得レ已有二合一並進之說一と宣へり。學者よく心得べし。

吾人は、不幸にして未だ松庵に就て充分の知識を得ず。松庵著書の時代を以て推せば、北島雪山、三宅石庵、三輪執齋と相前後して出でたらん。特に石庵執齋共に平安の人なれば、時々送迎して議論を上下せしことありしか、猶ほ或は異日之が消息を知るの機あらん。

垂教を待つ

第五　三宅石庵

三宅正名、字は實父、石庵又は萬年と號す。平安の人。寛文五年に生る。石庵少より學に耽りて家道を視ず。是に由て家產遂に蕩盡す。乃ち家什を賣卻して、以て舊債を償ふ、餘す所僅かに數金のみ。弟觀瀾に謂つて曰く、今や貧極まると雖も、短褐蔬食、以て數年を支ふべしと。鑽研の志愈々厚く、環堵の室、几に對して講習し、共に寢食を忘るゝに至る。石庵は深く陸象山を信じ、又王陽明の學を喜ぶ。幾くもなくして窮亦極まりぬ。是に於て兄弟相携へて江戸に來り、敎授して給を取り、居ること數年。石庵獨り京師に歸り、尋て大坂に至る。時に名聲翹然として起り、弟子雲集す。中井甃庵等相謀りて官に請ひ、庠序を建て、懷德堂と名く。衆皆な石庵を推して之を主らしむ、固辭して可るさず、遂に祭酒の事を領す。當年石庵の學德亦以て見るべきなり。懷德堂は、後ち中井氏之を嗣ぎ、文政天保の交に及び、竹山履軒の兄弟出て、隱然關西文學の牛耳を執るに至れり。

地歩

石庵書に工みにして、頗る顏法を得、隻字も人爭て之を求む。資質極めて朴素、其の書する所未だ嘗て印を欵せず、又倭歌及び俳諧を善くせり。

善書

石庵は三宅尙齋、三輪執齋、玉木葦齋と友たり。然れども尙齋は朱學を固守して、深く己れに異なる者を疾み、葦齋は專ら神道を奉し、執齋は王陽明を信ず。而も其の交を絕たざりしは、其の舊情に忍びざればなり。但執齋及び三重松庵は、同派の士として互に相交りしものゝ如し。石庵の事蹟は、多く傳ふべきものなく、且つ其の學說の如きも特掬の見なし。加之其學も純乎たる陸王學にはあらざりしならん。當時香川太冲評して曰く、世に石庵を呼て鶏學問と爲す、此れ其首は朱子、其尾は陽明にして、其聲は仁齋に似たるを謂ふなり、と。享保十五年に歿す、享年六十有五。

學風

第六　中根東里

中根東里、名は若思、字は敬夫、東里と號す。通稱は貞右衛門、伊豆の人。東里資性孝順。東里の父善く飲む。出づる每に醉へば、則ち家に歸ること晩し。東里燭を秉りて、常に之を迎ふ。嘗て之を途中に逆ふ、父の醉甚しく東里と他人とを辨せず、大に之を罵り、遂に樹下に倒れて睡る。之を扶持す

れども起きず。走り反りて、幮を家に取る。而も其母の安せざるを恐る。故に父某の許とに宿し、今夜醉客衆く、某の家又た餘幮なし、兒と一宿して還ると稱し、遂に父の睡處に到り、幮を樹に張りて之を護り、以て夜を徹し其睡の覺むるを待て、之を扶持して家に還る。鄉人皆な其孝を稱しき。東里年十三にして父を喪ひ、母に事へて甚だ謹む。其母命じて父の冥福を修めんが爲めに、釋氏に歸せしむ。鄉の一禪院に入り、薙髮して證圓と曰ふ。後ち山城宇治の黄蘗山に登り、悅山禪師に師事す。蓋し禪家の課業は、佛祖の眞面目を得るに在りて、博く群書を讀むを許さず。東里其課の煩きに厭薄し、竊かに寺を出でて江戸に來たり、下谷の蓮光寺に寓し、淨宗の學を研究し、偏く經典を讀む。其寺主曾て物徂徠と善し、屢々東里が人と爲り明敏にして、衆に異なるを稱す。平常書を讀むとき、如し通せざることあれば、歷年の舊と雖も、必ず記して臆に在り。事に觸れて發明す。徂徠之を聞て、大に之を賞す。嘗て試みに東里をして、李攀龍が「白雪樓集」一本を句讀せしむ。東里傍訓國讀を其書に附して、之を返しき。時に歲十九。

禪門を出つ

徠門に出入す

東里徂徠の門に出入する時、徂徠其才を愛し、常に坐客を顧て曰く、文章は東里の如くにして、後に能く左氏史公を學ぶと云ふべし、と。之を揄揚し、其誘掖寵樹至らざる所なし。」東里詩才雋逸、文尤も跌蕩なり。機軸觀るべし。下ッ毛天明鄉の菅神廟の碑、相州鶴岡祀堂の記の若きは、柴野栗山、山井四明、太田錦城等の諸家、皆な稱して曰く、慶長元和以來希有絶無の文なりと。

修辭の非を悟る

東里蓮光寺に寓すること、此に數年なり。自ら僧たるは、道に非るを知り、屢々髮を蓄て俗に還らんことを請ふ。寺主雄譽上人、頗る鑑識あり、將に其意に任せしめんとす。而も其法を蔑視するに似たるを以て、陽はに之を許さず、陰かに疾ありと稱して、髮を寺中の別舍に蓄ふ。東里書を讀み刻苦すること惟れ日も足らず。稍々徂徠の學を疑ふ。乃ち作くる所の文章數篇を取りて、悉く之を燒き、其所謂修辭の業を厭薄す。時に細井廣澤屢々雄譽上人と遊ぶ。東里が人と爲りを聞て、大に之を奇とし延て其家に寓せしむ。幾もなく鄉里に歸省す。其母猶ほ在り。遂に母に請て、而して後に俗に還ることを得て、中根貞右衛門と稱す。室鳩巢又た其名を聞て、引て之を其家に客たらしめんとす。東里素より其學を慕ふ、贄を委して之に師事す、時に歲二十三。享保元年正月なり。東里資性狷介にして、苟くも世に容れらるゝことを爲さず、高潔自ら持す。故に從遊の者と雖も、皆な之を憚る。室鳩巢特に之を愛して曰く、强項にして屈せず、緘默にして競はず、能く磨涅の中に處して、更に淄磷の損なし、と。

性行

東里、室鳩巢に從て、加州に在ること二年にして、江戸に還り、生徒を敎授す。光を葆み自ら晦まし、當時の諸儒と相頡頏するを欲せず。常に退落を甘んじ、其資用乏しければ、則ち綿絲繡針の類を市に鬻き、又竹皮履を造て之を售る。數日の費錢を得て、戸を閉て書を讀む。從遊の士の外は、人に接見せず、沈默自重す。人之を目して、皮履先生と曰ひき。

皮履先生

東里延享中に至り、江戸の煩喧を厭ひ、下ッ毛の仁田に遊て、九峰、高ノ克明の家に客たり。嘗て其曠野

王陽明を尊信す

の清閑を愛して還らず、天明鄕に移り居る。茲に於て悉く舊習を棄て、王陽明の學を尊信し、專ら其說を唱て、以て子弟を誘化す。闔鄕之が爲めに化し、東里を景慕す。婦人兒輩と雖も、能く東里の名を知れりと云ふ。

東里天明鄕に在る時、其弟孔昭、業を失ふ。又是より先き妻を喪ひ、其女を鞠ふと能はず。乃ち携へ來て東里に托して去る。時に女僅かに三歲、日に之を懷にして、庇養撫育、時として盡さゝることなし。人皆な焉を難しとす。嘗て之を機として一冊子を著し、鳥獸を端に畫き、飾るに朱綠を以てす、名を新瓦と曰ふ。以爲らく、穉子蒙昧、未た敎諭するを得ず、成長して後、躬から之を弄し、能く之を讀まば、則ち吾が汝を撫育するの意を知らんと。新瓦は文辭平易流暢、人事を敷演するのみならず、思はず人をして心志を感動せしむるものあり。

新瓦

東里は、明和二年乙酉二月七日を以て、相州浦賀に歿す。享歲七十二。海關の顯正寺に葬る。妻子なし、終に臨て藤梓と云ふ者を以て嗣と爲す。

著作

一 東里遺稿（一卷）　二 東里外集（一卷）

敎學＝學說

東里初め孝養を以て稱せられ、再轉して禪に入り、三たびして淨宗に溺れ、四たびして詞藻に溺れ、五たびして朱學に入り、沈晦自養、恬澹無爲を事とし、皮履先生の名を得たり。其後下毛天明鄕に移るに及て、沛然として陽明良知の學に歸し、遂に安心立命の地を爲せり。東里の經歷を閱するものは、徐ろに陽明子の經歷を想起せずんばあらず。賴山陽嘗て大鹽中齋を稱して、小陽明と曰ふ。吾人は敢て東里を以て小陽明と呼ばんとす。東里不幸にして時を得ず、且つ昌平の世に生れ、武勳の赫々たるものなしと雖も、陽明學を宣揚し、子弟を薰陶するに於て、頗る力あるを覺ゆ。陽明學が學問と事功の並進を旨とするは、已に屢々之を論ずるが如し。而して東里は、寧ろ心を學問に潛め、世に事功を立つるの機なかりしと雖も、自家の操行に於ては、知行合一、學業並進を遂げたり。特に其敎義の根本主義は、天地萬物一體を會悟するに在り。夫れ天地萬物一體の敎義たる、古來既に天人合一說に含蓄したれば、之を特揭の見と言ひ難きも、取て以て自家の根本主義となし、之を推擴敷演して一家學を組織したるは、固より沒するべからざるの功なり。且や其の天地萬物一體說を立證するに、性と氣の二要素を以てせり。蓋し巧妙なりと謂つべし。其立證の過程は、東里自己の筆に依て、最も詳悉に之を論述するものあり。加之、東里詞才雋逸、文尤も跌蕩、頗る觀るべきあり。故に今繁を忘れて、左に其文を揭く。而して最初一文は、則ち有名なる學則にして、次は一體之訓なり。一體之訓は、主として其說の獨創にあらずして、經傳に基くことを述べ、博引旁搜、以て之を證せり。學則は、其說稍〻高遠にして、直に根本主義を論ずるものあり。然れども其要は、共に天地萬物一體の敎旨を示すにあり、

小陽明

根本主義

立證

吾人が其學則を以て、學說の項に置き、敎育の項に攝せざるものは、寧ろ學則に於て其の學說の要領を得べければなり。

學則

聖人之學。爲レ仁而已矣。仁者、天地萬物一體之心也。而義禮智信皆在二其中一矣。蓋天下之物。其差等雖レ無レ窮。然莫レ弗下得二天地之氣一以爲中其氣上。此之謂二一體一。是故自二我父子兄弟一。以至二於天下後世之人一。皆吾骨肉也。日月雨露、山川草木。鳥獸魚鼈。無二一物而非一我也。則吾不レ忍之心。自不レ能レ已矣。是故已欲レ立而立レ人。已欲レ達而達レ人。己所レ不レ欲無レ施二諸人一。人之善惡。若二己有一之、先二天下之憂一而憂。後二天下之樂一而樂。是之謂レ仁。是之謂二天地萬物一體之心一。其自然有二厚薄一者義也。譬影之參差。非二日月之所一私焉。禮其節文也。智其明覺也。信其眞實也。是心之德。其盛若レ此。但爲二人欲所一蔽。而不レ知二其所レ謂一體者安在一也。營々汲々。唯一己之名利是圖甚者視二其一家骨肉之親一。無レ異二於仇讎一。況他人乎。鳥獸草木乎。然而心之本體。則自若也其感二於物一也。輒戚々焉如下痛二孺子之入一井。閔中殺觳觫之牛上之類是已。況於二吾父子兄弟一。其能恝然乎。譬如下雖二雲霧四塞一。然日月之明。則無二以異一。縱有二罅隙一。輒能照上焉。聖人之學。豈有レ他哉。勝二夫人欲一。以盡二是心一而已矣。蓋合二內外一。以平二物我一而已矣。此之謂レ爲レ仁。此之謂レ好レ學。於戲。其廣大而簡易若レ是矣。彼以二文辭一爲レ學者。陋矣。求二義於外一惑矣。吾懼、學之日遠下於レ仁也。於レ是乎言丁巳冬　中根若思書二于下毛之泥月菴一。

萬物一體を說く

一體之訓

體之訓、其由て來こと久し、後儒之新意に非ず。近世以來、其說明かにして、且つ備れり、亦加ふべからず。今其始を原れて、以て同志に告ぐると左の如し。泰誓に曰く、惟れ天地は、萬物の父母、惟れ人は、萬物の靈なり。夫れ天地果して萬物の父母ならば萬物は乃ち天地の子なり。子と父母と一體ならざるもの有んや。禮に云く、人者天地の德也。又云く、人者天地の心也。人果して天地の心ならば、天地は乃ち人の身なり。身と心と一體ならざるもの有んや。心と德と一體ならざるもの有んや。萬物の區々にして、以て別れたるは、一身の中に於て、耳目口鼻、首足肩背、各其分ち有るが如し。或は貴くして上にあり、或は賤くして下にあり、或は遠く、或は近く、或は大、或は小、其差等節目得て混同すべからず。然れども精神周流し、脈絡貫通し、疾痛歡樂、感同神應せざるなし。是故に上なる者、下を愛し、下なる者、上を敬し、遠きを忘れず、近きを忽にせず、大に事へ、小を字ひ、相助け、相安んじ、樂むに天下を以てし、憂ふるに天下を以てす。是れ堯舜の治體にして、聖樂の大本大源なり。吾儕こゝに於て、心を專にし、志を坎して、講究體認するとを務めずして、末を逐ひ、流に隨て、滔々として反らず。日を曠うし、時を失ひ、遂に以て此の生を虛くするに至る。其の以て然る所の者は、何ぞや。一體の中に於て、自ら異にして、各其藩籬を高くする故なり。其れかくの如くなれば、人は只是一團の血肉のみ、豈以て天地の心とするに足んや。前聖の言、かくの如く、夫れ粲然として明なれば、程子、王子の說も、何の疑ふべきとか有んや。明道曰く、仁者天地萬物を以て一體とす、と。己れに非ざるとなし。天地も己れなり、萬物も己れなり、天は己れが高きなり、地は己れが厚きなり、日月は己れが明かなるなり、四時は己れが變化なり、鬼神は己れが測るべからざるなり。學者誠に其心を存し、其氣を定め、人我の見を去り、意必の私に勝て、眞誠に之を體察せば、天地萬物吾に於て毫末の間隔なきを見て、聖賢の吾を欺くにあらざるとを認得すべし。況や陰陽五行の人にあるもの、天地四時と共に往來變化して、曾て內外彼是の別なし。喜怒哀樂視聽言動、天地萬物に於て、一毫の間隙あれば、斬るが如く、刺すが如く、疾痛惻怛忍ぶべからず。一體にあらずんば、豈かくの如くならんや。是を以て古の聖賢人、飢溺のごとく、一夫も獲ざれば、己れ推して是を溝中に納るが如く、天下の憂に先だちて憂へ汲々として、席を煖むるに暇あらず。故らに此の紛冗を求て、以て自ら勞苦するに非ず。只是れ萬物もと吾が一體なれば、生民の困苦荼毒いづれか疾痛の吾が身に切なるものにあらざらん。吾身の疾痛を知らざる

淵源を示す

者は、是非の心なきものなり。程子は學で至る所を以て云ふなり。禮と泰誓とは、聖愚の同じく然る所を指て云ふなり。夫れ天地萬物もと一體なれば、天地萬物もと一物なり。所謂格物は、此一物を格すのみ。此一物を格すとは、其本然に復るのみ。聖人の學、其廣大にして簡易なるも、かくの如し。明道之を宋に唱へ、陽明之を明に和し、天下萬世に示すに宇宙の大全を以てす、其盛德大惠、民得て稱する事なし。吾儕小人、凡近陋劣、反復沈痼、此說を聞くと云へども、井蛙の海を知らざるが如く、夏蟲の氷を疑ふが如し。其一體の中に於て、迷亂困苦する事、眞に猫犬の自ら其尾を逐て旋轉するが如し。豈以て萬物の靈とするに足らんや。其哀むべきといづれか是より甚しからん。芻蕘の言、已むことを得ざるのみ。凡百の君子、孟以て浪とするなかれ。人を以て言を廢するなかれ。

實曆壬午季春　　中根若愚

教育主義

教、育

眞里既に釋氏の道の非なるを知り、修辭の非を悟り、又た朱學究理の說を排して取らず。躬自ら良知の學に歸し、知行合一の說を奉じて、專ら實踐躬行に意を用ふ。其門人を敎化するの方針言はずして之を知るを得ん。且つ東里曰はずや、彼以文辭爲學者陋矣。求義於外惑矣と。故に、彫蟲篆刻の末技を取らざりしや明かなり。東里資性恬澹を喜び、好で閑地に居る。故に子弟を薰化すると廣からずと雖も、其門に出づる者、皆な實踐を以て要と爲し、一時學德を以て稱せらる。東里外集に收むる所の往復の書簡、多くは門人を啓發するものに係る。文章頗る流暢、旨意亦慇懃、一讀後進を興起せむるの概あり。今、一二雄篇を摘んで之を示さん。

復柳圃某書

來喻諄々、席を同じて語るが如し。憂深く情切にして、志氣奮發、人をして興起せしむるものあり。天の將に大任を是人に降さんとするや、必ず先づ其心志を苦しめ、其筋骨を勞して、其體膚を饑やし、心を動し、性を忍て、其能はざる所を增益せしむ。いはゆる汝を成るに玉にする也。伏て望むらくは、此所に於て目を明にし、膽を張り、精神を振起して、天意を奉承すへし。徒に放過すへからず。吾志の誠一眞切ならざるを御見得被成候は、百知也。此百知を致して、吾志をして必ず誠一、必ず眞切ならしむべし。譬へば、羈客の鄉里に歸るが如し。父母に見え、妻子に逢て、歡樂せんと思ふ心誠一眞切なるが故に、千里を遠とせず、寒暑を長れず、風雨を厭はず、道路の景色にも貪着する心なく、只一日もはやく鄉里へ歸着せんと思ふ心さかんにして、少しも退屈することはなき也。又一種の人あり、幼年より鄉里を離れて、父母親族の歡樂を忘れて、一向に他鄉の地に安心するものあり、是を弱裏といふ、莊子に見えたり。此弱裏の人は、他人の物語に故鄉は樂ある所と聞て、歸りたき心は有れども、元來故鄉の歡樂を知ることを誠一眞切ならざるが故に、寒暑を忘れ、風雨を厭ひて發足しても、はかばかしく歩行もせず、大かたは酒肆淫房に流連沈溺して、多くの日數を費し、其迷亂の果には、倦蹊曲徑に困窮死亡して、父母親族をして悲傷號泣せしむ、是何の心ぞや。今右の事を以て斯學に比すれば、天地萬物唯一身の境界は、吾が眞の故鄉なり。位なくして貴く、祿なくして富み、仰で愧ちず、俯して怍ちず、必廣く體胖かなり。富貴も淫することを能はず、貧賤も移すこと能はず、威武も屈することを能はず、夷狄患難、入るとして自得せざることなし、天下の至樂也。此鄉里に歸り、此眞樂を得んと思ふ心、誠一眞切ならば、道中の艱難辛苦、心を動かすに足らず、何の退屈する事あらん。凡そ他鄉の聲色紛華、何の羨むことのあらんや。只是吾輩所境界を見得すること分明ならず、半ば信じ、半ば疑ひ或は勤め、或は惰り、一日暴めて十日寒する如くにして、成効あらんことを欲するは、種せずして秋を待つなり。是れ衆人の醉生夢死して、他鄉異域の愚鬼となるゆゑんなり。彼の弱裏の人に異なることなきにあらずや。此患を免れんと欲せば、何を以てせんや、斯學に倦むことなからんのみ。倦むことなきの至りは、誠一眞切なり。誠一眞切なれば、愈倦むことなし、愈々倦むことなければ、愈々誠一眞切なり。工夫茲に於て獨木橋をわたるが如し。左右皆深淵也、進むべくして退くべからず。是れ古の人戰々兢々として、敢て一念の間雜なきゆゑんなり。若思斯學に於て全く見ることなきにはあらず、只是れいまだ、己に有することを能はず。其門外に在て嚮望して、いまだ嘗て堂に升らず、毫厘迷惑して地に入べし。併しながら、諸君に奉告する所のものは、大抵先生の遺意也。講習の功に於て、小補なくんばあらじ。老生が不肖を見て、其意を合せて廢棄すべからず。諸君猶強年、斯學に於て、人一たびすれば、己百たびするの功を用ふといふとも、歲月餘りあるべし、勉めざるべけんや。天地萬物唯一身也、諸君の德成らば、即ち若思が德成るなり。草葉のかげに於て、喜悅雀躍可仕候。至悅々々

十一月二十九日　　東里

御別圃下問の趣委曲承知候。俗人の學を以ていはゞ、精書を第一義として、字々句々分明に解釋するを成功とすべし。聖學の成功は、是より大なるものあり。經傳の中、斯學の大頭腦を指して示したる所は、讀み易く、解しやすく、明々白々として青天白日の如し。註釋を用ず、思慮を勞せずして通曉すべし。只是を擇て、反復玩味せば、足ざることなかるべし。無益の文字に於て、讀み難きを讀み、解しがたきを解せんと欲して、精神を費し、光陰を失ふべからず。大頭腦を見得するに及ては、五經四書といへども、月をさす指の如し。月を見るものは、指を忘て可也。文義に牽制せられて、其本に迷ふものは、指を以て月とするなり。象山先生曰はく、學者も本あらば六經皆我が註脚也。致良知は、斯學の大頭腦なり。良知の本體は、天地萬物唯一身なり。此本體を提撕すれば、格物の功、其中にあり。是則一以貫之なり。譬へば、米を舂くもの、唯だ杵壺つに力を用て、億萬の粒米皆悉く精白となるが如し。故に王子晩年の教、唯だ良知といふのみにして、格物に及ばず。いかんとなれば、此本體を提撕することを知らずして、更に格物を以て事とするものは、木の根なきがごとく、水の源なきがごとし。米を舂くもの杵を失て一粒々々に磨剮するが如し。是世儒の學、支離決裂、牽滯紛擾して、終に成功なきゆゑんなり

明道曰、仁者以天地萬物爲一體と。是れ學て至る所の地位を以ていふなり。天地萬物唯一身は、右の語と、本末の差別あり。禮運曰。人者天地之心なり。愚謂く、人果して天地の心ならば、天地は人の身也。聖人より愚人に至るまで、本來かくの如し、學によろにあらず。且又唯一身の義より推て見れば、天地萬物唯一物也。格物は、只此一物を格すのみなり。譬へば、大木の如し。其枝葉、花實、百千萬億といふとも、只是一木也。故に唯一つの根を養へば、其百千萬億の枝葉花實、盡く成長せざることなし。是れ至簡至易の妙法にして、格物の大全也。學者茲に於て見得分明ならば、一書を讀まず、一友に交はらずたとへ深山幽谷海島無人の地に窮居するも、學日々に進で、德日々に新ならん。此說前條を反復してまた以て加ることなし。老拙に在て迺分の狂言といへども、格致の工夫に於て、小補なしと云べからず。老拙近來靜坐を勤候に付、靜立をも致候。古來靜立といふ名目は、聞及ばず候へ共、愚意を以て作爲いたし候 靜坐は時を待ち、所を擇ぶ事も有之候へども、靜立は其差別なく、內にありても、外へ出ても、道路を往來するにも、心まかせになるべし。殊に山に登り、水に臨む時などは、別けての佳興也。且又靜立は全身を通用するが故に、勉強の氣味も少く、心氣從容として血脈周流し、拘局凝滯の累ひなし。德を養ひ、生を養ふに於て、大に益あるべし。立つこと久しても、疲れを覺ゆるときは、或は暫らく物に腰をかけ、或は數步の所を周旋して、和氣を發達すべし。いまだ古人の說を聞かずといへども、此事は必ずあるへし。論語に孔子の事を記して、嘗獨立、鯉趨而過ゞ庭といひ、他日又獨立云々といふことときは、聖人の靜立と見えたり。二の獨の字を以て想ひやるへし。

靜坐及び靜立

二月十九日　桃野君

柳圃君

東里心外無物の理を詠じては、

數ならぬ身となな思ひそかぎりなき
よろづの物は心なりけり

又天地萬物一體なることを詠じては、

すてゝ行く道やあるべき野も山も
みなあめつちのへだてなき世を

陽明學の主とする所は、知行合一致良知に在り。簡易直截を以て旨とし、叢脞繁衍を以て非とす。故に修辭を以て、却て道を害する者と爲す、是れ末を以て、本を忘るゝが故なり。然れども今假りに我邦王學者の詞藻に長する者を擧げんか、三輪執齋は、國歌を以て世に知られ、佐藤一齋も亦世人は、寧ろ文章家として之れを稱する者あり。而して詞才雋逸、文章跌蕩なるは、東里の右に出づる者あらず。

靜立を評す

東里嘗て靜立の工夫を發明して、靜坐と相對せんとす。凡そ初學の徒、一事を沈思默考せんとするには、必ず心身の靜寧なるを要す。故に靜坐靜立、共に廢すべからず。然れども靜立は、靜坐已に倦怠せる時に行ふべく、靜立已に倦怠せば、又逍遙以て之を助くべし。予は往々逍遙を以て、佳興を得たることあり。更に一言す、陽明學は、山林巖穴に靜坐するを要せざることを。陽明子は、右手に劍を執り、左手に卷を持して、遂に其志を成せるなり。嘗て曰はずや、山中の賊を平ぐるは易く、心中の賊を平ぐるは難し、と。又、常に坐禪入定の非を戒めたり。吾人は唯自反愼獨の一工夫として、東里の靜立の評を

第七　三輪執齋

三輪希賢、字は善藏、執齋、又は躬耕廬と號す、平安の人。寛文九年に生る。執齋の先は、舊と大和三輪神社の司祝に係る。父を澤村自三と曰ふ。醫を業とし京師に住す。執齋は、六歳にして父を喪ひ、賈人大村某同しく司祝より出て丶自三と相親善するを以ての故に、乃ち執齋を育す。漸く長するに及び、出て丶眞野氏を冒す。年十九にして佐藤直方の門に入り、朱子學を受く。既にして學成るや、直方の薦に因て脇橋侯に宦す。其後王陽明の遺書に就て、良知の旨を得、士太夫の間に交り、專心一意、之を祖述するに至れり。脇橋侯其學の變せるを以て懌はず、乃ち致仕して京に歸り、專ら講學に從事す。尋て大阪に之き、又江戸に來る。數年の間、居止恒ならず、嘗て明倫堂を江戸下谷に捌めて、以て諸生を敎授す。京に歸るに及て、門人雄琴をして、事を主らしむ。執齋四十四歳の時、傳習錄を標註す。刻成るに及て、王陽明に告くるの文あり。其詞に曰はく、

傳習錄標註成る

維れ日本正德二年、歳壬辰に次る、九月盡日、希賢敢て昭かに大明の新建侯文成王公に告て曰く、道に古今なく、心に彼我なし。恭しく惟みるに、先生心傳を同然に得て、聖功を良知に指す。德業當世に輝き、餘訓萬邦に流る。嗚呼、盛なるかな。我か京尹篠山源君其德を景仰し、其學を篤信し、政務の餘暇、希賢をして傳習錄を講し、且つ之を考定刻行せしむ。固辭すれとも得す。叨りに嚴命を奉し、刱を去歳八月に發して、功を今月今日に畢ふ。謹て考ふるに、支干月日悉く皆な先生の誕辰に正當す。而して曆號も亦先生の存日と同し。實に和漢萬世未曾有の一遇なり。其れ偶然か、將た數ありて存するか。則ち斯道の興るに俟つ所あるに似たり。謹て淸酌茶菓を以て、傳習錄新刻の本を奠し、虔んて功畢るを我か文成公に告く。伏て冀くは、先生の道、大に天下に明かに、至治の澤、徧く生民に蒙らんとを。日東　平安書生三輪希賢謹告。

緣機

と。那波活所嘗て曰く、正德の頃に至て、京師に三輪執齋と云ふ人あり。專ら王陽明の學を主とし、陽明學と云ひ、又心學と云ふ。陽明は、明の正德年中の人なるに、其學今又正德年中に唱ふる人あるは、緣機誠に熟するなりとて、從て學ふ者鮮からす云々、と。又周易進講手記六冊あり。是れ執齋か

周易を進

講す

松平紀伊守の命を奉して手記せしもの。時に松平公東下の途に上る、執齋、公を送り、大津に至りて之を献す。公受て轎中に之を見んとを告く。執齋は、物徂徠、室鳩巣、伊藤東涯等の鴻儒と時を同ふして出でたれは、宣教稍々困難にして、赫々の功を奏するに至らざりき。執齋は、王文成公を尊信して、專ら之を紹述したれば、王氏以外に一旗幟を樹てざりしのみならず、藤樹蕃山の學説に比するも、其特色の薄きを知るなり。廐橋侯を去りて後、復た長崎鎮臺に屬し、王文成公の畫像二幅を彼邦人に得、一は則ち之を明倫堂に藏め、一は則ち之を近江の藤樹書院に藏む。今尚ほ各〻存すと云ふ。著書も亦尠からす。執齋は最も國歌に長じたれども、詩文は其長所にあらず。

王文成公の畫像

當時梁田蛻巖、人に與ふるの書に、執齋を稱して曰く、方今江左の儒人、詞藻を以て名ある南郭、金華の如きは、姑らく是を置く。四方を振鐸し、大に聖學を唱ふるは、斯人を舍てゝ其れ誰れぞやと。

蛻巖執齋を推す

川田雄琴は、蛻巖に學ぶ、蛻巖之に謂つて曰く余一日の長を以て、文藝は則ち爾の師たり。道義を明かにし、心術を窮むるに至ては、當に執齋に就きて學ぶべしと。雄琴乃ち蛻巖を介して、贄を執齋に執り、精思力行せり。專ら知行合一の旨を推し、終に執齋の薦に因り、起て大洲侯に仕ふ。

執齋初め直方の言に因て、眞野を去りて三輪に復し、以て其祖を祭り、深く直方を德とす。後ち直方の病革まるを聞き、疾く往て之を訪ふ。命既に絶えて及はす、乃ち和歌八首を賦して之を哭す。其三輪に復するを得たるを陳謝しては、

永言

わすれずよ三輪のしるしの過ぎし世を
　　慕ふも君がおしへならずや

又、直方をして終に王學に歸せしむる能はざりしを以て、恨と爲しては、

さりともと心にこめしひとすじを
　　言はでわかれしなごりかなしも

又傳ふ、執齋尤も事體に達し、其言優遊にして餘味あり。能く聽者をして心醉せしむ。嘗て近江小川村に抵り、村民を集めて學を講す。四坐皆感泣して之に服し、翕然相謂つて藤樹先生の再生と爲しゝと。

執齋か傳習錄を標註して梓行せしは、世人か自由に傳習錄を讀み得る所以にして、四言教講義、古本大學和解、日用心法、格物辨義等の書が、王學復興に與て力ありしは疑ふへからす。然れとも、執齋の學説を窺はんとすれば、唯四言教講義、古本大學和解等の數書あるに過ぎざるべし。此等の書も王陽明の意を信奉するに在れは、好みて特見を立てしにはあらず。彼の識見を以て解釋せし所にして、藤樹蕃山に異なる點は、之を認めて執齋特拗の説なりと謂つべし。

執齋延享元年正月十五日歿す、享年七十六。

執齋が心の本體を論せしは、四言教の第一句、無善無惡心之體の講義にて了得すべし。此四言教の解は、執齋が其言中に示すが如く、最も重要にして、王學の骨髓は、此に在り。故に彼が之に向て心血を注ぎしは、知るべきなり。

執齋が心の本體を說き、善惡の起源を論ずるは、極めて周到精密なり。其言に曰く、人心善惡の二途ありと云へども、それは動き出る時の事なり。動くは氣に因るが故なり、其の動かざるときは、一の光明のみ。鏡の未だ開かざる時は、妍媸なきが如し。然るに其寫さゞる時も、萬象なきにあらず、向ふものゝ心、寫す心にて見れば、則ち象ありて、鏡は本の鏡なり。寫さぬ心にて見れば、則ち象なくして、鏡の內、象なくんばあらず。是れ鏡に動靜なくして、向ふものゝ心に動靜あり。此鏡、人の人たる本體なり、此の源を知らずして、善なりと思ふは、其善は、氣質の善にして、天理の本體にあらず。惡も亦然り。是れ所謂心之體は、即ち人心に宿り在します天神なり。此光明は人の意念に亘らず、自然に是非を照らす、是を良知と云ふ、夫れ耳に五音なきは、耳の本體なり。夫れ只だ五音なし、故に能く五音を聞き分けて、違ふことなし。若し常に一音もあれば、五音皆違ふ。故に五音なきを耳の至善とす。口も亦味なきは、口の本體なり。夫れ只だ五味なし、故に能く五味を分ちて、違ふことなし、

心と鏡の對比

若し一味もあれば、五味ともに違ふ、故に五味なきを、口の至善とす。心に善惡なきは、心の本體なり。夫れ只だ善惡なし、故に能く善惡を辨へ、各誤る事なし。若し之れ有る時は、善惡共に違ふ、故に善惡なきを、心の至善とす」と。執齋が講義として之を發揮したるは、稍々盲信瞽從の嫌なきにあらざれども、其解が自然に一家の特色を見はすを知れば、直に彼の說と爲すべきものあり。

心の體は、鑑空衡平なる狀態に在るの心なり。寂然不動の心なり。故に執齋は、之を明鏡に比せり。明鏡と萬象の妍媸とを以て、心の體と事物の善惡とを說く所、頗る巧妙にして精緻を極む。今や客觀的事物の善惡と、主觀的たる心の本體とを相對說して、心の本體は客觀的事物の善惡如何に關せず、依然として鑑空衡平なりと云ふ。若し心の本體にして、一の善若くは惡を固有的に備へたらんには、善惡を辨別する能はず。故に執齋は口耳と五味五音を借りて、此關係を示せり。而して茲に至善と云ふは、絕對的善にして、善惡の關係的性質を超絕したるものなり。所謂無聲無臭、無善無惡なり。執齋は其言中に、此の所謂心之體は、即ち人心に宿り在します天神なり。此光明は人の意念に亘らず、自然に是非を照らす是を良知と云ふと云へり。天神とは、其至靈至妙なるを形容したる語に過きず。而して人心に宿る天神、即ち心の體と云ふは、活動せざる時、即ち心の鑑空衡平なるを云ふなり。單に心と云ふとは同じからず。此に「人心」と云ふは、「天神」の天に對して立言せるものにして、天理、人欲、道心。人心と對する類にはあらずして、單に心と云ふに同じからん。又意念に亘らず自然に是

非を照らすと云ふは、直覺的なりと言ふの意なり。故に執齋の意を詮すれば、良知とは、寂然不動にして、善惡を超絶したる心之體の、至靈至妙の直覺的判斷の能力を謂ふなり。

善惡の標準

善惡之辨別

善惡の名は、元より相待的なり。故に之を辨別するは、極めて困難にして、古來の學者共に苦心せし所なり。凡そ一事を善惡の二途に辨別するは、必ず標準なかるべからず。此標準を確定せざれば、善惡を判斷せんとするも、到底得べきことにあらず。然るに古來の倫理學者は、此標準を確定するに、潛心熟慮すれども、未だ一定せず。支那の倫理學者は此標準を、漠然たる中に定めて明示することなし。故に嚴密に善惡を辨別するを得ず。若し善惡は、目的に合ふを善とし、合はざるを惡とすれば、彼の目的を立する學派の如く、萬事を目的上より辨別せんとするに至らん。此說を取れば、直覺派とは相容れざるに至らん。且つや其目的と云ふも、人生の眞目的にして、其究竟する所、遂に他の說明を容れざる無上の大法に合するの目的なりと言はんか。此目的說も、復た頓て直覺說に循歸せしものと云ふべし。

直覺派の難關

若し直覺派論者の如く、善惡を事物の固有となし、某事は惡なり、某事は善なりと判定せんか、大に誤ることあり。今日の如く萬國交通自由となり、各國の事情に通じ、言語風俗等を明知するに至れば、甲國民の認めて以て善と爲すものを、乙國民は之を認めて惡と爲すものある事は甚だ多し。又甲時代に善と云ひしことを、乙時代には全く惡と爲すことあり、是れ直覺派論者の大に辨解に苦しむ所なり。執齋曰く、善は性命に代へても爲さん、惡は骨を粉にすとも去らん、云々。然れども、其の知れる所、必ず良知より出づるにあらざれば、其善なりと思ふ事に、惡なる事あり、其惡なりと思ふ事に、惡ならざるものもあるべし、と。此語に依れば、良知は決して誤りて判斷することなく、其外に氣質の偏ありて、善惡を顚倒するに至ると云ふなり。然れども氣質の爲めに暗まされて、善を惡とし、惡を善とするの誤謬あらんも、之を判斷するは、依然として良知の作用ならずや。且つ其善惡顚倒と知るは、抑々何等の標準ありて之を得るや。或は甲國民の善と云ふは、良知の照す所より云ひ、乙國民が其事を惡と云ふは、氣質の偏の致す所と云はんも、是れ亦根據なきの詳論のみ。

且つ執齋は、良知の直覺を經驗的推理と區別して、知識は見聞より出で、私知按排を以て、辨へたるものなり、是も亦良知の外にあらずと雖も、人爲に亘りて、自然の明覺にあらず。故に各自從來の習慣に由り、氣質より善惡を定む。但し良知より出れば、見聞も良知なり、見聞に落つれば、良知も知識となるなりと。直覺的に善惡を照して判斷すれば、推理判斷を要せずと云ふべきも、推理的に判斷すれば、其中に良知の光明は現して判斷を爲すものなり。故に良知の自然明覺と、知識、見聞、私知の按排、即推理的判斷とは、區別あるが如し。然れども何れを何れと定むるは、遂に得べからざるなり。知レ善知レ惡是良知と云ふは、固より直覺的に判斷するの意なり。執齋が之を解するは、極めて詳密な

基礎立たず

れども、其基礎確定せず、區域判然たらず。然れども之を藤樹、蕃山に比すれば、其思想の緻密なるを知るべし。

此の如く論じ來れば、良知は善を知り、惡を知りて、倫理的究竟標準と爲るに足るも、唯主觀的標準にして、客觀的に標準と爲るべからず。主觀的の善惡とは、自己の認めて善、若くは惡とするなり。客觀的とは、一般人の認めて以て善、若くは惡と爲すものなり。此區別あれば、自己の認めて善なりとする事が、輿論と相容れずして、死に至るものあり。ソクラチースの毒を仰ぎしが如きは、職として之に由るなり。古今史上に其例尠からず。而して良知が主觀的の標準と爲り得れば、客觀的標準は、容易に確定すべからざるも、或程度までは、此主觀的標準に准じて定むることを得。然れども相待的にして、到底絶待的には確定せず。必ず多少の例外を發見せん。

意之動

意の一字は、斯學の頗る重要とする所なり。王陽明は、大學に序して、大學之要誠意而已矣と云へり。心學者は、一に誠意に從事するものなり。故に執齋は曰く、天下の事々物々の理を外に究めたりとも、我心の起る所、誠ならずば、究め得て却て害あるべし。天下の事々物々悉く知り得たりとも、我心を知らずば亦害あるべしと。而して誠とは、眞實无妄の謂なり。意とは何ぞや、執齋曰く、人心元來至善にして無善無惡と云へども血氣の生々、時として止る事なければ、必ず動かずといふ事なし。其動くを意と云ふ。其動く所、千緒萬端、是を物と云ふて、皆意のある所なり。意のある所、斯く千緒萬端と云へども、約まる所、善惡の二途に漏るゝ事なし、と。鑑空衡平にして善なく惡なき心の體は、永久に寂然不動たること能はず、瞬間も停止することなく、生々活動すれば、千緒萬端の事と爲る。而して事は或は善、或は惡と二分すべしと云ふ。此に最も猛省を要するは、其善惡は如何にして起り來るか、目的に合すると否にて云ふか、將た直覺的に某事は善なりと定まり、某事は惡なりと定まるか、一應世間にて善惡と一定したる後は殆んど標準あるが如く、大抵の辨別は爲し得べきも、其の最初の善惡を定むるは、如何にすべきか。執齋は少しも此に論及せず。恰も万古不易の尺度ありて、善惡を定むるが如く說き去れり。

萬人同性論

執齋は、王陽明と同じく萬人同性論を唱ふる者なり。曰く、夫れ學問は惡人を免かれて、善人と爲らんと欲するが爲めならずや。善人の至極は、堯舜にも進むべし、惡人の至極は、桀紂にも陷るべし、其の界は、一念の間に在り。と、最も精密なり。然れども善惡の標準を說明せざるは、遺憾なりとす。且つや堯舜と桀紂とを以て、兩極の標的としたれども、世には理想的に完全なる善人も惡人もあるとなし。且つ桀紂と云へども、其性同くして、良知を具へざることなし。凡そ支那倫理學者は、用語の精確を欠き、盲信的に放言するの傾あれば、之を熟考するに當りては、多岐亡羊の感を免れず。

何故に善を好み惡を嫌ふか

執齋は格物を論じて曰く、物とは事也。凡そ我意に寫り來る事、一身より天下に至るまで、皆な事也。吾心の好む所、是れ本体元來善なる故也。故に必ず是を爲すべし。其事の惡は、我心の嫌ふ所なり、是れ本體元來惡なき故也。故に務めて是を去るべしと。藤樹は事を視聽言動思の五事と解して、先人未發の言を立つ。執齋は事を謂つて、凡そ我意に寫り來る事は、一身より天下に至るまで、皆事也と云ふ。藤樹の解は、條目を擧げたれば、劃然たれども、執齋の言の圓滿にして、科學的なるに如かず。次ぎに一考すべきは、執齋の好レ善嫌レ惡の理由なり。彼は心の本體は、無善無惡と斷定しながら、此に本體善なるが故に、善を好み、惡なきが故に、惡を嫌ふと云へり。是れ前後矛盾の言にあらずや。彼れ已に無レ善無レ惡心之體と信ず、何ぞ之を貫徹せざるや。加之、本體善なるが故に、善を好むと論ずるも、是れ毫も理由として擧ぐるに足らず。荀子は性惡說を唱へて曰く、人性は惡なるが故に善を好むと。是れ一理なきにあらざれども、其に理由とするは非ならん。性善論者は、性善なるが故に善を好むと云ひ、性惡論者は、性惡なるが故に善を好むと云ふ。殊に知らず、性可二以爲一善。可二以爲一惡とを。而して善を好み善果を望み、惡を嫌ひ惡果を忌むは、人性自然の性のみ。豈に其他あらんや。

良心と良知

執齋曰く、良知は本體のまゝにして、人爲にわたらざるものなり。孺子の井に入るを見て怵惕惻隱するが如きは、人爲に亘らず、天命の性より、直に發出するものなり。是を良知と云ふ。又曰く、此の所レ謂心之體は、即ち人心に宿り在します天神なり。此光明は、人の意念に亘らず、自然に是非を照らす、是を良知と云ふ、と又曰く、惡念起ると雖も、本体の良知は未だ嘗て亡びず。此故に善惡を知らずと云ふことなし。良とは、こしらへたるとなく、直にすらすらと出ること也。其思ひ計らざれども、自然に知るものを良知と云ふ、と。又曰く、其害あるに至ては、良知に照して、恥しくなれど、如何ともすべからざれば、俄に驚て其不善を揜ふて、其害を顯はさんとす云々、と。孟子初めて良知良能を云ひ、又良心を云へり。孟子は此二者を異名同體と爲したるか否やを推考するは儒敎に於て緊要なる研究と信ず。王陽明が大學の致知の知を解して、良知と爲してより、後人盛んに良知を唱ふ。其後、王氏の流を汲むもの良知を致すを以て、學問修德の要務と爲せり。然れども孟子は、之を兼ね言ひしを以て、孰れを取るも孟子に反することなし。而して孟子は、良心即ち良知良能とは、明言せざりしも、良心と良知とは、同體異名の如く解する學者多し。執齋は、則ち良知を說きて、良心の如く云へり。中齋は、良知即良心也と斷言せり。吾人の見る所を以てすれば、良心と良知とは、異名にして同體なり。

一　周易遡源手記（六冊）　二　古本大學和解上下　三　標註傳習錄附錄共（四卷）　四　心學
五　正享問答　六　四言教講義（一冊）　七　孝經小解（一冊）　八　時務問答
九　服制問答　十　社倉大意　十一　詩文集　十二　歌集等

第八　川田雄琴

川田資深、字は琴卿雄琴と號す。初め梁田蛻巖に學ぶ。後ち蛻巖を介して三輪執齋の門に入り、知行合一の學を承け、精思力行を以て稱せらる。嘗て執齋に代りて、江戸下谷なる明倫堂を督す。後ち執齋の薦に因て、伊豫大洲侯に仕ふるに及で、侯乃ち明倫堂を大洲に移す。雄琴の著作は、只傳習錄筆記あるのみ。是れ執齋の講義を手記せしものにして、未だ刊行に至らず。頗る後人の珍襲する所と爲り、世間希には藏むる者あれとも、徒らに人に示さず。執齋多年王學振興に盡瘁したれども、遂に大材を出すを得ず。其箕裘を紹ぎし者は、特り川田雄琴あるのみ。

第九　石田梅巖　附手島堵庵、中澤道二

元文より安永の頃に當りて、朱王折衷の心學者出づ。其の著名なる者を石田勘平、手島蓋岳等となす。石田勘平は、梅巖と號し、初め朱學を修め、後ち肥後に遊びて、禪學を承け、又王學を參研して、一種の心學を立つ。其の著書には、都鄙問答四冊、齊家論二冊、等あり。手島蓋岳は堵庵と號す簡易切實なる心學を唱へ、毎月三の日を以て講釋を爲して、普ねく男女を教化せり。其の著書には前訓、爲學玉箒、子弟訓、商人夜話艸、塵とり、知心辨疑、坐談隨筆、會友大旨、吾が杖、ねむり覺し、安樂問辨、朝倉新話、明德和贊、町人身躰直し、目なし用心抄、新實語教、臍隱居附錄、町人身躰柱立附錄、忠孝掛物等あり。蓋し道德を以て一方に仰がれたる者ならん。而して此派心學者の傳統を尋求するに、元祖は石田梅巖、二代目は手島堵庵、三代目は中澤道二、四代目は川尻寶岑なり。又鎌田柳泓の如きも、此派に屬すべき人ならん。

手島堵庵

心學者の傳統

中澤道二

第十　鎌田柳泓

朱王一致論者

鎌田鵬は、柳泓と號す。南紀の人、文政の頃、來て京師曲肱庵に寓し、朱王一致說を立て心學を唱へて、廣く世人を薫化せり。其著はす所の書は、和漢に涉りて頗る多し。專ら簡易を旨とし、國文に施すに、平假名を以てし、之に交ふるに繪畫を以てせるものあり。今其著述目錄を見るに、四十四卷の多きに及べり。

著書

一　朱學辨（一冊）　二　心學五則（一冊）　三　中庸首章講義　門人西谷[illegible]圓筆記）（二冊）
四　理學秘訣（一冊）　五　心花餘材（四名公語錄）（三冊）　六　老子谷響（三冊）
七　老子鑑（二冊）　八　心の花實（三冊）　九　擬水滸傳（十五冊）

品評

以上の書多くは今日も猶ほ世に行はる。王學者として名聲揚らず、文學者として世に稱せられず。然れども門人西谷良圓が、「心の花實」に跋して曰く、吾柳泓先生は、博識道德の至り給へるにや、慈仁いと深遠にして、人を導くに其材の高卑に應じて敎示したまふ、其益廣大なりといふべし、と。又柳泓の友人も序して曰く、予友柳泓鎌田君は、博識强記、道德高深にして、且つ和漢の著述に富み玉へるは、人々皆知る所なり、云々といへり。是に由て之を觀れば、當時に在りては、學德を以て稱せられたること知るべし。

心の花實

心的作用を十四に分つ

本書は、心的作用を分ちて十四と爲し、以て男女人倫の要道を說けり。初め二卷は、專ら男に就て說き、末一卷は、女の爲めに敎示せり。今、其發端を揭げて、本書の一斑を推知せしめんとす。

「夫れ人の情、品多しと雖も、其要を揭て、古人は七情といへり。儒には喜、怒、哀、懼、愛、惡、欲と云ひ、醫書には、喜、怒、憂、思、悲、恐、驚といへども、太抵相通へり。予今又人の情を精分して、十四情となし、以て是を論ずべし。是れ人々をして、其情の用ひ悉を心得しめんが爲なり。其十四とは、喜、怒、哀、懼、憂、思、愛、惡、驚、苦、驕、逸、俗の、樂眞の樂なり。此十四情は、何れも善く用ふれば、功あり、善く用ひざれば、害あると、猶ほ水火の善く用ふれば、人を養ひ、善く用ひざれば、人を害するが如し。さて、又其中に本末あり、事を成すあり、破るあり、身を活すあり、殺すあり、又事を成すべき者も、過ぐれば反て事を破ることあり。事を破るべき者も、宜しきに合へば、反て事を成すことあり。身を活すべき者も、過ぐれば反て身を殺すことあり。身を殺すべき者も、節に中れば、反て身を活すことあり。

惡の一事を主とす

是等の道理を知らば、庶幾くは以て身を修め、人を導き、家を齊へ、國を治め、天下を安ずべし。さて、此の十四情の中、惡の一字、實に其根本たり。何事も思へば成り、思はざれば成らず、實に萬事成敗の根元たり。能々心得ずんば有べからず。故に孟子に曰く、心之官則思。思則得之。不思則不得と。今、人、美色を見、財利を見るときは、義理をも顧みず、利害をも量らずして、只是を得んことを欲す。其禍目前にあり。若し一度も是を思はずんば、身を亡し、家を破り、名を汚し、身を辱しめんこと測るべからず。苟も一度心附て其義理を思ひ、其利害を量らば、豈、夏の虫の火に入て自ら禍を取るが如きとあらんや。且つ怒の情なんど動くときは、家を忘れ、身を忘れ、父母妻子の難義をも忘るゝは、凡夫の常なり。恐れても恐るべきことなり。されば僅かなる過言を怒つて、人を害し、身を亡ぼす習ひ、世上に是れ多し。近く盛谷殿の如きは、其の甚しき者なり。豈に鑑みざるべけんや。此時に當て、若し一度も省み思はゞ、豈に斯禍を惹き出さんや。其他哀に由つて萬事を忘れ、懼に因つて度を失ひ、驚に因つて氣を昇ぼせ、苦によりて心を痛め命を縮め、驕奢によりて家を亡ぼし、酒を過しては、禍を生ずるが如きも、思はざるに由るなり。若し善く思はゞ、此の禍あらんや。且又書經に思作睿々作聖といひて、聖人賢人の德に至るも、皆善く思ふに由り、佛經にも如是思惟名正思惟と云ふこと、諸經に段々出せり。是れ道を覺つて、佛祖の位に至るも、只思惟に在ることを云へり。返へすがへすも思の一字、人の情の根本、萬事の樞紐なることを知るべし。

倫理的心理學

と、以下諄々譬喩を擧げて、心的作用を說けり。柳泓は、心理を談ずること甚だ詳密なれども、西洋心理學者と其趣を異にす。彼に在りては、純然たる理を說き、此に在りては、心的作用を說て、直に之を日常の倫理に適用す。或は之を倫理的心理學と名くべきか。古來七情を說く者多きも、未だ十四情に分ちて精說したるはなし。一心の作用が果して整然十四條に區別し得らるゝや否やは、更に考察を要すべけれども、分析の周到なるは、柳泓特得の見と謂つべし。

四名公語錄

四名公語錄又た單に心苑餘材と題す。陸象山、王陽明、王龍谿、羅近溪の四名公の語錄中より、心學

に適切なる者を摘記したるものなり。柳泓は、朱王一致論者にして、一種の完全なる心學を立つるを以て目的となす。然れども、間接に王學を振興するの功頗る大なりき。

第十一　竹村悔齋

竹村悔齋は、資性磊落不羈にして節義を重んず。夙とに陽明良知の學を喜び、知行合一の敎を守る。悔齋學母藩に仕ふ。藩宰某、權勢を弄して國政を亂る。悔齋憤然腕を扼して曰く、奸惡彼の如き、除かざるべからずと。乃ち上書して其陰事數十條を劾す、言行はれさるを以て辭し去る。此より詩文を以て自ら娛み、復た時事を以て念と爲さず。一日歸路藩宰に遇ふ、忽ち大喝して奸賊と呼びつゝ刀を拔て之れを刺す、斃る、再び刺して氣絕す、悔齋乃ち友人を訪ひ策を決し、家に歸りて自刄しき。時に文政十二年也。悔齋の傳記は、既に其親友の手に成れるものあり、叙事詳密にして文字蒼勁、宛然當年の狀態を見るが如く、一讀して其の性行を悉くすべし。然ども今は之を陽明學第四號に讓る。

評論

無知妄行を誡む

悔齋の行爲は、頗る過激に失するの跡あれども、是れ即ち知行合一の旨を得たるものなり。惡を知りて除かず、善を知りて行はざるは、眞知の許さゞる所なり。眞知の靈明烱々たる者は、則ち國家の害惡を見ること、恰も自己の危厄を見るが如く、瞬間も躊躇する能はず。是れ、所謂天人合一の大觀念に基きたるの行爲なり。吾人は寧ろ悔齋が、勇往直進して敎旨を實行せるを稱せずんはあらず。然れども眞知なくして妄行するが如きは、王學の最も取らざる所、陽明子は元と世人が知に止まりて行に至らざるを憤慨して、知行合一並進の說を立てたれども、亦た無知妄行を誡むること甚だ嚴なり。後の王學に志す者、豈に戒愼せざるべけんや。

第十二　大鹽中齋

平八郎名は後素、又正高といふ。字は子起、中齋は其號。德島藩老稻田氏の臣、眞鍋次郎の二男。寛政六年甲寅の歲を以て、阿波國美馬郡脇町に生る。相傳ふ、父母豐國神社に禱りて誕する所と。早とに母を喪ふ、母の緣故を以て、幼にして大坂の某に托育せられ、七歲にして大鹽氏を繼ぐ。孩提の時、既に父母の膝下を離れて遠く浪華に運ばる。溫乎たる家庭の樂は、彼遂に之を知らず、孤臣孽子其志を操ること深し、故に能く、達すと、蓋し中齋も亦た其人ならんか。天資既に峻嚴峭拔、加ふるに幼より悲酸なる境遇を經過して倍〻之を涵養す、世の凡童不運に遭遇すれば、忽ち偏僻萎縮して、復た遂に暢發せず、唯〻麒麟兒は能く其難險に處して、志氣を養ひ、心膽を鍊ふ、中齋は襁褓搖籃より早く已に逆境に入りて、畢生殆んど崎嶇に間關す。其剛直果毅の氣象は、蓋し艱難の賚多きに居らん。

悲酸なる境遇

修學

中齋二十歲にして、大阪東組與力と爲るを以て見れば、多年螢窓雪案の功を積まざりしは、亦以て知るべし。素讀訓詁は、固より塾師に就きたるべきも、何人の門下に學習せしやは知るを得ず。當時の學風は、朱子派にあらざれば、則ち考證派、考證派にあらざれば、則ち折衷派なり。江戸には朱子學の

當時の學派

中心點として林信徴、尾藤良任、柴野邦彥、佐藤坦の大家あり。京師には皆川愿あり。大阪には竹山中井積善、履軒中井積德兄弟あり、懷德書院を建て、隱然關西文學の牛耳を執る。或は曰く、中齋夙とに江戸に遊び、林家に就學すること五歲と、未だ據る所を知らず。然れども、中齋も初めは當時の風習の如く訓詁詩文を事とす。門人松浦誠之の割記跋に曰く、夫れ先生嘗て學に志すの時、海內儒風乃ち萎靡、訓詁にあらずんは、則ち文詩、躬に孝悌忠信を行ひ、以て後進を導く者は、未だ之れ有らざるなり。故に先生亦た其窠臼に陷ること久し。一旦古本大學を讀んで、其の誠意致知の旨を默識神了すと。句讀の師、固より其人に乏しからず、何ぞ必しも名師を要せん。而して其の王陽明に私淑せしは、獨學たると固より疑なし。中齋の境遇と氣質は、最も陽明學を取るに適す。彼は弱冠にして業已に刀筆の吏と爲り、簿書堆積の中に在り、勢ひ自ら知行合一を促すものあり。加之、資性峭直果毅、最も簡易直截の學に適す。彼れ嘗て朱子學の繁膠に堪へずして悶瘠するの時、一朝古本大學を讀み、豁然靈機に觸れ、遂に舊學を棄て、全く之に歸す。異域の外、三百歲を曠ふして奮然として興起す、是れ豈に偶然ならんや。王陽明も亦所謂百世の師なるかな。

古本大學より入る

仕路

中齋の仕路に在るや、早とに剛直廉潔を以て稱せらる。文政四年高井山城守實德は、大阪東町奉行と爲る。中齋は、早く其知遇を受く。高井山城守將に驥足を展べしめんとし、擢でて吟味役と爲す。是れ一小官たるに過ぎざれども、刑律を案じ、罪囚を懲らし、奸邪を摘發するの職なれば、直ちに人民に接するが故に、其人を得ると否やは、大に一般の治績に關係す。又其職に在る者も、一擧して其手腕を顯はすを得べし。中齋自ら持するや謹嚴、其事を處するや公平、學識僚屬に超え、志氣方さに豪壯なり。當時既に幕末に及び、百事惡弊を以て充さる、特に公事訴訟は、賄賂苞苴に依て左右せられたる時なり。中齋は威武も屈せず、權勢も避けず、自ら信ずる所を行ふて、秋毫も假借せず、深く賄賂の弊を矯む。快刀亂麻を截ち、利鋒盤根を斷つが如く、姦猾の同僚爲めに肝膽をして寒からしむ。此時に當りて益田貢は、妖敎を主唱して、愚民を迷はし、利を貪る。妖巫益田貢は、肥前國唐津の浪人、水野軍記の弟子なり。天帝の畫像を拜し、神文を唱へ、指を裂き血を出し之を畫像に瀝き、陀羅尼加持祈禱より、金銀を集むる法、妖術の印文に至るまで、種々の秘法を受け、今や京都八阪の陰陽師と稱す。所謂切支丹宗徒なり。中齋一擧して此大害を除く。妖巫益田貢は、大阪二鄕引廻しの上、磔に處せられ、門弟、信徒皆な刑に處せらる。此一擧や、實に、王陽明、宸濠を擒するの概なくんはあらず。是に由て平八の名、京畿に轟き、市人共に先生を以て稱するに至る。實に文政十年四月なりき。文政十二年三月、大阪西組の與力弓削田新左衛門の姦曲を指摘して、之に割腹を遂げしめ、大に官吏の風紀を振肅せり。

吟味役

妖敎を除く

官紀を振肅す

僧侶の非行を譬す

翌年、又僧侶の非行を鉤發して之を刑に處す、當時僧徒非法亂行、愚民を蠱惑して私を挾み、利を營む者比々是なり。中齋命を受けて惡僧を召し、一方には佛門の戒律を說き、一方には國家の法度を示し、深く其罪惡を責め、其罪科に應し、重きは之を遠島に流し、其餘、輕重に隨て之を處斷せり。宗敎の腐敗之が爲めに一洗し、僧徒の墮落も之が爲めに改新せり。

天保元年七月、知遇の上官、高井山城守は、老を告げ、大阪東町奉行の職を辭せり。中齋時に年三十有七。跡部良弼代りて奉行と爲り、猜忌にして心に中齋の剛直を害とす。中齋も亦七月遂に致仕す。招隱の詩に曰く、

昨夜間聰夢始靜。　今朝心地似僊家。
誰知未レ知レ人素交者。　秋菊東籬潔白花。

墳墓の地を訪ふ

此より全く世路に念を絕ち、養子格之助をして其職を嗣がしむ。乃ち閑を得て一たび尾張に遊び、祖先墳塋の地を訪ふ。中齋は、嘗て天文年間に駿、遠、參に威を震ひし今川義元の末葉なり。蓋し義元曾て尾張の桶峽間の戰に命を殞しゝより、其後子孫尾張に住したればなり。歸阪の後は、一意洗心洞の學風を宣揚するを以て任と爲せり。

交遊

近藤守重と交はる

文政二年近藤守重、書物奉行より轉して大阪弓奉行と爲る。時に年四十有九。守重豪傑の資を以て轗軻不遇、或は樺太の寒月に吟じ、或は擇捉の海風に嘯く、封侯の志、一朝蹉跌して復遂に伸びず、空しく千里の驥足を屈して圖書堆裏に跼蹐す。文學に貢献するの偉功は、則ち沒すべからざるものありと雖も、是れ素と彼れの志にあらざるなり。中齋時に二十八歲、方さに陽明良知の學に熱中し、太虛を說き、良知を致す、師とする所は、堯舜孔孟、友とする所は陸王程朱、一世を睥睨して、眼底人なるなし。年齒相如かずと雖も、英雄にあらずんば、英雄を知らずとせば、守重を知るものは、其れ唯斯人ならんか。嘗て兩雄一堂に會す、其擧止頗る彼此の氣膽を見るに足るものあり、長田偶得氏の其狀を描くものあり。

一夜其門を叩きて面會を請ふ。顧て一人の老僕出て來りて、此方へとの案内に連れ書院に打通りて、設けの座に着きぬ。されど主人は何地へ行きけん遲てども遲てども其咳聲だに聞えず、燭淚堆をなして、更漸く闌なり、平八郎衆てより重藏の傲慢人を蔑にすることを聞き知りしかば、別段心にも懸けざりしかど、餘りの待遠しさに腹立しく、偖こそ聞きしに優る無禮の曲者なれと獨語しつゝ、不圖四邊を見廻せば、床間に百目砲あり、主人の愛藏と覺ぼしく製作頗る美、銃身唐草として燈火と相射り、硝藥も亦備はれり。平八郎大に喜びて、傲慢者の荒膽挫き奚れんと銃砲取つて硝藥を裝ひ、火蓋切つて放てば、轟然として百雷の墜下せる如く、屋壁震動し、硝烟室内に充ち滿ちたり。重藏靜かに襖押開かせ、左手に烟草盆を提げ、右手烟管を把り、悠々として座に着きて曰く、一發の御手並慾心仕ると、相見の禮畢りて直ちに酒杯を喚ぶ。

既にして重藏故らに、一鍋を平八郎の坐側に置きて賞味を請ふ。何心なく盞を撤すれば、鍋はそも什麼（イカ）に一個の竈蟲々として鍋底に蠢動し居れり。平八郎少しも驚きたる色なく、呵々と打笑ひ、好下物、遠慮なく頂戴仕らんと、小柄を拔きて其首を掻き切り、血を啜りつゝ痛飲しければ、流石の重藏も其氣膽に服しけん、これより互に相往來して交情極めて親密なりきとぞ。

文政八年八月、賴山陽來りて大阪に遊ぶ。賴山陽、資性豪邁跌宕、當時京師に住し、鴨涯山紫水明處

に偃臥す。王侯に事へず、權貴に媚びず、才學宇内を壓し、史眼古今を照らす、名聲藉甚、一代の魁楚相爭て交を訂す。中齋竊かに其英風を慕ひ、山陽も亦中齋の名を聞く久し。此日山陽、中齋を訪ふ、一見舊知の如く、意氣投合、相會ふの遲きを恨むものの如し。乃ち酒杯を喚び、快談壯語、膝の前むを覺えず。中齋時に陽明全集を出し、良知を說き、太虛を談ず。山陽其說を愛し、乃ち全集を借りて去る。讀み畢りて七絕一首を賦して之を還す。

讀王文成公集　　頼山陽

爲レ儒爲レ佛姑休レ論　吾喜文章多二古聲一
北地粗豪曆城險　盡輸講學老陽明

是れより交遊頗る親密を極め、山陽遊阪すれば、先づ中齋を訪ふを以て常とす。中齋嘗て趙子璧蘆雁圖を壁間に懸く、山陽之を見て頤を朶ること久し。中齋心に之を知り、則ち斷然愛を割きて之に贈る。山陽大に喜び、乃ち長句一篇を賦して之を謝す。其後文政十丁亥の秋、山陽西備に適き、茶山翁の遺物竹杖を得て歸り、尼崎に航する比ひ之を失ふ。中齋爲めに數人を遣はし、急に之を搜索し、數旬にして獲、專价以て山陽に致す。山陽深く其厚誼を喜び、又七言古體一首を以て之を謝す。又た山陽方さに日本外史を著はすの時、來りて中齋所藏の胡致堂先生讀史管見を借らんとす。中齋元と輕しく藏書を人に貸さゞれども、山陽の著は、極めて世教に益あるを稱し、直ちに門人を遣はして之を與ふ。讀み畢りて又七言古体一首を以て之を謝す。

大鹽君、子起、假二所藏致堂管見一門人白井尙賢齎來。賦レ此爲レ謝。一讀當レ擲二付尙賢一也。

頼山陽

借レ書一癡假一癡。　惜齋自レ古總如レ斯。　誰人能如二君忱諾一。
專价來送不レ愆レ期。　況吾所レ借君所レ讀。　如下輟二大嚼一分中羊肉上。
粘紙如レ蝟朱如レ星。　豈比二牙籤手不レ觸。　起課當下刻二夜漏一深上。
半帙興亡閱二古今一。　逢レ朱逢レ紙輒拍レ案。　一燈分照兩人心。

既にして日本外史脫稿し、中齋一讀を求む。山陽乃ち寫本一部を寄す。中齋之に報ゆるに、日山所造の名刀を以てす、山陽又た七言古詩一首を賦して之を謝す。

大鹽君、子起、索二吾舊著外史一答以二其佩刀一。刀名工所レ造。陋撰不レ足二以當レ之。慙悚之餘、賦レ此奉レ謝。

頼山陽

吾書三千餘萬字。　博得君家兩尺鐵。　廉明所レ佩可レ辟レ妖。
服レ之護レ身長不レ失。　君刀疑經レ斬二姦邪一。　魚腸紋雜二血痕一點。
吾書字々頗類レ此。　此是千古英雄血。　血有二新陳一用意同。
素心相照兩如レ雪。　如三新發レ硎付二吾藏一。　及レ未二覆瓿一債二君閱一。

吾觀二吾心一吾佩二吾心一。　百歳不レ蠱又不レ折。

嘗て山陽來り訪ふ、適々中齋將さに衙に上らんとす。山陽獨り書齋に入り、古詩一篇を賦し、之を壁上に粘して去る。此一篇亦以て中齋の小傳に代ふべし。

訪二大鹽君一。謝レ客而上レ衙。作レ此贈レ之。

上レ衙治二盜賊一。　歸レ家督二生徒一。　獰卒候レ門取二裁決一。
左塾猶聞喧二咿唔一。　家中不レ納二鬻獄錢一。　唯有二鄰々萬卷書一。
自恨不レ暇二仔細讀一。　五更已起理二案牘一。　知君學推二王文成一。
方寸良知自昭靈。　八面應レ鼓有二餘勇一。　號レ君當レ呼小陽明。
吾來侵レ晨及レ未レ出。　交談未レ半戒二鞭韃一。　留レ我恣抽二滿架帙一。
坐聞蟬聲在二蒼樾一。　巧勞拙逸不レ足レ異。　但恐罄折傷二利器一。

中齋と山陽の交情

祈君善刀時藏レ之。　留レ詩在レ壁君且視。

二人の交情、管鮑も曾ならず。山陽且つ贊し且つ戒む。贊する所は、精勤修養に在り、戒しむる所は、太急過鋭に在り。世に山陽の資性氣格を知る者極めて多く、中齋の眞價を知る者極めて少し。惟彼等が管鮑の交情を推さば、則ち中齋を誤解するの失を去るを得ん。

天保元年庚寅七日、中齋致仕して一たび尾張に遊び、祖先墳墓の地を訪はんとするや、山陽序を作りて之を送る。然れども今や已に文字大半湮晦、惟其後半猶ほ讀むべし。

送序　　頼襄

奉レ送二大鹽君、子起適二尾張一序

（前半略）子起作曰。君退レ吾焉敢進。遂決レ意請レ退得レ允。聞者莫レ不レ驚愕。野人有二頼襄一。獨曰。子起固當レ然。非レ然不レ足二以爲一子起一也。吾知下彼其心壯而身羸。才通而志介。非中喜二功名富貴一者上。所レ喜在二處レ閑讀レ書。吾嘗戒下其過二用精明一。鋭進易上レ折。子起深納レ之矣。而不レ得レ已而起。爲二國家一奮不レ顧耳。衆望翕焉時。脫二去權勢一毫無二顧戀一哉。唯然。故當二其任用一。呵二斥請託一。鞭二韃苞苴一。凜然使下望レ之者如中寒氷烈日上。以得レ成二其功一爾。故觀二子起一。不レ於二其敏一。而於二其廉一。不レ於二其精勤一。而於二其勇退一。聽者以爲レ然。子起家系出二尾張一。同族在焉。今將二往省一之。身名兩全。報レ國報レ家拜二其先墳一。可レ有二以告一歟。時方秋矣。欲下路二龍田一過二中瀑一。還討中高雄、栂尾諸勝上。如二脫レ韉之鷹一。卸レ馬之馬一。餘二其俊氣健力一。自擊二于空一。騁二于野一。快如何耶。襄故言レ此且豫囑二其勿一再就レ鞴就レ馬也。文政十三歳在二庚寅一秋九月。

異種の知音

天保三壬辰の歳四月、山陽洗心洞に過ぎり、置酒高談、互に肝膈を披く。主客の知遇一朝にあらずと雖も、其學を問へば、自ら相容れざるものあり。中齋は太虛、知行合一、致良知を以て標的と爲し、山陽は、則ち歴史、文章、詩歌を以て自ら任ず。此に由て之を觀れば、其相ひ知るや必ず他に因由の存するものあらん。然れども、山陽毎に中齋の說を聽て善しと云ふ、其見識に於て相合ふ所ありしか。

中齋嘗て古本大學刮目を著はす。此日山陽其稿本を讀で、深く之を賛し、自ら之が序文を作らんとを約す。又中齋未刻の洗心洞劄記若干條を出して之に示す、山陽讀み去り讀み來りて深く聖學の奥を得るに服す。未だ其半に至らずして日已に暮る。茲に於て其上梓を待て、評論せんとを告げて袖を分つ。翌五月山陽血を咯き病革まる。中齋之を聞き、直ちに洛に上り、其家に到る。到るの日、山陽遂に易簀す。中齋哀悼痛哭して家に歸る。嗚呼、山陽、中齋を知り、中齋、山陽を知る、而して共に是れ一代の俊髦、儒林の狂逸を以て目せらるゝ者、交情日に密に、送迎愈繁からんとする時、一朝溘焉として永く相訣る、劄記の評論、刮目の序文、空しく一片の諾を留めて追慕の情を增すのみ。

山陽と中齋は、氷炭の如くなるべくして、而も管鮑の情あり。世人之を怪むは、固より其所なり。中齋も亦嘗て自ら謂ひき、

夫山陽之善屬三詩文一洞三通史事一詩客文人之所レ知。而我則嘗爲レ吏與二參訟獄一且講下陽明子致二良知一之學上者也。以二世情一視レ之。則如レ不下與二山陽一相容上然。然往來不レ斷。送迎不レ絕。何也。余善二山陽一者。不レ在二其學一而竊取三其有二膽而識一矣。山陽有二何所一觀以善レ我乎。吾初不レ識也。

蓋し二人が相得るは、氣慨と膽識に在りしが。威武も屈せず、權貴も媚びず、勇往直進、唯其の所信に任し、浩浩焉として心を百世の表に涵するは、則ち俱に共に之を同ふする所。唯其れ相契ふ所此に在りて存す、是れ世人が其交を怪み、自己も亦之を怪みし所以なり。

明年四月、洗心洞劄記刻成る。此時山陽の子餘一、江戸より藝に歸省するの途次、中齋を訪ひ、謀るに先考山陽の碑面諡號の字の大小を以てす。中齋因りて劄記一部與へ、且つ曰ひき、

吾心以爲猶レ贈二山陽一也。然山陽而有レ靈。必含下不レ盡二兩卷一之憾於中地下上也歟。而今由二其贈序之文一以觀レ之。則知レ我者。莫二山陽若一也。知レ我者。即知二我心學一者也。雖下知二我心學一則未上レ盡二劄記之兩卷一而猶如レ盡レ之也。

吾を知る者山陽に若くなしと、固より當に然るべし。而して山陽を知る者、亦中齋に若くなきなり。知己や獲難し、山陽去て復た山陽なし。山陽嘗て私かに中齋の大急過銳を憂へしが、果然中齋は、之が爲めに輕舉、事を誤りぬ。天若し山陽に假すに、尙ほ六年を以てせば、能く中齋を輔けて、救民の良策を講ぜしめしならん、嗟。

詣藤樹之墓

中齋の此行、頗る致二良知一存二誠敬一の實功を得たり。固より尋常の遊記にあらず。吾人其文を愛するにあらずして、其心術涵養に裨益多きを喜ぶ。而して中齋最も精密に其實況を叙したれば、聊か之を抄譯して其梗概を示さん。

天保三壬辰の夏六月、予閑逸無事を以て浪華を發し、伏水に至り、江州に之き、湖に泛ひ、以て中江

藤樹先生の遺跡を小川村に訪ひき。小川村は西江比良嶽の北に在り。先生は我邦姚江の開祖なり。其墓に謁し、其容儀道德を想像すれは、涙墜ちて臆を沾す。其書院は存すと雖も、今先生の學を講する者なし。其門人の苗裔、醫を業とする者、乃ち之を監守すること、恰も祧を守り、神に事ふるが如く然り。予是に於てか、詩を賦す。其詩に曰く、

院畔古藤花盡時　泛湖來拜昔賢碑
餘風有似比良雪　流滅無人致此知

と、歸る時、大溝港口に於て復た舟を買ふ。予及び從ふ所の門生、家僮と共に四人のみ。再び湖に泛び、南の方坂本に向ふ。大溝より坂本に至るの水程凡そ八里許。纜を解き緒を結ぶ、時既に未申の際、日晴れ浪靜かに、柔風の只颯々たるのみ。小松近傍より北風暴かに起りて、湖を圍み、四山各聲を飛ばす。狂瀾逆浪、或は百千の怒馬陣を衝くが如く、或は數仞の雪山前に崩るるが如し。他の舟船、皆な既に逃れて一も有るなし。其の帆を張る至て低く、只三尺强。而も其怒馬に乘じ、其雪山を踏み、以て直前勇往、箭の馳るが如き者、只是れ吾が一舟のみ。忽ち鰐津に到る。嘗て聞く、鰐津は、平日風なき時と雖も、回淵藍の如く染み、盤渦谷の如く轉し、巨口大鱗の游泳出沒する所と、乃ち湖中の至險なり。而るを況んや、風波震激の時をや。蓬を推して水面を見れば、則ち所謂地裂け、天開くの勢を爲す。奇なるかな、颶風忽ち南北兩面より吹て相ひ軋る、故に帆腹の表裏饑飽定まらず。是を以て

湖上の難

舟進て、而して又退き、退て而して又進む。右傾けば、則ち左昂り、左傾けば、則ち右昂る。踊るが如く、舞ふが如く、飛沫峻く濺き、蓬に入りて牀を侵す、實に至危の秋なりき。舟子呼て曰く、他舟皆な幾を知る、故に之を避く。某の如きは、獨り誤て前知する能はず、乃ち此に至りぬ。吁、命なるかな。然も客に對するの面目なしと。吾其言意を察するに、共に魚腹に葬らるゝの患を免れざるに似たり。因て却て舟子を慰喩して曰く、爾の誤て此に至るも命なり、吾輩此に至るも亦命なり、俱に之を如何ともするなし。只天に任せんのみ、何ぞ患ふるに足らんやと。門生家僮既に惡酒に醉へるが如く、頭痛み眼眩み、其心覆溺を慮る者の如し。予と雖も、實に死すべしと謂へり。故に憂悔危懼の念を起さざるを得ず。是時忽ち藤樹書院に於て作る所の無人致此知の句を憶ひ、心口相語りて曰く、此即ち其の良知を致さざるの人を責むるなり。而るに我若し憂悔危懼の念を起して、自ら責むることなければ、則ち躬を待つこと薄くして、人を責むること却て厚し、是れ恕に非るなり。平生學ぶ所果して何くに在ると。直ちに良知を呼び起せば、則ち伊川先生の誠敬を存するの言も亦一時に起り來れり。因て其颶動中に堅坐すれば、乃ち伊川陽明二先生に對するが如く、主一無適、我の我たるを忘る。何如に況んや、狂瀾逆浪をや。憂悔危懼の念、氷雪を熱湯に投ずるが如く、立どころに消滅して痕なし。此より凝然動かず、而して颶風も亦自ら止み、柔風依然舟を送り、終に坂本の西岸に着きぬ。此豈に天に非るか。時に夜既に二更なりき。門生家僮皆な回生の思を爲して、互に恙なきを賀し、遂

死に瀕す

致良知存誠敬の工夫

晴朗湖上の佳景

に坂本に宿す。明日曉天晴朗、乃ち比叡山に登り、四明の最高を盡くす。俯して東北を視れば、則ち蓮湖淼漫、疇昔經歷せる所の至險皆な一眸の下に在り。風無く、浪靜かに、水光天を浸たす、實に一大圓鏡なり。漁舟點々蘆子の如く、帆檣數千、東に去り、西に來る。平地よりも易く、危懼すべき者なきに似たり。是に於て、門生余に謂て曰く、昨日の憂悔危懼は、抑も夢か、亦た天吾師を譴めしかと。余曰く否な、夢に非ず、眞境なり、天譴に非ず、我を金玉にするなり。何となれば、其變に逢ふにあらずんば、則ち焉んぞ眞の良知と、眞の誠敬を窺ふを得んや。又焉んぞ眞に伊川陽明兩先生に對するを得んや。故に曰く、眞境にして夢に非るなり、我を金玉にするものにして、天譴に非るなりと、然らば則ち福にして、禍に非るなり。諸子亦徒らに憂悔危懼の事を追思するなくして可なり。且つ諸子何ぞ復た夫の城邑を視ざるや、其れ近く杖屨の底に在りて、蜂窩蟻垤の如き者は、富貴貧賤の同しく棲む所なり。故に余は、却て夫子が東山に上りて、魯を小なりとせし興を得て、心廣く體胖かなり。眼豁かに、脚輕し、諸子も亦宜しく共に是の興味を同じくすべしと。是に於て又詩を賦しき。詩に曰く、

我れを金玉にす

京師を眺む

四明不獨盡湖東　西眺洛城眼界空
人家十萬塵喧絶　只聽一禽歌冷風

胸中益〻灑灑然として、一點の渣滓なきを覺えき。因て謂へらく、吾輩纔かに其境に即きて良知を呼び起し、誠敬を存するも、猶ほ且つ至險を忘れ了りぬ。今や嶽に登りて萬死の處を顧みると雖も、毫も心寒股慄の態なく、湛湛悠悠、却て心は聖人同一焉の興を得たり。而るを況んや、伊川先生の如く、晝夜を通し、語默を徹して誠敬を存すれば、則ち其の堯舜の事と雖も、只是れ太虛中に一點の浮雲、日を過ぐるが如しと謂へるは、實見にして虛論に非ること、斷じて知るべしと。適々先生涪州の水厄を記せるに因みて、遂に又余が湖上の事に及びぬ。此れ比して以て夸言するに非ず、只人をして良知を致せば、即ち是れ誠敬と爲り、誠敬を存すれば、則ち良知昭昭然として、日月の如く、初より二致なきを知らしめんと欲するなりと。

天保四癸巳の歲四月、洗心洞劄記の刻成り、中齋は之を四方の名家、特に姚江の學を喜ぶ者に寄贈して、之が評論を求めたり。其顯著なる者を擧くれば、岡藩臣角田簡、津藩侍讀齋藤謙、柳川藩儒官牧園雞、御室宮家士杉本祐憲、島原藩儒臣川北重熹、筑前の大友參、安藝の吉村晉、幕府騎吏淺井中倫、彥藩太夫宇津木泰交、林氏の塾長佐藤坦等なりき。一齋佐藤坦は、當時碩學鴻儒を以て一世に重きを爲せる者、聖堂の祭酒、儒林の泰斗、學德年齒並に高く、已に久しく世の耳目を惹く、陽に朱子を講じて、陰に王子を景仰する者なり。一齋は、洗心洞劄記を閲し、七月朔を以て答謝の書を致しき。其文に曰く、

陋簡拜啓、未接紫眉候處、秋暑時節御佳裕被成御興居奉抃賀候。抑先頃者、間生へ御轉托にて高著

洗心洞劄記二冊被惠、副以眞文手教辱致拜受候。眞文拜復可致之處、人事紛忙、且老境精力薄相成候間、俗通書不取敢御報申述候。御恕察被下度候。先以兼て御芳名傳承罷在、以津楚者拜顏致し度存居候處、此度不圖御手牘に預り、御履歷且御志操之概、詳悉被仰示披雲同樣に存し、欣登不少奉存候。

敬服

先達而問生出府之砌も、御劄記中抄出之冊子問生より被示、今又新刻全部御惠被下反覆致拜覽候所、數條御實得之事共、使人感發興起不勝欣躍、拙老なぞ可及所に非すと奉存候。就中太虛之說、御自得敬服候。拙も兼々靈光之體即太虛と心得候處、自己にて太虛と覺え、其實、意必固我之私を免れず、認賊爲子之樣に相成難認事と存候。貴君精々此所御着力被成候得は、即御得力爰に可有之と存候。尙も實際に御工夫被着かしと祈入候事に御座候。扨又拙も姚學を好み候樣被仰越候處、何も實得之事無之赧羞に堪ず候。姚江之書、元より讀候得共、只自己之箴砭に致し候のみにて、都而之

陽朱陰王

教授は、並之宋說計に候。殊に林氏家學も有之候得は、其碍にも相成、人之疑惑を生し候事、故餘り別說も唱不申候事に候。且又江都にては群侯百辟之間に周旋致し候事に候得ば、何學なぞゝ申事詮も無之。只自己に而乍不及、迪哲之實功を骨折、夫よりして君心之非を格し、遂に治務之間にも預り候得は、漸々人之家國に寸補可有之哉に存候。兎角人は、實を責ずして、名を責るものかと被存候。名にて教之害を成す事少からず候得は、務て主張之念を袪りて、公平之心を求め度候。左候得ば却て教化之廣く及申候事有之哉と被存候。返す々も其實無之而者、何學に而も埒明不申、たゝ自已之

警戒

實を積候外無之とのみ心掛候得共、扨々十が一も存意通に參らず浩嘆に堪す候。愚意之概聊申試候。尙御垂教被下度候。將亦御劄記中前人未發之條不一而足候得共、堯舜之上善無盡、殊に御年齡强壯之御事、此後幾層御長進可有之歟不可測と御賴敷存候事故、申迄も無之愈益御深造之處翹望に堪す候。御著篇□へ示し可申之旨致承知候。未だ案上に指置き申候。何れ見せ可申候、左樣御承知被下度候。且又眞文拜答不致候に付、雜文三篇塾生認置之儘、呈覽乞正申候。不滿貴意候所は、御指摘を厭不申候。尙追而御文通可申罄候。先拜復鳴謝迄如是御座候。時下玉燭不調、爲道御自保可被成候。恐惶頓首。

奬勵

七月朔書封

佐藤捨藏

大塩平八郎樣

坦（書印）

惟ふに、當時に在りては、一齋の言動は、世人の俱に瞻仰する所なれば、此一書は、直に中齋及其著劄記の價値を評定したらん。書中或は揚、或は抑、又は奬勵、又は訓誡、推服するに似て、而も自ら地歩を占め、特得の見を稱して、而も一家言の主張を斥く、諄々說き去り說き來りて、人をして自ら其說に服せしむるものあり。宛も老將の兵を用ふるが如し。老手腕、實に驚くに耐へたり。

登富嶽

中齋洗心洞劄記の成れるを待ち、一本を伊勢の神庫に献し、一本を富士の高嶽に埋めて、龍門司馬氏の故事を襲ひき。蓋し中齋が一生の心血、半ば此書に在りと云ふもの、天地神明に質し、之を不朽に傳へんとするなり。此行、頗る歸太虛の實功を得たるを覺ゆ。

歸太虛の工夫

大鹽中齋

登富士山

口吐太虛容世界　太虛入口又成心
心與太虛本一物　人能存道只今乎

二

千年雪映千年月　況復紅輪未曉昇
下界秖今猶夢寐　枕頭暗々五更鐘

中齋大鹽君見過訪聞其話七月十七日登富嶽

平松正愨

宵行經盡老松林　巖際登登盡峻岑
日色纔生滄海底　月輪高掛太虛心
帶將寶劍山靈泣　藏了新書石室深

懷古長吟小天下　寥寥何歎少知音

聞中齋大鹽君登富士山賦之以寄

福井晋

勇退恬然早致勞　漫遊山水養餘豪
芙蓉八萬三千丈　爭及先生氣宇高

奉次洗心洞先生賦太虛高韻

杉本祐憲

太虛一氣生軀殼　軀殼私心害箇心
軀殼太虛知本一　人心豈有古兼今

教學—教育の主義

中齋は、既に山陽が、衒に上りては盗賊を治め、家に歸りては生徒を督す、と詠せしが如く、夙とに餘姚學派の繼紹者として、洗心洞を開き、吏務の餘暇、文武の道を講じ、子弟を薫陶す。文政八乙酉の歳正月に至り、洗心洞學堂の掲示を爲す。

王陽明に賜る

學堂西掲

入吾門學道。以忠信不欺爲主本。乃記陽明先生示龍場諸生語。以掲示。宜服膺。

立志　勤學　改過　責善

于時文政八乙酉正月十有四日

學堂東揭

入吾門欲爲人。則要道問學以尊德性。誌新吾先生之語。後學者。以揭示。宜識察焉。

堯舜事功。孔孟學術。此八字是君子終身急務。或問堯舜事功。孔孟學術。何處下手。曰。以天地萬物爲一體。此是孔孟學術。使天下萬物各得其所。此是堯舜事功。總來是一個。

念頭脫盡氣習二字。是英雄。

學必相講而後明。講必相直而後盡。孔門師友。不厭窮問極言。不相然諾承順。所謂審問明辨也。

故當此時。道學大明。如撥雲披霧。白日青天。無纖毫障蔽。講學須要如此無丙堅自是之心。惡人相直也。（下略）

（呂新吾に則る）

于時文政八乙酉正月十有四日

東西の揭示は、中齋が教育主義にして、洗心洞の學風の根幹なり。濟々たる多士は、將に此門より輩出せんとす。

文政十一戊子の歲十一月を以て、王陽明を洗心洞の學堂に祭る。其文に曰く。

維大日本文政十一歲次戊子。十一月二十有九日。浪花市吏大鹽後素。謹以清酌蔬羞之奠。昭祭于明新建侯陽明王先生之靈。嗚呼。先生豪傑而聖賢。武略而文章。征誅寇賊。開導衆生。當代孔孟。後世伊姜。中畧予生異域數百歲後。難討要領。默々株守。不能出頭。庶乎猿狖。夢寤之間。有人相授。所授果何。聽誠意講。偶購全書。讀一二句。忽知心非。又識學謬。專識研磨。嬰心肺疚。欲死再三。藥救不奏。祖母病卒。外祖終壽。悲哀刺骨。病勢益厚。何幸反蘇。不知誰救。在天之靈。不然天祐。斷然立志。不吝事口。躬行實踐。宗脉無負。願先生助予不使此心朽。殺身成仁。固予所懋。清明如在。靈鑑何咎。嗚呼。格死。享予祭祀。

德業を仰ぎ、遺澤を讃すること、縷々三百三十有五字。中齋が初めて良知の靈機に觸れし狀を告げ、又所願を陳べて曰ふ、願くは先生予を助けて、此心をして朽しめざれ。身を殺して仁を成すは、固より予が懋むる所と。在天の王陽明、必すや斯の祝言を納れん。中齋は、業已に此確乎不拔の志氣を有す。是れ彼が後日饑饉の時に際して、殺身成仁の言を實踐したる所以なり。其後文政十三、即天保元庚寅の歲、決然勇退して後は、純然たる洗心洞の嚴師として、開導誘掖に心力を竭くす。遠近教を請ふ者千有餘人。中齋目ら其志望を述べて曰く、吾既に職を辭して、而して隱を甘んず、險を脫して、而して安に就く、宜しく高臥して、勞苦を舍て、以て自性を樂むべし。然るに、夙に興き夜はに寢て、經籍を研き、生徒に授くる者は、何ぞや。此は是れ事を好むにあらず、是れ口を糊するにあらず。詩文の爲めならず、博識の爲めならず。又た大に聲譽を求むるを欲せず、再び世に用ひらるゝを欲せず、只學で厭はず、人を誨へて倦まざるの陳迹を扮し得んのみ。世人怪む勿れ。又罪する勿れ。嗚呼、心、

太虛に歸するの願は、則ち誰か之を知らん、我獨り自から知るのみと。

學說

第一綱領——太虛說

吾人中齋子を讀まされば、則ち止む。苟も之を讀まば、必ず其太虛主義を審明せさるべからず。太虛主義は、中齋哲學の根柢なり。中齋の書、幾千萬言に及ふと雖も、唯一の太虛主義を以て之を蔽ひべし。書中橫說竪說する所、皆此の太虛主義の敷演にあらさるはなし。是れ恰も孔子の仁を說き、孟子の仁義を說き、子思子の誠を說き、老子の虛無を說くが如し。中齋は、太虛を以て唯一の理想と爲し、終生此の理想に接近せんことを務めたり。中齋は畢生の志願として、唯此太虛に歸することを務めたるものなり。故曰、嗚呼、心歸乎太虛之願。則誰知之乎。我獨自知焉耳、と。中齋子滿腔の精神は、之に向つて發揮し、畢生の心血は之に向つて注射せらる。而して其書中に太虛を說くこと、精密周到、圓融無礙にして、更に餘蘊あることなきは、以て其造詣の深遠なるを知るべし。

吾人は、今太虛說を論ずるに當りて、初めに太虛の體を說き、次ぎに其用を說き、終りに其太虛に歸するの工夫を說かんとす。

第一　太虛の體

中齋は、虛と云ふ一條の金管を以て、大は宇宙の太虛より、小は原子間の空隙に至るまで、悉く之を貫通網羅せんとす。換言すれば、彼は有形的空虛と、無形的空虛とを論せず、客觀的と、主觀的とを問はず、自然的と人爲的とを言はず、悉く相融通して無礙なるものとす。而して最初に天と云ふ語を以て、蒼々たる太虛と、石間虛、竹中虛と谷神即人心を融通了得せり。其言に曰く、天不二特在一上蒼々太虛已一也。雖二石間虛。竹中虛一亦天也。況老子所一云谷神乎。谷神者。人心也。故人心之妙與一天同。於二聖人一可一驗矣。常人則失一虛。焉足一語一之哉。中齋は、努めて空語を避け、必らず其驗符を求む。故に每語の終には、必ず其實用すべきことを以てせり。已に天人共に太虛なりと雖も、私欲の爲めに、心の虛を失へるものは、共に其妙を語るを得ず、只聖人に於て之を驗すべきのみと云へり。又曰く、身外之虛者。即吾心之本體也、と。其語極めて大なり。故に或は之を了解すること難からん。所謂其大を語れば、天下能く載するなしと云ふもの是なり。然れども其序を追て之を語れば、其義甚た曉得し易きものあり。故に彼れ曰く、方寸之虛與二口耳之虛一本通一。而口耳之虛。即亦太虛通一。而無一際焉。包二括四海一。含二容宇宙一。不一可二捉捕一者也、と。此の如く說き來れば、天下能く載するなきの大も、了々然として理解し得て、手の舞ひ、足の踏むことを覺えさるものあらん。

以上の如く融通普遍にして、方寸の虛は直に宇宙を含有すべしと雖も、若し其間一片の障礙來らんか、忽ち一大變動を見るなり。其變動たる、直に死生に關するものにして、心の虛盈は、即ち生死と云ふ

空言なし

べく、其虚は、實に生命の妙機なり。故に曰く、方寸之虚、與二太虚一不レ可レ不二刻而通一也。如隔而不レ通焉。則非二生人一也。何者今以レ物塞二乎口中一。即方寸之虚。閉而呼吸絶矣。忽爲二死人一。故方寸之虚。不レ可レ不二刻通一於太虚一也。是無レ他。以二太虚即心之本體一故也と。説き得て明切、更に疑ふべきなし。然れども彼は世人が此妙理を誤解せんことを恐れたり。故に種々の方面より太虚の妙を説けり、即ち理氣合一より太虚を言へり。人若し理氣合一を了解すれば、太虚は、則ち理氣に外ならざれば、自ら之に悟入するを得ん。若し理氣を離れて太虚を言はゝ、荒唐無稽の太虚と成り了りて、我所謂聖人の道にあらずと。彼曰く、了二理氣合一一。則太虚亦惟理氣焉耳。如離二理氣一。而言二太虚一者。非二四書五經聖人之道一也と。此點に在て釋老に陷り易きものあるを以て、特に理氣を以て之を説く、盡せりと謂ふべし。今、藤樹の圖解を以て之を説かば、口は理なり、寂然不動に象り、○は氣なり、流行活動に象る。此理氣、之を太虚となすなり。釋老の太虚は、寂然不動のみにして、所謂槁木死灰の如きものなり。流行活動、生々不息の妙機なし。此一點は我道と釋老との同しからざる所にして、之を區別すること極めて緊要なりとす。

心は心臓なり

中齋は、心と云ひ、方寸の虚と云ひ、又太虚と説くこと甚だ多し。而して此等の虚は、相互に連絡するものとす。今、中齋 所謂心とは、如何なるものなるかを討究するは、尤も緊要なる事と信ず。夫れ中齋が心と云ふは、即ち五臓中の心臓を指して云ふものなり。心臓は、即ち心にして、此外別に心あるとなしと云ふ。而して五臓中の心臓は、其大さ僅に方一寸なりと。彼れ曰く心即五臓之心 而不二別有二心也者一也。其五臓之心。僅二方一寸。而蘊二蓄天理一焉と云ふ。然らば則ち心は、即ち方寸の虚にして、天理を包含するものと云へり。而して中齋は、唐凝庵の説を引き、其説を證して曰く、唐凝庵曰。性不レ過下是此氣之極有二條理一處上。含二氣之外、安得レ有レ性。心不レ過二五臓之心一。含二五臓一之外。安得レ有レ心。心之妙處。在二方寸之虚一。則性之所レ宅也と。此に由て之を觀れば、心臓を以て仁義禮智の出つる所にして、一切の德義は、悉く此れより出つとしたる説は、中齋に在りては創見なれども、之と暗合する説は、既に以前より在りしなり。故に、吾説不二與レ之期一而同レ符と云へり。

心體を説く

從來、心とは何そやと云ふ問題は、困難にして、今日と雖も、明確に一定せる説なきが如し。而して心臓を指して心なりと云ふ説は、業已に勢力なきが如し。然れども其心臓即心と云ふ心は、如何なるものかと云ふに、中齋は之を解して虚靈なるものにして、善惡共に無く、虚空なれば能く神明の用を爲すと云へり。即ち曰く、心體虚靈而已矣。惡固無。雖レ善不レ可レ有。如先有レ善而塞レ焉。則神明終不レ能レ爲レ用也と。其意を尋ぬるに、虚靈にして神明の用を爲すものと云へは、朱子の所謂心者人之神明。所下以具二衆理一而應中萬事上者也と云ひ、又、心者虚靈不昧と云ふと異なることなし。而して心に善なく惡なしと云ふは、陽明子の所謂無レ無善レ惡心之體。と云ふに同し。而して其無善無惡の心は、即ち太

虛なれば、君子は致知格物し、以て其體に歸せんことを務む。已に太虛の體に歸すれば、萬事萬物は皆な其中に涵容し、日用の應酬より、以て天地位し、萬物育するの最大功德に至るまで、皆此より出つと云へり。心を說く、蓋し盡せりと謂つべし。

心身の關係

中齋は、心身の關係を論して、太虛を證せり。曰く、自レ形而言則。身裏レ心、心在二身內一焉。自レ道而觀。則心裏レ身、身在二心內一焉　其謂三心在二身內一焉。一遺二操存之功一。則物累レ我。其覺三身在二心內一者。常得二超脫之妙一。而我役レ物と。若し常人の如く拘泥して、心は身內に在りと云ふときは、卑近なる義理も一生之を了解する能はず。然れども一旦身は心內に在りと曉悟したらんか、直に萬物の理を領解するを得ん。何となれば心外の虛は皆な吾心にして、萬物往來起伏の地なればなり。換言すれば、唯此心の理を達觀し得ば、萬物の理も亦通曉し得るなり。彼曰く、拘而謂三心在二身內一者。十目十指之義。一生不レ能レ了レ之。悟而識三身在二心內一者。意一欲機一動時。非二特十目十指一焉。蓋以爲天下之所二視指一。何者以二身外之虛皆吾心而萬物往來起伏之地一故也と。心は己に萬物往來起伏の地なるを以て之を虛と云ふも、理氣を離れたる空虛にあらず、其空虛にあらざることを知るは、人欲を去り、天理に復したる後にあり。故に常人之を知るに苦むなり。即ち彼れ曰く、「太虛非レ空。即春夏秋冬之氣。元亨利貞之理。徧布充滿焉、と。己に其理あり其氣あり、之が發して物に著はるれば、愚夫愚婦も之を視之を識るべし」然れども其氣と理の未た物に著はれさる時は、大人君子も眼之を視るを得ず、只默識心通

理氣の妙用

するのみ。而して理氣を默識心通するは、固より愚夫愚婦の企及すべき所にあらず、此れ太虛の妙の知り易からざる所以なり。

茲に於て彼は更に一歩を進めて曰く、春夏秋冬。自二太虛一來。以終二始萬物一。而循一環不レ息。毫無レ跡也。仁義禮智與レ此一般。故心虛則謂二之天一非二大言一也と。此の如く太虛の体を說き、太虛は決して空にあらざることを明にしたれば、彼は更に確實なる例を以て太虛を證して曰く、聖人即有言之太虛。

太虛の非空

太虛即不言之聖人と。之れを聞くもの、誰か太虛の非空を首肯せさらん。己に聖人と太虛と同一體なるを示したれば、之を孔聖と顏亞聖に就きて例解せり。曰く、顏子屢空。心屢歸二乎太虛一。而猶有二一息一。聖人則徹一始徹一終一太虛而已矣と。私欲の念悉く掃蕩して心常に太虛を有し、萬物往來起伏の地たらしめば、則ち有言の太虛たるべし。而して孔子は實に其人なりと雖も、顏子は未た毫髮の私欲を存するが故に、之を太虛と云ふを得すと。說き去り說き來りて、明白痛切、亦疑ふべきなし。聖人は即ち不言の太虛なり、太虛は世界を容れ、世界は太虛を容る、萬物此間に千變萬化して、未た嘗て太虛を障礙する能はす。聖人の心量、一毫の累なきや、亦是に於て見るべきなり。而して中齋は實に此の有言の太虛たらんことを以て、畢生の志願としたるものなり。

聖人の心量

第二　太虛の用

中齋既に太虛の體を說くこと、周到なりしと同しく、其用を說くも頗る精緻を極めたり。彼は虛の種

類を自然的と、人爲的との二つに分てり。其言に曰く、虛亦有下人爲之虛與二天成之虛一之別上。人爲之虛者即宮室空豁之類也。天成之虛者即人物心口之類也。人爲之虛乃不レ靈而天成之虛皆含二其靈一、而人受レ之以最秀者也」と。是れ二種の虛なり。而して天成の虛の神靈なるは、私欲なき時に於て然るのみ。

二種の虛

然れども若し一點の私欲ありて、其秀靈なる天成の虛を塡充せんか。其靈は忽ち失ふに至らん。若し能く私欲を除却して、其虛を存せは、其靈は神の如し、而して人爲の虛も元來心なければ依然として物を容れ、終始あることなし。故に虛の効用の大なるを知るべし、況や太虛の用をや。彼は更に一歩を進めて、太虛の用を說きて曰く、仁也者即太虛之生。義也者即太虛之成。禮也者即太虛之通。智也者即太虛之明。信也者即太虛之一。是皆太虛之德之用也と。而して此五常は各人の先天的に具備する所なれども、修道に依て之を發達するにあらざれば、昏闇なること長夜の如くにして、有れども猶は無きが如し。唯學て而して其德に率由し、以て之を行ふときは生ける人と云ふべきなり。中齋か萬人同性論を唱ふることは、種々の點に於て見るを得べし。而して或は聖と爲り、或は賢と爲り、若くは小人と爲り、若くは愚不肖と爲るは、他なし、唯私欲を去りて、太虛に歸するの功の多少に由るのみ。

五常と太虛の用

人と聖の差

中齋更に太虛の用を說き、太虛に歸すると否やに由て、人間と器物の差を生すと云へり。其言に曰く、心歸二乎太虛一。然後實理始存焉。不レ歸二乎太虛一。則實理埋沒了。與レ物不レ異と。茲に所レ謂實理とは元亨利貞是なり。實理已に埋沒し了れば、人にして人にあらず、其靈何くにかあらん、實に恥づべきの至なり。彼更に詳論して曰く、太虛即實理實氣。充塞滿布。而有下形之類。雖不レ虛二乎中一者上。亦皆有二至虛之存一焉。見二草木一可レ知と。有形の類は一見充實して虛なきか如くなれども、其實は至虛の存するありて、理氣は滿布せるを見るべしと云ふ。今至虛と云ふは、物質分子間の空隙を指すなり。其質は如何に堅實なるものも、至虛の存せさるなく、既に虛あれば、必す理氣は存せさるなし。彼既に人爲的と自然的との別を云ひ、此に又た有形的の空虛と、無形的との別を言へり。然れども彼は偶〻區別を擧けて說くも、其意は唯共通の虛ありて、理氣の存するを言はんとするのみ。故に區別するに意なくして、兩者の虛を混同融通するに資するなり。彼が見二草木一可レ知。と言ふが如きは、博物學も亦斯學を補益するを知るべし。而して彼は唯〻心を知るを先とし、動植物の學を以て、勞して功なきものとせり、蓋し誤れりと云ふべし。

有形物と虛

博物學の功

中齋の太虛を說く、佛老の弊に陷らす、必す確實明白を主として人に示す、深く陽明子の旨を得たりと云ふべし。若し虛を說きて理氣を離れんか、是れ全く佛老の流亞のみ。故に特に審かに理氣を言ひ、日用活動の應酬に論及せり。此に於て初めて太虛の用を世に適用すべし。彼更に太虛の妙用を明かして曰く、水孰令レ流レ之哉。石孰令レ堅レ之哉。山孰令レ峙レ之哉。海孰令レ潮レ之哉。雲雨孰令レ翕二張之一哉。日月孰令レ往二來之一哉。視レ之不レ見。聽而不レ聞。一言以蔽レ之。太虛之德。善孰令レ生二息之一哉。惡孰令レ消二滅之一哉。忠孰令レ勸レ之哉。邪孰令レ懲レ之哉。父子孰令レ親二愛之一哉。上下孰令レ泰二和之一哉。

人我一貫

此亦太虛之德之所レ致耶。嗟夫。吾不レ知ニ其何如一也」と。已に太虛に歸すれば、凡百の事物は皆な吾心中に往來起伏するが故に、宇宙の萬象、天下の百事は、皆な我分内の事と爲り、道と學と遂に際涯なきに至らん。

中齋は更に、詳密に、太虛に歸したる後の德を示して曰く、夫人之嘉言善行。即吾心中之善。而人之醜言惡行。亦吾心中之惡也。是故聖人不レ能ニ外ニ視之一也。齊レ家治レ國平ニ天下一。無ニ一不レ存ニ心中之善一。無ニ一不レ去ニ心中之惡一。道與レ學無ニ崖際一。可レ見矣。而して彼は謂へらく、惡人の刑に罹るは、聖人の心を刑するなり、吾心の惡を去るなり、悲まざるへからず。善人の賞に遇ふも、亦聖人の心を賞するなり。吾心の善を存するの道なり、喜はさるへからず。若し人の善を娟嫉し、人の惡を歡喜する者あらば、是れ吾心を以て吾物と爲すの小人にして、聖人太虛の心にあらざるなりと。太虛の用を說く、迂餘曲折、遠しとして及はざるなく、近しとして遺すことなし。中齋は太虛の德を以て無際限のものとなし。遂には水流石堅、山峙海潮、善息惡消、忠勦邪懲等。大は宇宙創造の大源より、小は天象地文倫理綱常に至るまで、悉く之を太虛の德に歸せんとす。彼の觀念は唯太虛のみ、宇宙の間、微塵毫髮と雖も、太虛を以て觀察せざるはなし。

第三　太虛に歸するの工夫

中齋は太虛を以て理想とし、此理想に到達するを以て、最大目的としたれば、其工夫を凝したることも、既に尋常一樣にあらず。之を彼の言行に徵するに、或時には曉行忽値レ雨而無ニ簑笠一。頭項迄ニ手脚一盡露。是時心爲レ之動。即方寸之虛。亦復露也。不レ動則太虛之不レ露乃一般。因レ此又悟ニ入一水不レ濡之理一と。又曰く、曉行聞ニ寺鐘一。又聞ニ村鷄一と、此の如くして太虛を悟り、之に歸するの工夫を凝らせり。

工夫の狀況

注意の周到實に稱するに堪へたり。中齋は時々刻々、造次顚沛にも、太虛に歸するの工夫を廢せざりしが如し。中齋の登富士山の句に曰く、「口吐ニ太虛一容ニ世界一。太虛入レ口又成レ心。心與ニ太虛一本一物。人能存レ道只今乎」と。視聽言動思一として太虛を忘るゝことなし。然れども人或は其工夫を爲すの順序を誤るものあれば、乃ち誡めて曰く、「非レ積ニ陽明先生所レ訓致良知之實功一。則不レ可レ至ニ於橫渠先生所レ謂太虛之地位一。故欲ニ心歸乎太虛一者宜レ致ニ良知一矣。不レ致ニ良知一而語ニ太虛一者。必陷ニ於釋老之學一。可レ不レ恐哉」と。太虛に歸するには、先つ致ニ良知一の功を積むべし、心學を修むるもの、動もすれば空禪虛老の弊に陷るの恐あれば、之を戒むること極めて切なり。

弊を戒む

中齋專ら太虛に歸して後に、仁義を行ふへきことを言へは、或は未た太虛に歸せさる者は仁義を行はすして可なりやの疑を發するものあり。故に曰く、「未レ歸ニ乎太虛一者。不レ自欺一。自謙。誠レ意之功夫。徹動徹靜。徹晝徹夜終始一焉。便是爲ニ仁義一之道。而歸ニ乎太虛一之竅也」と。仁義を爲むるの道は、即ち太虛に歸するの徑路なることを知れば、未た太虛に歸せざるものと雖も、豈に仁義を忽にすべけんや。又彼は聖賢の時中と、世俗の巧僞とを辨別して、歸太虛の功夫を示して曰く、「心之太虛、既復。